

丹波の生れとばかりで、その履歴の詳しい事は判らないが、小林安兵衛と、いふ人が在った。
 地方有志の一人として、東京へ、出て来た、といふて、自由黨本部へ、出入して居たが、頗る落付きのある人物で、殊に、佛典を、深く修めて、辯舌にも巧みであつた。非常に、金の切れ離れもよく、人に對する、應接の調子は、何ともいへぬ呼吸があつて、只だ視れば、柔和な人であるが、何時も懷裡には、七首を、忍ばせて居た。
 或時の演説會に、頗る過激な説を吐いて、それからといふものは、其筋の注意が深くなつて、彼の行く所、必ず密偵の尾行が伴ふので、黨内にも、彼の身上に、多少の疑ひを、持つものがあるやうになつた。
 そのうちに、何時居なくなつた、といふのでもなく、至て煙りの消える如く、彼の姿は、見えなくなつた。
 『どうも、彼奴は變だ、と思つたが、自分から身をかくしたのは、一層可怪しいぢやないか』
 『可怪しい所はあつたが、併し、膽力は太かつたな』
 『あの眼が、どうも恐ろしかつた』
 『何か云ひながら、チロリと、睨んだ時の眼は、何となく凄い所があつたよ』
 『漢籍と佛典は、よほど讀んで居たやうだ』
 『イヤ、學問ばかりぢやない、腕ツ節も、なか／＼強かつたぜ』
 『うむ、さう云はれると、思ひ出すが、芳原行き途中で、巡查やゴロツキを、投げ飛ばした時の、腕力と早技は、今でも、眼に残つて居るが、全體、どういふ人物だらう』
 『丹波のものだ、と、聞いて居る。』
 『そりやア、彼が云うて居るのは然うだが、實際は何者か、よく知つて居るものは無からう』

『何しろ、變な奴だツたな』
 『密偵が、いつも尾いて居た所から考へると、前科者らしくもあるが、どうも變だ』
 『急に居なくなつたが、どこへ行つたのだらう』
 『二三人集まれば、いつも、小林の噂ばかりで、あつたが、時の經つに従つて、自然と、噂も薄らぎ、今は小林の事なぞ云ふものも無くなつた。』
 それから、半年ほどすると、群馬縣の一之宮に在る、光明院といふ、寺の住職に、日比遜といふ坊さんが坐つて大層な評判であつた。
 『いかゞです、今度の御住職は……』
 『大それた御方ですな』
 『あの御説教を承はつては、どんなものでも、信者になりませうよ』
 『御人體が立派で、學問が深くて、説教が御上手で、人の難儀を、救うて下さる、といふのだから、誰れでも感心しますよ』
 『どここの御方ですか』
 『何でも、大和のお寺から、廻つて來られた、といふ事を、聞いて居りますが、大それた御方だ』
 光明院へ出入するものは、こんな事を云ふて、住職の難有い話で、いつも持ち切りであつた。
 日比遜、實は、小林安兵衛である。
 どこを、どういふ風にして、密偵をまいて、東京を忍び出たのか、又、どこからどうして、此處へ、やつて來たのか、その邊の事は、少しも判らないが、恰かも風の如く、現はれて來て、忽ちにして住職になつてしまつた、といふ

物凄(ものあさま)い遺方(やつかた)には、後(のち)になつてから誰れ一人として、驚かぬものはなかつた。

昔(かし)から、人のよく云ふ怪物(くわいぶつ)とは、斯(か)ういふ人を、いふたのであらう。上毛(じやうまう)の天地(てんち)に恐ろしい渦巻(うずまき)を起して、事變(じへん)のすむだ後は、どこへ行つたか、さらに知る人もなく、その終焉(しやうげん)さへ、知つて居るものがなかつた。といふほどに、彼は、怪物(くわいぶつ)の本性(ほんしやう)を、持つて居たのである。

彼(かれ)を、直接(ちやくせつ)に、援(たす)けて居たのは、清水(しみず)永三郎(えいざぶろう)であつた。また、彼(かれ)を、間接(かんせつ)に保護(ほご)して居たのは、宮部(みやべ)襄(じやう)であつた。群馬(ぐんま)縣(けん)へ逃げ込んだのは、宮部(みやべ)の指金(さしがね)であつたが、光明院(くわうみやういん)の住職(ぢゆうしやく)に、はめ込んだのは、清水(しみず)であつた。

密偵(みつてい)が、彼の跡(あと)を、尾(お)け廻(まわ)すやうになる、と、宮部(みやべ)は、彼の爲(ため)めに、いろ／＼苦心(くしん)して、彼(かれ)を救(すく)ふべく、清水(しみず)の許(もと)へ逃(にが)したのである。

平生(へいぜい)は、羊(ひつじ)の如(ごと)く柔順(じゆじゆん)であるが、一たび怒(いか)れる時は、猛虎(まうこ)の如(ごと)くなつて、荒(あ)れ廻(まわ)るのが、清水(しみず)の性癖(せいへく)であつた。當時(たうじ)は、縣會議員(けんかいぎん)を、勤(こ)めて居(ゐ)て、北甘樂郡(きたかんらくぐん)の有力者(りよくしや)であり、且つ資産(しぜん)も、少なからず有(あ)つて、郷黨(きやうたう)の間に重(おも)きをなして居(ゐ)た。

清水(しみず)の發意(はつい)から、北甘樂郡(きたかんらくぐん)に、大遊説(だいうせつ)を、試(こ)むる事(こと)になり、自由黨本部(じゆういとうたうほんぶ)からは、杉田(すぎた)定一(ぢやういち)、照山(てうやま)俊三(しゆんざう)、宮部(みやべ)襄(じやう)の三人(さんにん)が、特に派遣(はつかん)される事(こと)になつた。

第一(だいいち)に、八代(やちだい)といふ所で、演説會(えんせつかい)を開(ひら)き、その次(つぎ)は、一之宮(いちのみや)と豫定(よてい)されてあつた。然(しか)るる、八代(やちだい)は、警察署(けいさつしよ)の干渉(かんせう)が甚(はなは)だしかつたので、終(つひ)に開會(かいかい)の運(うん)びにならなかつた。

此方面(このほうめん)は、松井田分署(まついでわけしよ)の所管(しよくわん)で、平生(へいぜい)から干渉(かんせう)を、能事(のうじ)として居(ゐ)た、署長(しよちやう)の某(たれ)といふのが、どうしても、演説會(えんせつかい)を開(ひら)かせまい、として、配下(はいか)の巡查(じゆさ)を使(つか)つて、先づ會場(かいじやう)借入(かいくわい)の妨害(ぼうがい)を、爲(な)す事(こと)にした。八代(やちだい)では、うまく其小刀細工(そのこたなさいく)が當(あた)つて、折角(せつかく)の準備(じゆんび)も無益(むえき)になつて、演説會(えんせつかい)は、看板(かんばん)を擧(あ)げた丈(だけ)で、終(つひ)に開會(かいかい)し得(え)なかつた。

今(いま)でも、よくある事(こと)だが、警察署(けいさつしよ)で、演説會(えんせつかい)場(ば)の借入(かいくわい)を妨(さ)げて、開會(かいかい)を不能(ふなう)ならしめるほど、非文明(ひぶんめい)な、馬鹿(ばか)馬鹿(ばか)しい事(こと)はあるまい。そんな、事(こと)をして、政府(せいふ)を悪(わる)く思(おも)はせまい、としても、政府(せいふ)の行(な)つて居(ゐ)る事(こと)が、人民(じんみん)の心(こころ)に、反(さか)りて居(ゐ)れば、別(べつ)に演説(えんせつ)を聞(き)かずとも、政府(せいふ)を、好(よ)く思(おも)ふ筈(はず)もなく、その上(うへ)に、演説(えんせつ)の妨害(ぼうがい)をしたなどといふ、事(こと)が人民(じんみん)の方(ほう)へ知(し)れたら、いよく、以(も)つて、政府(せいふ)の威信(ゑいしん)は、無(な)くなる譯(わけ)だ。自分(じぶん)で、穴(あな)を掘(ほ)り乍(また)ら、だん／＼深く陥(おち)つてゆくの、同(おな)じ事(こと)で、左様(さやう)した遺方(やつかた)をして、政府(せいふ)の威信(ゑいしん)を繋(つな)がうとする、役人(やくじん)は、大馬鹿者(おほばかもの)と、いふ可(べ)きである。

全體(ぜんたい)、政府(せいふ)を非難(ひなん)する、演説(えんせつ)に對(たい)しての取締(とらしまり)などは、何(なん)の效(か)りもないものだ。一般(いへん)の人民(じんみん)に、政府(せいふ)の悪い事(わるいこと)を聞(き)かせまいとして、いかに演説(えんせつ)に干渉(かんせう)はしても、現(いま)に悪政(あくせい)を、布(ぬ)いて居(ゐ)る以上(いじやう)は、人民(じんみん)の方(ほう)で、政府(せいふ)に、好意(かうい)を持つ筈(はず)はなく、それが爲(ため)に、演説(えんせつ)の妨害(ぼうがい)をして居(ゐ)る、といふやうな事(こと)が知(し)れたら、一層(いちじやう)、人民(じんみん)の氣受(きうけ)は悪(わる)くなつて、演説(えんせつ)を聞(き)かせるよりは、却(か)つて其結果(そのけつが)が良(よ)くないと、いふ事(こと)ぐらゐは、どんな役人(やくじん)でも、心得(こころえ)で置(お)くべきである。

近年(きんねん)になつて、さうした弊政(へいせい)も、改(あらた)まつては來(き)たやうであるが、まだ／＼充分(じゆうぶん)といふ譯(わけ)にはならぬ。殊(こと)に、地方(ちほう)へでもゆくと、昔(かし)ながらの遺方(やつかた)をして居(ゐ)る、役人(やくじん)が、隨分(ずいぶん)居(ゐ)るのだから驚(おどろ)く。

共產主義(こんさんしゆぎ)や、無政府主義(むせいふしゆぎ)の演説會(えんせつかい)なら、多少(たうしやう)の手加減(てかへん)も、止(と)む事(こと)を得(え)まいが、普通(ふつう)の演説會(えんせつかい)に對(たい)して、昔(かし)のやうな干渉(かんせう)を、やつて居(ゐ)る、警察署(けいさつしよ)は、いくらも在(あ)る。

アメリカでは、一切(いっけつ)の集會(しゆかい)に、届出(とどけだ)をするといふ手數(てすう)がなく、各人(かくじん)が、勝手(がって)に集(あ)はれて、自由(じゆう)に政談(せいだん)をする。警察(けいさつ)官(くわん)が、それに干渉(かんせう)するなんといふ事(こと)は、絶對(ぜつたい)に無(な)いから、實(じつ)に羨(うらや)ましい。之(これ)に反(はん)して、我國(わがくに)の窟屈(くつくつ)さは、とてもお話(はなし)にならぬ。

八代(やちだい)で、失敗(しっぱい)した連中(れんぢゆう)が、清水(しみず)を訪(たづ)ねて、一之宮(いちのみや)の演説(えんせつ)には、二度(にど)の失敗(しっぱい)をせぬやう、ぜひ肝煎(かんせん)りをしてくれ、といふ事(こと)であつたから、清水(しみず)は、くはいし事情(じじやう)を聞(き)いて、自分(じぶん)が乗出(のりだ)して、斜旋(あつせん)する事(こと)になつた。

「演説會の會場 丈は、我輩が取極めてやるから、一切の準備は、君等が、引受けてやる事にしろ」

「よろしい、それは引受ける」
「とに角、廣告丈は、手廣くやつて見る。八代の失敗を、償ふ位に、多くの人を集めるやうにしやう」

「先生、會場が、前に定まらねば準備にかかれませんか、先づ會場の御心配を、願ひ度い」

「よし、光明院で、やる事にしろ」
「光明院……宜しい」

「貸借の事は、我輩が引うける」
「しかし、貸すか貸さぬか、それが定まらぬと、準備にかゝれません」

「貸すも、貸さぬもない。我輩が引うけたら、それで可からう」
「下話丈けても、爲て置いて、戴き度い」
「那の住職は、我輩の親友で、どういふ事があつても、我輩には反けないのだから、その心配には及ばぬ」

「それぢやア、大丈夫ですな」
「大丈夫だ」
「すぐ準備に、かゝりますぜ」
「可矣」

清水には、深い確信があるらしいから、一同も喜んで、とに角、相談は決した。

「一之宮の光明院に於て、自由黨の政談演説會がある」といふ宣傳ビラが、四方へ、貼り出された。これを知つた、巡査は、すぐ松井田分署へ、其報告をしたから、さア問題になつた。演説の届出は、未だ受付けて

ないのに、宣傳ビラが、貼り出された、といふので、先づ其點から、抑へ付けにかゝつた。

處が。會主は、清水永三郎である、といふので、下廻りの警部や巡査では、ちよいと、手の出しやうがなかつた。現に、縣會議員も、勤めて居て、郡内唯一の勢力家であり、殊には、傲骨の熱血男子であるから、うツかり、手を出して、それが爲めに、取返へしのつかぬ事になつては、却て自分等の失策にもなるので、互ひにゆづり合つて、自ら進んで、清水へ、談判に行くものはなく、それよりは寧ろのこと、會場の光明院へ押かけて、住職を威脅してしまへば、どうにかなる、と考へて、警部は、巡査を連れて、光明院へ、やつて來た。

その二三日前に、日比の手に、清水の手紙が届いた。披いて見ると、『政談演説會に、寺を借りるから承知してくれ警察署の方から、何かいふてゆくだらうから、その覺悟で居て、貰ひ度い、あまり面倒であつたら、我輩の名を、出してよろしい』と、いふ事であつたから、日比は、ニヤ／＼笑つて、手紙は、すぐ焼いてしまつた。果然、松井田分署の警部が、俄かにやつて來て、面會を求めた。

四〇

「君が、住職かね」

「左様であります」

「少し尋ね度い事があつて、わざ／＼出張したのであるが、よく考へて、答へて貰ひ度い」

「ハイ」

「此寺を、誰れかに、貸した事があるかね」

「あります」

「どういふ人へ、どういふ使ひ途に貸したか」

『それは、答へられませぬ』
『何故、答へられぬか』

『どういふ人へ貸さうと、どういふ事に使はせやうと、それは、住職である拙僧の自由であります』

『それが悪い、といふて居るのではない』

『然らば、何故のお尋ねでございますか』

『役目の上で、一と通り、知つて、置き度いのぢや』

『拙僧の管理して居ります寺を、誰れに貸さうと、宜しいではありませんか』

『しかし、尋ねられたら、答へてもよからう』

『答へないても、宜しいでせう』

『……………』

『全體、貴方は、何故、さう心配をなさるのですか。人間が、人間の居る家を、何事に使はうと、そんな事は、どう

でも宜しいでは、ありませんか』

『イヤ、警察官としては、一と通り知つて置き度いのぢや』

『どういふ理由で……………』

『此頃は、不穩の言論を弄んで、愚民を煽動するものがあるから、その取締り上、斯ういふ事も、聞いて置く必要

がある』

『不穩の言論といふのは……………』

『など徒らに、政府を悪くいふて、愚民を煽動するものがある事は、君も知つて居るだらう』

『少しも知りません』

『知らぬ？』

『愚民とは、どういふものを指して、申されるのですか、政府を、悪くいふ人々が、なぜ、良くないのですか、それ

が、拙僧には、少しも解りませぬ、政府に、勤めて居られる御方が、人民に對して、愚民なぞとは、怪しからぬ事

を言はれる』

と、日比は、警部に對して、恰も詰問するかの如き調子で、辯じ立てる。『何の坊主如きものが』と思つて、初めは頭

ごなしに、やつつけるつもりであつたが、斯ういふ風に、ヂリ／＼攻めつけられて來ると、警部の方でも、その陣形

を建て直してかゝらねばならぬのであるが、最初に一本、きめつけられると、いくぶんの狼狽もあつて、容易に立直

る事が出来なかつた。

『お前の理窟を、聞きに來たのではない。演説會に、寺を使はせる、約束をしたか、爲ぬかを聞きに來たのぢやから、

お前は、只だ其れ丈の答へをすれば、よいのぢや』

之れを聞くと、日比は、ニヤリと笑つて、

『初めから、左様仰つしやれば、それ丈の御答をするのでした。何か拙僧に、悪い事でもあるかのやうに、お叱

りをうけた、と思つたので、失禮を申述べました』

『どうぢや、演説會に、寺を貸してあるのか』

『ハイ、貸しましたに相違御座いません』

『借主は、誰れであるか』

『それは届出がありましたら、お判りになりませう』

『よけいな事はいはなくてもよい。こちらの尋ねる事に、答へればよいのだ』

『腑に落ちぬ事は、お答へがいたしかねますから……………』

「腑に落ちぬ、といふのは、どういふ事か」
 「さういふ事を、どういふ理由で、おしらべになるので御座いますか」
 「それが、よけいな事ぢや」
 「斯う申上げるのが、よけいな事なら、貴方のおたづねは、猶更らよけいな事では、御座いませぬか」
 「何ぢや、と、本職のたづねる事が、よけいな事とは、どういふ理由か」
 「よく物の道理を、考へて御覽なさい、拙僧の管理して居る寺を、拙僧が、人に貸すのに、何の不思議が御座います
 どういふ人に貸さう、と、また、どういふ事に使はせやう、と、これは、拙僧の自由で御座います。従つて、さう
 いふ事には、御答へは出来ませぬ」
 と、きつぱりいはれて、警部は、頗る驚いた。どうして、此坊主は、斯んなに強いのか、とも思つた。その答へにも
 充分の理窟はあるし、差當つて、之れを説きつける、口實も、出て來なかつたが、地方の小役人の癖として、自分の
 方が、少し負け氣味になると、すぐ、役目を笠に、權柄で、押付けにかゝる。大概は、其れですむのであるから、此
 警部は、やはり其手に出たのであらう。
 「本職のたづねる事は、職權を以てするのであるから、それに抵抗すると、お前の爲めになるまい。お前は、只だ本
 職のたづねる事に、答へをすればよいのぢや」
 辭の調子も、少し荒くなつて、頭から、職權呼はりで、押付けやう、とかゝつた。之れを聞くと、日比は、いよいよ
 上落付いて、且つ皮肉な口調になつた。
 「ですから、拙僧は、お答へをいたして居りますでは、ありませんか」
 「お前のは、屁理窟ぢや」
 「屁理窟でも、何でも、お答へには違ひありませんまい」

「屁理窟は、答へにならぬ」
 「それでは、此上、何事も申上げませぬ」
 「どうしても、答へぬか」
 「ハイ」
 警部は、立上りながら、チロリと睨んで、
 「お前は、さういふ風に、剛性張つて居るが、後日の爲めに、ならぬぞ」
 「後日の爲にならぬ、といふのは、どういふ事で、ありますか」
 「まア、よろしい」
 「何が、よろしいのですか」
 「うるさい、黙れツ」
 「貴方が黙れば、拙僧も黙ります」
 「もう、よろしい」
 警部はブン／＼怒りながら、出て行つた。日比は、ニヤ／＼笑つて居る。
 「ヤア、住職」
 と、いつて、不意に、次ぎの室から、出て來たのは、神宮茂十郎といふ、土地の有志であつた。
 「オー、神宮さん」
 「大い権幕でしたな」
 「何がですか」

「何がつて……那の調子が、普通、坊さんに、出るものですか」

「ハツハ、ハ、飛んだ所を、見られましたな」

「田舎警部は、大概、あんなものですよ」

「厭がらせを、いひに來たのは、よく判つて居りますから、それまで、いはせずに、逐ひ拂つて、しまひました」

「今度は、干渉も、ひどいに違ひないから、豫め其變の事を、話して置け、と、清水先生から、言つて來たので、

それを、君に、いはうと思つて、やつて來ると、警部が來て、何かグヅグヅいつて居る、といふから、次ぎの室で

聞いて居たのです」

「那の位に、いつてやつたら、もう二度とは、來ますまい」

「是れて安心して、準備にかゝれます」

「八代の方は、メチャクチャで、あつたさうですな」

「近來の遣方は、實に言語道斷ですよ」

「まア、しツかり行るのですな」

「届けの方は、どうです」

「僕が、會主で、届けを出します」

「あなたなら、大丈夫だ」

「生命がけてもやり通す覺悟だ」

「それです、その覺悟がなければ、政府の壓制に、對抗は出來ませぬ」

「明日から、一室丈け拜借して、其處を、事務所にしますから、どうぞ御承知を、願ひ度い」

「よろしい」

「辯士は、前日に到着する事に、なつて居ます」

「辯士の顔觸れは、どうになりましたな」

「杉田定一君と、照山俊三君、それに宮部先生も、來るさうです」

「そりやア、大層なものだ」

神宮は、日比の素性を、詳しくは知らなかつたが、非常に硬骨の人だ、といふ事だけは、此寺へ、入つた頃から、

或事情で、知つて居たのだ。それから、深く信じて、少しでも暇があると、訪ねて來ては、その説を、聞いて居るの

で、日比を信ずる事は、頗る深いものがあつて、極めて親しくして居たのだが、今の警部との應接を聞いて、ますま

す敬服してしまつた。

松井田分署では、日比の態度が、強い爲めに、演説會の妨げを、爲し得なかつたから、此上は、開會させて置いて

すぐ解散を命じてやらう、と、方針を決めて、とに角、開會届に對しては、認可を、與へて置いた。

かくて、開會の當日は來た。寺の門前には、席旗を押立て、その他にも、多くの旗を掲げて『自由之魁』『自由之

犠牲』などいふ文字を表はし、意氣、天を衝くの勢ひで、聴集の來るを待受けた。

四一

住職の日比遜が、警察署の壓迫を恐れず、飽迄も押切つてしまつたから、演説會は、開く事になつたが、警察の干

渉は、ます／＼ひどくなつて門前に建つた、旗の奪合が、因になつての争ひが、終に血を流すに至つた。

これが爲めに、演説會は、中止解散を命ぜられ、東京の本部から、特派された、杉田定一と照山俊三は、終に演壇

に登らずして、有耶無耶のうちに、解散してしまつた。

斯うなると、地方の有志者は、ます／＼激昂して、不穩の氣は、到る處に漂ひ、警察の干渉を非難して、革命を叫ぶものさへ、あるやうになつた。

『杉田先生、飛んだ御迷惑でした』

と、主催者側のものは、頭を下げて、只管に陳謝する。

『どうも、止むを得ません』

『先生方の眼から見て、此干渉を、何う思はれますか』

『酷いですな』

『平和を破るものは、政府ですから、此上は吾人も、相當の覺悟を、爲なければなりません』

『イヤ、左様怒らずと、冷静に、考へた方が可いでせう』

『へへー、冷静と申しますと、どういふ事ですか』

溫和しい、杉田は、容易に、怒つた容子を見せなかつた。斯うした場合に、杉田のいふやうな事は、決して喜ばれるものでない。

杉田は、晩年に、貴族院議員となり、頗る得意のやうであつたが、昔は、熱烈な志士で、同士の爲には、奔走したものであつた。只だ惜むらくは、勇氣と膽力に、缺ける所があつて、何時も『さア』といふ段になると、尻込みをする癖があつた。

福井縣の坂井郡では、屈指の豪農で、父の仙十郎は、地租改正の時、非常に盡力して、國民の負擔を軽くしたといふ偉效があり、今では、銅像を建てられてある位だ。

父の歿後、遺産の相続問題で、弟の某と、争ひが起り、幾たびか紛争を重ねて居るうちに、杉田家へ、その弟

が、暴れ込んだのを視て、定一は家に傳はる、一刀を抜いて、弟に、斬り付け、重傷を負はせたので、忽ち囚はれる身となつたが、裁判所では、事情を酌量して、割合に、軽く済ませてくれた。

此事が、同志の間へ、知れた時、誰れにしても、意外の感に打たれた。

『杉田が、實弟を斬つたさうだ』

『そりやア、驚いたな、那の溫和しい男が、人を斬るなんて、よほどの事だらうよ』

『なアに、金の事になれば、誰れでも同じ事だらう』

『馬鹿なツ、那の男に限つて、さういふ事はなからう、實弟が、善くないからだ』

『左様かな』

三人寄ると、斯んな噂をして居たが、裁判の結果では、矢張り實弟の方が悪い、といふ事になり、従つて、杉田の罪は、軽く済むたのである。

其期間を除いて、明治廿三年以來、ずつと、代議士に選ばれて居た。其代り、資産は、選挙費用の爲めに失ひ、全く無一物になつてしまつた。

『政府が壓制をすれば、何時か國民の信を失ひ、やがては、自滅を招くに定まつて居るから、只だ冷静に構へて、餘り過激な運動なぞは、爲ぬに限る』

『何んな事をされても、黙つて堪らへて居ろ、といふのですか』

『まア、左様ですな』

『へへー』

一同は、杉田のいふ事を聞いて、頗る不満であつた。

今迄、黙つて居た、照山が、グツと、膝を進めて、何か、いひ出さうにしたので、杉田は、それとなく、眼配せ

をして、照山を制したけれど、そんな事で、止める男でないから、一同に向つて、

「諸君の意気は、實に素晴らしいものだ。先輩の杉田君は、先輩として、那アいふ外はなからうが、杉田君にしても胸中、頗る憤慨して居られるには違ひない。

諸君が、天下國家の事を憂へて、今後は、一大決心を以て、政府の壓制に備へる、といふのは、固より當然の事で、別に不思議とす可きでない。

志士、國に殉ずるの時は、即ち今日である、と思ふから、大に遣る可しだ。

政府の奴等が、たとへ、如何なる手段を以て、吾人を壓迫しても、吾人の志は、鐵石の如きものである。古人も、鼎鑊甘きこと、飴の如し、と、謂ふて居るではないか。また、眞の自由は、血を以て購ふ可し、とさへ、言つて居る。

どこの國の歴史を見ても、結局は、革命に依つて、總勘定されて居るのだから、獨り我國丈けは、其例外ともいへまい。

要するに、諸君の決心一つで、斯んな政府位も、何でもなく倒せるのだから、大に遣る可しである』

と、舌端、火を吐くか、と、思はれるほどの快辯、聞いて居るものは、之れで溜飲の下つた、心地になる。杉田は、苦々しい顔をして居るが、別に其れを打消さうとはしなかつた。

時に、廊下の方で、何か知らぬが、はげしい争ひが、始まつた。

「何だ、貴様は」

「今、此處を通りかゝつたのです」

「嘘を吐くな、貴様は、立聞きをして居たのだらう」

「否、そんな事は……」

「貴様が、最前から、障子に耳を寄せて、立聞きして居たのを、慥に認めたのだ。さア、誰れに頼まれて、そんな真似をするのか、それを吐かせ」

「そんな事は、ありません」

「馬鹿ッ」

と、いひも終らず、先づ鐵拳が飛んだ。捉へられた男の頭を、コツンとやつたから、その男は必死になつて、捉へた男の手を拂つて、逃げにかゝるのを、逃がすまい、として、さらに押へつける。それが爲めの、ドタンバタンであつた。

座敷の連中は、障子を開いて、廊下へ飛出したが、見れば、同志の町田鶴五郎が、怪しい男を、捉へての争ひであるから、事の善悪は、しばらく措いて、とに角、町田へ、力を貸すやうになるのが、普通の人情で、一同は、怪しい男を、捉へにかゝつた。

斯うなると、怪しい男も、一生懸命、今迄の守勢は、いつか攻勢に變つて、ナカナカの暴れやうであつた。所が、意外に、大力な奴で、トウ／＼捉へられた手を、振り放して、廊下を飛下り、庭の向ふへ逃げてゆく。その又た、足のはやい事は、丸て鼠のかけるやうであつた。

一同が焦つて、逐ひかけた、けれど終に取り逃がしてしまつた。町田は、残念さうにして、腕を撫つて居る。一同も、セイ／＼息を切り乍ら、追々、引つ返して來た。

『どうした、町田君』

『やア』

『君、彼奴は、何だい』

「何だか判らねえが、怪しい奴だ」

「へへー、何だか判らないのかね」

「けれども、怪しい奴だ」

町田のいふ事は、さらに要領を得ないので、一同も、煙に巻かれた態である。

「今ま、己れが、此處へ来ると、彼奴が、立聞きをして居やアがつたから、ふんづかまへてやらう、と思つたが、たうとう逃がしちやつて、残念だ」

「ア、左様か、彼奴は、立聞きをして居たのかね」

「左様だ」

「警察の廻者ぢやないかしら……」

「左様だらうと、思つたから、ふんづかまへてやらう、としたんだ」

「残念な事をした」

杉田は、此騒ぎに、席も離れず、腕を組んで、考へて居る。照山は、一同が、立上つた時、自分も、跡から飛出したが、その時は、既に怪しい奴は、庭をかけて行く時であつたから、その儘、廊下に立つて、一同が、引返して来るのを待つて居たのだ。

「オイ、町田君」

「ヤツ、照山さん」

「どうしたつて、いふのだ」

「今もいつた通り、怪しい奴と思つたが、取り逃がしちやつたのです」

「彼奴は、藤田のやうだつたね」

「えつ、藤田といふのは……」

「君にも、似合はぬぢやないか。君は、藤田を知らないのか」

町田は、少し考へて居たが、

「あツ、丈吉つて野郎ですが」

「左様さ」

「ふふーむ」

「どうも、左様らしかつたぜ」

「慥かに左様ですか」

「イヤ、慥かに左様とは、いへないが、向ふへ駆けて行く、後姿が、どうも彼奴らしかつたよ」

「惜い事をしたな」

「逃がしたものは仕やうがないから、まア、跡の相談をする事に、しやうぢやないか」

「それが、可からう」

照山を、先頭に、一同は、元の座敷へ、戻つて来た。

しきりに、考へ込んで居る。杉田の前へ、照山は、どつかと坐つて、

「先生、警察の犬でした」

「左様かね」

「吾人の話を、立聞きして居たのです」

「壁に耳と、いふ諺もあるから、君等は、大に注意しない、と、いけない」

それとなく、杉田は、照山を戒めて、最前の暴論に、諷したのである。

「僕の言語が悪い、といふのですか」

「左様いふ次第ではない」

「然らば、どういふ意味ですか」

「まア、そんな事は、どうでもよいではないか」

「併し、先生のいはれる事に、ちよつと、疑惑が起つたものですから、聞いて見たのです」

「疑惑とは……」

「只今の一言は、僕等に對する皮肉な諷刺だ、と思つたからです」

「我輩は、憂慮の餘り、君等に注意した迄の事で、別に悪意が、あつた譯ではない、氣に容らなかつたら、それ迄の事である」

「近來、先輩の心事については、僕の方でも、頗る不満があるのだから、従つて、先生の一言に對しても、自然と、不快を感じる譯です」

「もう、その話は止さうぢやないか。斯うして多くの人も、居る席だから……」

「此席に居るものは、みな同志の者ばかりですから、その遠慮には及びますまい」

「飽計も、擲んで來る。喧嘩腰の態度には、さすがに温厚な、杉田も、少し勃然として、

「それでは、どうしやう、といふのですか」

「……」

「あまり、詰まらん事は、いはぬものだ。此席に居る人々を、我輩が、疎外でもして居るやうに、君は、言ふて居るが、決して左様な事はない。つまり君等の身の上を、深く思へばこそ、苦い言も、いふのであるが、それを、變に解釋して、本部から特派されたもの同志が、議論を始める、といふやうな事は、互に慎む可き事ではないか。君に對して、

「……」

して、先輩の感情が、良くない事も聞いては居るが、我輩は、そんな事を、少しも思つては居ない。要するに、君は餘りに過激であるから、人に依つては、君を嫌ふものもあるのだ。此上に、いふ事はないから、君も、黙つて居てくれたまへ」

「黙れ、といふなら、黙つて居ます。ヘン？」

其席を立つて、照山は、室外へ、出て行つた。杉田は、此押合を聞いて、ぼんやりして居る、同志に向ひ、

「我輩は、都合に依つて、これから歸京します」

と、いひ出したので、一同は驚いた。

「先生、明日は、八代の演説會ですから、どうぞ御一泊を、願ひ度いのです」

「我輩は居らずとも、照山君が居るから、それで宜しい」

斯ういひ出すと、杉田も、ナカ／＼剛情な所があつて、一同の止めるも肯かずに、歸り支度に、かゝつた。

地方遊説には、よく斯うした事があつて、同行したものゝ、意見の相違から、列を離れて、引上げるのは珍らしい事でもないから、一同も、終に斷念めて、杉田の歸京を、途中まで、送ることに定めた。

その間に、照山は、誰れにも斷らず、八代を指して、單身出かけた、といふ報知があり、土地の同志としても、頗る面白くなく思つた。

四二

北甘樂那の自由黨員は、八代町の演説會場へ、皆な集まれ、といふ檄文が、四方へ飛んだから、熱心な連中は、それぞれに誘ひ合せて、押しかける事になつた。

殊に、一宮の演説會が、解散になつた時の事情が、誇大に傳へられて、黨員の激昂は勿論、一般の民心にも、強い

衝動を興へて、何となく人氣は、峻しくなつて、居たから、當日の會合は、とても、無事には濟むまい、と、心あるものは覺悟して居る、位であつた。

由來、上毛の地は、博徒や俠客の本場で、一帯に人氣の荒い、動もすれば、血を流す事の多く、その點に就いて、昔から有名なものであつた。

赤城山に立籠つて、八州の捕吏を、向ふに廻し、壯快な、一と芝居を打つた、國定忠治を生んだのは、此地方であつた。板鼻の代官を斬つて、其役所に、火を放け、大戸の關所を、破つた末が、磔刑に處せられて、其俠名を残したのも、彼れであつた。

大前田の英五郎や、相の川の助五郎は、共に關東の博徒として、代表的の大親分であつた。當時の官憲も、空しく手を拱んで、彼等の横行闊歩には、監視の眼を、外らして居た。

明治の世になつてから、此種のものに對して、嚴しい取締りは行はれたが、濱の眞砂の種子は盡きず、廿年頃まで猶ほ相當の勢力を、保ち得たのは、さすがに、豪いものであつた。

十七年の當時、山田丈之助といふ博徒があつて、その繩張りには、上信の二州に跨り、盃を貰つて、親分子分の關係を持つものが、約五千に及んだ。虎五郎が隱居してから、丈之助に、其踏を任せたので、さらに一段の勢力を加へて、實に恐る可きものとなつた。

博徒ではあるが、相當に理解もあり、人に情を施して、世評も、非常に良かった。けれども、官廳に對しては、餘り好感を有たず、多く反抗的態度を、取つて居たから、役人の方でも、何かあつたら抑へ付けてやらう、と、狙つて居たが、その勢力の偉大なるに恐れて、容易に、手を下し得なかつた。

斯うした連中を、取扱ふ事に、妙を得て居たのは、宮部襄であつた。殊に、彼等の大喧嘩の仲裁者となり、巧く喧嘩を纏めてから、といふものは、殆んど彼等の顧問の如くなつて、何事も相談をかける、といふほどに、深い因縁が續いたのである。

丈之助等も、宮部の爲には、どういふ事でも、忍んで行る位の覺悟は、皆な持つて居た。八代の演説會は、會場を貸すものがないので、開會不能になつた、と聞いて、宮部は、一の宮の演説會を、其儘にして置いて、すぐ丈之助の家へ、訪ねて行つた。

宮部は、元來が、演壇に立つ人てなく、坐談には、特殊の味を、有つて居たが、演説は、最も拙い方であつた。辯士のうちに、氏名は列ねて居ても、大概は、演壇に立たなかつた。

丈之助は、宮部から、事情を聞いて、警察署の遣口を憎むだ。

『宜しい。先生のお頼みですから、どんな工面でもして、きつと、會場はつくりましますから、御心配なさいませぬ』

『君が、左様いふてくれたら、大丈夫だ。我輩は安心して、一の宮へ行ける』

所へ、子分が急がしさに、次の室へ來た。

『親分ツ』

『何だ』

『鶴兄いが、歸えつて來やした』

『うむ、さうか』

『すぐ通しますぜ』

『うむ』

町田は、息を切り乍ら、坐敷へはいつて、丈之助に、ちよつと。頭を下げると、宮部の方へ向いて、

『先生、一の宮も、やられました』

『解散の命令か』

「ええ」

「左様か。多分は、解散になる、と思つて居たが、ずいぶん酷い事を、やるものだ」

「そこで、八代の方へ、もう一度、手を廻して、無理にも、やつつけよう、といふのですが、家を貸すものがねえの

で、困つちまひました」

丈之助は、笑ひながら、

「大丈夫だ、八代は、己れが引受けた所だ」

と、いふのを聞いて、町田は、膝を乗り出して、喜んだ。

「親分、本當ですか」

「先生から頼まれて、今、引受けた所だ」

「親分が引受けたら、そりやア、出来ます」

「己れの知つてる、客仁のうちで、八代に、地面を持つて居る人があるから、小屋掛けにして、やつつけやう、と思

ふのだが、それが可からう」

「そいつア、巧え考えだ」

「これから、己れは、地面を借りてくるから、汝は、先生のお相手をして居てくれ」

「へい、合點です」

此時、宮部は、町田に、一之宮の事を、尋ね始めた。

「彼處の演説會は、どういふ風にして、やられたのかね」

「演説などは、全然、出来なかつたのです」

「は、ア、開會の前に、やられたのか」

「さうです」

「亂暴なことをするものだ」

「會場の前に樹てた、大旗の奪り合ひから、トウ／＼解散されて、しまつたのです」

「それだけの事で、別に怪我人も、なかつたか」

「一人や二人は、怪我もしたてせうが、そんな事は、どうでも可うがす」

「杉田君や照山は、どうした」

「何だか、理窟をいひあつて、杉田先生は、東京へ、引上げちやつた」

「照山は……」

「八代へ行く、といつて出かけた、といふ事ですが、よくは知らねえのです」

「照山にも、困つたものだ」

「照山さんについて、斯ういふ事がありやした。何でも、照山さんが、豪い事をいつて、杉田先生と、議論して居る

のを、廊下の所で、障子越しに、立聞きをして居た奴があつたので、あッしが見付けて、ふんづかまへてやらう、

としたら、引放して逃げやう、とするのを、逃がすめえとして、取ツ組みやつて居る所へ、皆な出て来て、それか

ら大騒ぎになつたが、逃足のはやい奴で、トウ／＼逃がしちまつたのですが、残念で堪まりませんでした」

「そりやア、何者かね」

「どうせ、碌な奴ぢやなからうが、何でも、藤田に似て居るツて、いつたものがありました。矢ツ張り、偵吏だツ

て事です」

「左様か」

衣服を改めて、奥から出て来た、丈之助は、今の話を聞いたかして、

「藤田ツてえのは、丈吉の事ぢやアねえか」と、町田に尋ねた。

「さア、どうですか、よく判らねえのですが、何です、丈吉ツてえのは……」

「汝え、知つてるだらう」

「誰れでしたツけ」

「御免の安だアな」

「えツ、那の野郎ですか」

「忘れツぽいにも、程度があるぢやアねえか」

「那の野郎、未だヤツてるンですかねえ」

「性分だ」

「太え野郎だ」

「今度見つけたら、こッびどい眼に逢はせてやれ」

「ようがすとも……」

「取ツ組み合ひまでして、気が付かなかつたのか」

「うっかりして居たので、ツイ気が付かなかつたんです」

「間抜けだな」

「だツて、一べん見た丈けですからね」

「一べんだツて見たら、忘れるなよ」

「こいつア、恐れ入つた」

「二人の話を、聞いて居た、宮部は、その藤田といふのは……」

「偵吏です」

「はア、偵吏ですか」

「悪い野郎で、一度は懲らしてやつたが、未だ其んな事を、やつて居るのです。越後の方へ行くツていふから、少しばかり旅費を、くれてやつたのですが、これは、人間の性分で、ヤツぱり偵吏が、性に合つて居るのでせう、ハツハ、ハ、ハ、ハ」

丈之助は、宮部の對手に、町田を残して、八代へ出かけた。

四三

八代の地所は、丈五助の力で、終に借入れた、地料を拂つて、すぐに筵張りをすませ、それから、政談集會の届出をした。

松井田の警察署では、此届出を受理して、先づ驚いたのは、會場のあつた事である。警察權の威力を以て、出來得る丈の干渉をして、彼等の手には、どうしても、會場の借入れが、不能やうにして置いたにも不拘、俄に届出があつたので、すぐ現場の取調べをして見ると、空地を借りて、筵張りの會場が、出來て居たのであるから、其點について、猶ほ充分の調査をして見たら、それは、山田丈之助が、地主から、直接に借入れた、といふ事が判つた。

屋外演説は、認可せぬ方針になつて居たが、たとへ筵張りにもせよ、是れ丈の準備があれば、屋内と同様であるから、會場の點に就て、不認可の理由は、成立たぬ事になつた。

其處で、辯士と演題に就て、不認可の理由を、見付け出さうとして、努めたが、どうしても、左様した都合に、ならなかつたのは、演題も、事項書も、みな穩かなものであつて、どこが不可といふ點を、發見し得なかつた。

當時の集會條例に依ると、演題に對する事項書なるものを、添へて出す事に、なつて居たのだ。つまり、演説の要旨を、書いて出すのであつて、それに對して、認可と不認可を、決定するやうに、なつて居たのである。

演題は、穩當なものであつても、辯士が、危険人物であれば、認可せぬ事にもなり、辯士や演題に、不都合な點は無くても、事項書のうちに、不穩の點があれば、それで不認可にしてしまふ、といふやうな事もあつて、言論の取締りは、實にひどいものであつた。

殊に、當時の署長には、高等の教育を受けたものが、少なく、大概は、巡查上りの警部から、署長に昇級したもので、事務には、馴れて居ても、政治に關する、一般的の素養すら無いものが、多く居たのだから、左様した、人物に依つて、言論の取締りをされるのは、實に禍ひであつた。

巡查の頭腦も、ずるぶん酷いもので、人權の尊重す可き事を、よく心得て居たものは、殆んど無い位であつた。學術試験を受けてから、採用されるやうには、なつて居たが、その試験は、日本外史の素讀と、刑法の一二ヶ條を質問されて、それが通れば、すぐ採用されたほどに、極めて貧弱な、程度のものであつたのみならず、多くは舊藩の士族から來るもので、只だ威張る事を、知つて居た丈の輩が、劍をさげて、肩て風を切る、といつた風があり、とてもたまつたものではなかつた。

警察署の方針としては、とに角、認可を與へて置いて、當日になつてから、解散を命ずる、といふ事に決した。どうせ不穩な學に出るであらうから、その時になつて、解散しても遅くはない、といふ説になつて、開會屆は、認可したのである。

「オイ、君も、八代行きか」

「うむ、左様だ」

「今度は、大分に、むづかしいぞ」

「自由黨の奴等も、大決心ではじめた、といふ噂もあるし、それに、博徒の應援がある、といふから、よほど、腰を据ゑてかゝらぬと、失敗するぞ」

「併し、署長の決心が強いから、思ふさま威力を示して、みし／＼やツつけてやれば、どうにかなるだらう」

「無論、解散の命令を、發するのだらう」

「それでなけりや、吾人の働きやうが無いさ」

「自由黨の壯士にも、ナカ／＼強い奴があるから、御互ひに注意せぬと、反對にやられるぞ」

「ヤア、大丈夫だ。吾人の武を用ゐるは、此一舉にありだ。ハツハ、、、」

無智の巡查は、斯んな事を話合つて、腕を撫すツて居るのだ。

凡そ、恐る可きは、此輩が、人民を敵視する事である。初めから、人民を敵として、闘ふつもりでかゝつたら、堪まらない。國の禍は、斯うした所から、起つて來る。昔でも、今でも、此點については、深く注意せぬと、恐る可き、不祥な結果を、視る事になる。

探偵の藤田丈吉が、のそりと、はいつて來た。今迄、さわいて居た巡查はひとしく、藤田の方を見た。

「ヤア、御苦勞ですな」

「オイ、藤田君」

「八代行きですか」

「左様だ」

『今度は、骨が折れませぬ』
『左様だらうな』
『しつかり、やつて下さい』
『どうだ。自由黨の奴等も、相當に準備して居るだらう』
『そりやア、大した景氣でせう』
『左様か』

『血を見るまで行く、といつて居るから、充分に力を張つて、かゝるでせう』
『愉快々々、それなけりやア、本當の闘ひには、ならぬのだ』
『巡査は、人民と、いくさを、爲るつもりで居るらしい。驚き入つた事ではないか。』

『諸君に、注意して置くが、今度は、自由黨の背後に、山田丈之助といふものが、附いて居るから、よほど覺悟してかゝらぬ、と、太い目に、逢ふかも知れない』

『山田といふ奴は、此邊で一番の親分だな』
『親分も親分、大親分で、子供の五千人もあらう、といふのだから、大變な奴だよ』
『左様か、そいつが、尻押だね』

『八代の演説會場は、山田が作つたのだ』
『ふふーむ』

『それだから、よほど、しつかりやらぬ、と、却て失敗するだらう、と思ふ』
『いくら大親分でも、高が、博徒だ。何の恐れる所はない』
『左様だ、その意氣さへありやア、大丈夫だ』

藤田の目的は、巡査を煽動して、山田の勢力を、抑へ付けやう、とするのであつた。

四四

今日は、演説會の當日である。

八代の附近は、それが爲めに、非常な賑ひであつた。今迄の演説會と違つて、多少の騒ぎはあるものと、豫期して集まる人達であるから、それに誘はれて来るものも、みな元氣は、溢れるやうであつた。

何しろ、筵張りの小屋が演説、といふ丈けでも、人の好奇心を誘ふやうに、出來て居る。それが、警察の壓迫に、對抗しての事だ、といふ事も、知れ渡つて居るのみならず、自由黨の背後には、山田丈之助が、附いて居るのだから

どうせ、無事にはすむまい、といふのが、一般の豫想で、面白半分集まるものが、その大部分であつた。
『自由の犠牲』『革命の先驅』『自由と鮮血』『不與自由只在死耳』などいふ、旗を押立て、中には蒲旗へ、不穩の

字句を大書して押寄せるものもあつた。

會場の周圍は、五六十人の巡査が、取巻いて居る。定刻前から押寄せた、一般の聴衆は、巡査と押返へして、終に場内へ、雪崩れ込む、署長や警部は、血眼になつて、巡査を指揮して居たが、争鬭は、旗の奪ひ合から、先づはじめられた。

一人の巡査が『自由の犠牲』と、書いた旗へ、手をかけた。それを切つかけに、殴り合ひが起り、その混雜は、名状す可からざるものになつた。

『會主々々』
と、叫びつゞけて居るのは、署長である。

山田は、しづかに、署長の前へ、現はれた。さすがに、落付いた態度で、少しも騒ぐ、容子が無い。

『其方が、會主か』

『左様だ』

『山田丈之助といふのか』

『左様だ』

『本會は、治安に防害あり、と認めたら、解散を命ずる』

『解散しろ、といふのか』

『左様ぢや』

『そんな事は出来ねえ』

『命令に反くか』

『未だ演説は、始まつて居ねえのだから、解散させられる理由はねえ』

『職權を以て、解散を命ずるのぢや』

『そんな職權は、ねえ筈だ』

『何と申す』

『亂暴をして可い、といふ職權は、ねえだらう』

『何が、亂暴か』

『未だ始めねえうちから、解散とは、何の事だ。その位なら、始めから認可を、爲ねえがよからう。人民を馬鹿にするも、程度がある。己れも、山田丈之助だ。そんな亂暴には、服す事は出来ねえ』

『うぬツ、傳徒の身分であり乍ら、官命に抵抗いたすか』

『身分は傳徒でも、無理な命令には、従ふ事は出来ねえ』

その争論が、やうやく、はげしくなるにつれて、場内は、刻々に殺氣が、立つて來た。兩個が、争つて居る、演壇の周圍は、人の山を築いて、光景、甚だ險惡である。

折柄、場外の旗奪ひから、はげしい争闘が、起つた事は、その喚き罵る聲でも知れる。それが、場内のものにも判つたから、さア騒ぎは、一段と、ひどくなつて來た。

これを見かねて、宮部が、署長の前へ立つた。宮部に對する、一般の氣受は、非常に良く、上毛に於ける、板垣として、尊敬されて居たのだ。

『宮部先生だ。少し静かにしろ』

と、いふものがあつたので、騒ぎは、少し静まりかけた。

『我輩は、宮部です』

署長は、わづかに首肯した。

『どうも、面白くない状態ですから、我輩は、貴下に、御相談いたしたい』

『どういふ事か』

『只今の、解散命令は取消したら、どうですか』

『左様いふ事は、出来ぬ』

『併し、此騒ぎを静めるには、その外に道はあるまい、と思ふが、どうですか』

『たとへ、いかなる騒ぎが起つても、一たび發した命令は、決して取消さぬ』

『それは、餘りに理解が無さすぎる。貴下が、いはれるやうにすれば、茲に多數の犠牲者も、出す事になるが、それ

でも、宜しいのでせうか』

『止むを得ない』

「貴下は、非常に昂奮して居るやうだが、少し落付いて、考へて御覽なさい」

「無禮な事を、いふなツ」

「何が、無禮ですか」

「落付けとは、怪しからん」

「それが、無禮なのです」

「無禮ぢや」

「ハツハ、、、」

「何が、可笑しい」

「可笑しいぢやないか。昂奮して居るから、少し落付け、といふたのが、何で無禮になるか。我輩は、無事の終結を、望む餘りに、斯ういふのである」

「餘計な事ぢや」

「貴下は、此演説會を、騒擾の渦中へ入れやう、とするのであるか」

「お前等に、何が判る」

「こりや、怪しからん。貴下は、何といふ暴言を吐くのだ。我輩も、その昔は、貴下と、同じ職務を、取つて居たものである。貴下は、御存じないかも知れぬが、我輩は、熊本縣の警察署長を、勤めて居たものだから、貴下よりも警察の事については、先輩である。従つて、人民を治める事の呼吸は、相當に心得て居るから、一應の注意もした譯で、決して貴下に、無禮な事をしやう、とするものではない。貴下は、一たん下した、命令は取消さぬ、といはれたが、それは、非常に間違つて居る、と思ふ。たとへ、一たん命じた事でも、その命令が、誤つて居たら、取消しても宜しいではないか」

「本職の命令を、誤つて居るとは、何事か」

「まア、お聞きなさい」

「イヤ、聞く必要はない」

「それぢや、勝手になさるが、よい」

「宮部も、呆れて手を引いた。」

「其とたんに、誰れが投げたか、一つの石が、飛んで来て、署長の額に中つた。」

「署長は、直に抜劍の命令を、發した。巡查は、一齊に劍を抜いた。」

「それから後には、敵も、味方も、いづれと分ち難く、亂闘、混闘、メチャクチャに、なつてしまつた。」

「巡查に斬られて、血に塗みれるものがあり、群集に叩かれて、昏倒する巡查もあり、署長も、輕傷を負ふて、退いた。」

「演説會は、演説をしたもの一人もなく、平和に終る可き、會合は、警察官の干渉で、徒らに群集の激昂を買ひ、巡查の抜劍に依つて、修羅場に化し去つた。」

四五

「此騒ぎのうちに、藤田丈吉の働きは、さすがに、人の眼を引いた。多くの巡查は、藤田の指圖で、さかんに捕縛を用ゐた。」

「松井田の警察署は、拘引されたもので、満員になる。檢事が出張して、すぐに取調をはじめた。」

「山田は、いつか、其場に居らず、捕へる事が、出来なかつた。現場ならば格別、後から拘引する、といふほどの、罪状はないので、之れは、警察署の方でも、手のつけやうがなかつた。」

獨り、不思議なのは、此亂闘の場合に、照山の姿が、見えなかつた事である。彼は、此日の演説會に、第一席を、勤める筈であつたが、終に遅れて、間に合はなかつた。騒動が静まつてから、やうやく駈けつけて、相變らず、元氣な事は、いふて居たが、何となく其容子に、疑はしい所があつた。巡查が、彼の姿を見て、手をつけやう、とした時、藤田は、巡查を、抑へてしまつた。

それから、二日ほどして、藤田は、夜遅く、歸つて來た。署長の命令をうけて、四方を、飛廻つて居たが、一と通りの報告をして、署長と、翌日の打合せをすませ、夜が更けてから、自分の住家へ、歸つて來たのである。さすがは商賈柄、何となく變な奴が、家の周圍に、居るやうな感じがしたので、一たん内へはいつて、さらに提灯を持つて、出て來た。腰には、長い刀を帯して居る。家の裏手に、黒い影が、二つ三つ、動いて居るのを、はやくも見付けた。

「此處に居るのは、誰れだ」と、咎めた。言の終るか、終らぬうちに、石が飛んで來て、小鬚に中つた。

「あッ」と叫んで、提灯を落した。疾風の如き速度で、一つの黒い影が、飛んで來た。

「やッ」拔打ちに、斬つてかゝつた。藤田も、多少の心得はある奴、引ッ外して、抜き合せた。

「町田か」

「オー、鶴五郎だ」

「卑怯なッ」

「何をッ」

町田が、一步、ふみ込んで、斬り下ろした、一刀を、藤田は、外づし損ねて、肩先きへ斬り込まれた。

「わッ」

悲鳴をあげて、倒れ乍らも、持つた刀で、横に拂つた。町田は、避ける暇なく、下腹を、深く斬られた。

所へ、かけ付けたのが、神宮茂十郎であつた。

「兄弟ッ、斬られたか」

「うむ、斬られた」

「うぬッ」

神宮は、今、起き上らう、とする、藤田の頭を目掛けて、一と太刀、浴びせた。急所の痛手に、藤田は、ぐたりとなつた。

虫の息に、なつて居る、藤田の足を持つて、ズル／＼引摺り乍ら、神宮は、家の中へ、はいつた。

兩個には、井上桃之助が、附いて居たのだ。茨城縣から、流れ込んで來て、山田の世話に、なつて居たが、腕も出來たし、文字もあつて、自由黨の方でも、相當に、知られて居た男だ。兩個は、井上に煽られて、藤田を狙つたのである。

「オイ、うまくやつたな」

「井上か」

「火を放けろ」

『よし』

『それ、油とマッチがある』

石油の入った、小さい罐を渡した。

『町田の介抱を頼む』

『心配するな、町田の身は引受けた』

『有難い』

『火を放けたら、どこへでも、飛んでしまへ』

『承知だ』

井上は、重傷の町田を、介抱し乍ら、いづくともなく、立退いた。

火は、燃え上つて、藤田の家は、全く烟りに包まれた。町から離れて、田圃中の一軒家、人が、火を見て、かけつ

けた時は、もう神宮は、居なかつた。

平生から、憎まれて居る、探偵の家として、誰れ一人、火を消さう、とするものはなく、手を控へて、その焼けるに、

まかせた。

翌日から、此變事についての探偵は、きびしくなつた。誰れの仕業か、判然、それと判らないが、大概は推察して

町田と神宮の行方を、探しはじめた。

町田は、井上に扶けられて、一時、その場を立退いたが、途中で、終に息を引取つた。井上が苦心して、屍骸は、

一の宮の光明院へ、擔ぎ込んだ。

『ずるぶん、まづい事をやつたな』

屍骸を、前に置いて、住職の日比は、井上を責めるやうに、斯ういつた。

『うまく、やるつもりが、こんな事に、なつてしまつたのだ』

『どうも、仕方がない』

『何とか始末を、つけてくれ』

『屍骸の始末は、坊主の事だから、何とかするけれど、君は、どうするつもりか』

『どこへでも飛んで、ほとぼりを、さますつもりだ』

『左様か』

日比は、いくらかの金を渡して、

『はやく、ふけてしまへ』

『有難う』

井上は、其場から消えてしまつた。

松井田の警察署へは、前橋の裁判所から、豫審判事や検事が、乗込んで來た。警察本部からも、やつて來て、檢舉

の方針について、相談をはじめた。

『此事件の發頭人は、清水永三郎といふ事に決めて、先づ清水を、抑へてしまへ』

と、いふ説が、多數であつた。

『日比遜も、とに角捕へやう。昨今、やつて來て、注意中の人物であつた。井上桃之助も、引上げた方がよい』

と、なつて、すぐに其手續きにかゝつた。

それにしても、町田と神宮は、どこへ行つたか、神宮の行く先きは、略ぼ當りもついたが、町田の方は、どうなつ

たか、判らない。

光明院へ、日比を抑へに行つたものから、報告が来た。

「同人は、すでに那邊へか立去つて、寺には居らぬ。只だ不思議なのは、町田の屍骸が、戸棚から現はれた」

と、いふ事であつたから、其處で、此連中の犯跡は、いよく明かになつた。放火殺人といふ、重罪犯として、どこ迄も、徹底的に、やつてしまはう、となつた。

日比は、神宮を、逃して置いて、屍骸の始末をつけやうとは、思つたが、急に手が廻つて、自分の一身も危い、と視て取つたから、屍骸は、戸棚のうちへ入れて、其儘行方を晦したのである。

(註) 日比は、實に大膽な男であつたが、その後、杳として、之く所を知らず、どうなつてしまつたか、知るものがない。

井上は、茨城から、流れ込んで来て、高瀬村の小學校長であつたが、此事件で、死一等を減ぜられ、無期徒刑に處せられたが、十数年にして、假出獄になつた。聞く所によれば、一二年前に、死んだとの事である。

其他の人については、其後の事を、よく知らないのが、残念だ。尙、何の記録もなく、私の心覺えを辿つて、考へ考へ書くのであるから、もし甚しき誤りがあつたら、指摘して下さい。多少の脚色を、加へてある事も、序に斷つて置く。

四六

探偵の藤田丈吉が、神宮、町田の兩個に、殺された上、其家まで焼かれた、といふ事は、警察側の人に取つて、非常な當惑を感じしめた。

「何といふ、亂暴な奴等だ」

「もう、勘辨相成らぬ」

「片ツ端から、引つくりしてしまへ」

「全體、自由黨の後援をしたり、また、自由黨から、後援させたりする、博徒の奴等は、此機會に、根絶してしまふに限る」

「同時に、自由黨の過激派は、一掃し盡すのが、肝腎である」

と、いふやうな事を、さかんに唱へて、復讐的に、檢舉を行はう、とする空氣は、しきりに動きはじめた。

今度の事件の、首謀者は、北甘樂郡の清水永三郎と睨んで、第一に、捕吏を差向けたが、どこへ行つたか判らぬ、といつて、捕吏は、空しく引上げて来た。

日比も、井上も、みな行方不明となつた。町田の死骸は、手に入つたけれど、神宮には、うまく逃げられてしまつた。

何事も、警察側の失敗に、終つた丈、それだけに、憤慨の程度も強く、松井田、富岡、前橋の三署が、殆んど協力して、その搜索に着手した。

山田丈之助の家が、怪しいと睨んで居るが、うツかり、手は出せぬ。外のものは、しばらく措いて、清水は、必ず山田の家に居る、と思つても、萬一、ふみ込んで見て、清水が、居らぬ、となつたら、一と騒ぎ起るに、極まつて居る。

たとへ、充分に突留めてあつても、容易に、ふみ込ませまい、凶暴な子分を、多く持つて居るから、何を爲るか、想像もつかぬ恐れがあり、只だ清水一人を、得んが爲めに、不測の災を惹起しては、それこそ、一大事であるからしばらく狀況を見てから、といふ事に決し、他の方面へ向つて搜索の手を、延す事になつた。

自由黨が、唱へて居たのは、自由民権の擴張であるが、彼等は、之れを以て、反上杭官と解釋して居たのだ。薩長藩閥に、反對して居るのは、政府顛覆の手段と見て、彼等は、それを此上もなく、勇ましい事として居たのである。

殊に、上州人の氣は荒く、大前田、相の川なぞといふ、大きい親分が、威張つて居た土地丈けに、其遺鉢を、繼いで居るものも、少なからず在つて、遊侠の徒は、到る處に、勢力を、張つて居たのだ。其中に就て、山田一派の勢力は、隆々として、旭日の如く、上毛の北部から、山を越えて、信州の一角へかけ、實に驚く可き威力を、示して居た。

埼玉縣の秩父方面に、田代榮助といふ、俠客が居て、その勢力はナカ／＼さかんなものであつた。博徒としての交際は、ずつと、前からあつたが、宮部を通して、さらに一層、深い交際をするやうになり、自由黨の爲めには、どちらも、相當の犠牲を拂つて居た。

「親分、宮部先生が、來ましたぜ」
「左様か、こちらへ、御案内しろ」

「へい」

宮部は、東京へ行きがけだ、といつて、田代を訪ねたのであるが、聲をひそめて、
「實は、親分に、頼みがあつて來たのだが、ぜひ肯いて欲しい事がある」と、いひ出した。
「どういふ事ですか」

「先日來の騒ぎは、もう知つて居られるだらうが、縣下では、今、大い問題になつて、居るのだ」

「左様でせう。那の位の事をやれば、警察の方でも、騒ぐでせうから……」

「其處で、例の清水が、少し危ないのだ」

「ふむ、那の先生が……」

「警察の側では、清水を抑へやう、として、血眼になつて居るのだが、清水は、山田の家に匿まつてあるので、どうしても、手が付けられないのだ」

「丈之助が、那の氣性で引受けたら、慥に匿まひ通すでせう」

「我輩も、左様は、信じて居るが、昨今の形勢では、どういふ事件が、突發するか、殆んど豫想がつかぬ、位であるから、或は不意に、清水が、こちらへ、飛込んで來るかも知れない、と思つて、それを、豫め親分に、頼むて置きたいのぢや」

「宜しい。御心配なざるな」

「早速の御承知で難有い、それで安心した」

「時に、先生、大分荒ツぽい事をはじめたが、こりやア、どうも無事にはすみませんぜ」

「丈之助は、那アいふ氣性の男だから、大きく何かはじめやしますまいか」

「つまりは、何かやるだらう」

「困つた事になりましたな」

「親分の方へ、何か、いふて寄越したかね」

「改めて、何ともいふては來ないが、どうも危ねえと、思つて居りますよ」

『いづれにしても、東西相援けるのが、御互の利益だ、と思ふから、そこは、然る可く、考へて置いて、貰ひ度い』
『自由黨は、どうするつもりですか』

『何を』

『此儘で、ずつと、通してゆくのか、それとも、何かやらかすつもりですか』
『今ま差當つて、是れといふ考へもないが、どうせ一度は、行き當るだらう』

『さうでせうね』

『何しろ、政府の方針が、昨今のやうでは、行當る外あるまい』

『自由黨には、どの位の人數がありますか』

『黨員は、全國を通じて、十萬と稱して居るが、いよ／＼となつたら、一割位のものだらう。跡は、皆な逃げ出す、連中ぢや。アツハ、、、』

『それでも、一割位ありやア、大したものだ。一萬人も、役に立つものがあれば、天下を驚かす事が、出來ますよ』
之れを、聞いた時は、さすがに、宮部も驚いた。かねて、良い度胸の男だ、とは、思つて居たが、何か、考へて居るに違ひなく、それでは、斯んな事を、いふ筈がない、と思つたが、うツかりした事は、いへぬから、宮部は黙つて、田代の顔を、見つめて居た。

『先生の御紹介で、照山といふ壯士さんが、チヨイ／＼見えますが、彼の方は、全體、どういふ人でせうか。少し變な所がありますから、御要領なすつたら、いゝでせう』

『何ツ、變な所が：：』

『強い事ばかり、いふて居りますが、少しも、まとまりのついた所がなく、それに、警察の方へ、何か關係でもあるらしく思はれて、油斷がなりませんぜ』

『ふふーむ。何か、左様いふ事が、あつたかね』

『彼の人と、話をした事は、筒抜けに、警察の方へ知れるのが、少し變です』

『最近に、そんな事でも、あつたか』

『これといふて、お話するほどの事は、ありませんが、どうも變だ、と思ふ事は、幾度もありました』
『左様か』

『こんな事を、あまり人にいふのは、よろしくありませんから、外のものには、一度も、口外した事はないが、先生丈けには、ちよつと、申上げて置きます』

『我輩の胸にも、少しは思ひ當る事はあるが、彼奴が、輕卒な爲めばかりでは、ないかな』
『どうも、變です』

『よく注意して下さい』

『まア、それは先生丈けの事に、留めて下さい』

『勿論の事ぢや』

『藤田丈吉の一條でも、可成りに疑はしい事があつた、といふ事です』

『ふむ』

『人を驚かすやうな、強い事ばかり、いふものは、却て存外に弱い者で、少しも油斷はなりません。昔から、犬をやる奴ほど、表面に強い事をいふから、うツかり乗せられると、飛んだ眼に、逢ふ事がある。彼の人、丈吉から、小使を取つて居た事は、たしかな證據が、ありますから、可怪しいです』

と、これから田代は、自分の一人を呼んで、その證據と、なる可き事を、いはせた。
宮部の頭腦に、照山は疑はしい奴だ、といふ事が、しツかりはいつたのは、是れからである。

田代は、後ち起る、秩父暴動の首領であるが、ナカノ落付きのあつた人で、子分も、多く有り、博徒としては理解も深く、大井憲太郎とも交はつて、宮部を信仰して居た事は、恰て神の如くであつた。

四七

山田一派の勢力が、いかに強くとも、其家には、重罪の犯人が、たしかに匿まうてある、といふ疑ひがあり、何時まで、睨合つて居た所で、その犯人が出て来る筈はないのであるから、とに角、一度は手入れをしよう、となつて、前橋の警察本部は、俄に緊張して、松井田と富岡の二署長を呼んで、その打合せにかゝつた。百名に近い巡査は、それ／＼に變装して、一宮方面へ、集つて来た。山田の家へ、踏込む當日は、正服と平服を混じて、それ丈けの人数で、包圍してかゝらう、といふのだから、ずるぶん大がかりの遣方であつた。

丈之助は、未だ熟睡して居て、起きて来るには、何時もの例からすれば、間があるらしい。

子分は、夙くから起きて、拭掃除に急がしく、臺所の方では、朝飯の支度が、やうやく出来た所へ、ドカ／＼と、ふみ込んだ、巡査の一隊、眞ツ先には、警部が、二人立つて、無斷で、はいつて来た。

「汝え達は、何だ」
子分の一人は、警部の前へ、立ちただかつて、大手を擴げながら、斯ういふた。

「本職は、前橋の警察本部から、出張したものぢや」
「それが、どうしたツてんだ」

「少し不審の廉があつて、家宅搜索を、いたすのぢや」
「冗談いつちやいけねえ、此處の家は、そんな事を、される譯が、ねえのだ」

「職權を以て、搜索する」
「何ツ、職權だつて……」

「左様う」
「職權ツてえのは、どんな事か知らねえが、人の家へ、無斷で、ふみ込むなんて、亂暴な事は、誰れが許したのだ」

「上官の命令ぢや」
「上官てえのは、汝え達の親分だらうが、己れ達には、何でもねえのだ。此の家には、山田丈之助といふ、親分が居るのだから、汝え達も無斷で、入れる事は出来ねえ」

「職務の執行を拒むか」
「うむ、拒む。腕づくても、拒むんだ」

「何ぢや」
「何も、糞も、あるもんか」

此押問答のうちに、子分は、追々、集つて来た。
「何だ／＼」
「ヤツつけてしまへ」

「殴りつけろ」
「殺しちまへ」

沸き返るやうな、騒ぎになつた。
警吏の方でも、斯うなつては、血を見る迄も、ふみ込む外はない。刻々に形勢は、峻しくなつて来た。

所へ、丈之助は、寝衣姿の儘、煙草入れを提げて、ノソリ／＼出て来た。

『静かにしろ』

鶴の一と聲で、騒いで居たものは、みな黙つた。丈之助は、警吏を、ヂロリと見て、

『お前さん達は、何だね』

『山田丈之助といふものは、其方の事か』

『うむ、左様だ』

『御不審の廉があつて、家宅搜索をいたす』

『御不審とは、何が御不審なのです』

『それは、後で判る』

『それやア、いけねえ』

『何ぢや』

『後で判る、なんざアいけねえ、それだから、子分の奴等が、騒ぐのだ』

『命令を拒むのか』

『拒むか、拒まねえか、そりや、未だ極まらねえ。そつちのいふ事が、はつきり判らねえのに、こつちの方ばかりで

極める事なるめえから、まア、話して聞かせて下せえ』

『犯人潜伏の嫌疑がある』

『左様か。それなら左様と、早くいへば、何でもねえ事なのだ。其犯人とかを捜さう、といふのだな』

『左様ぢや』

『それぢや、はやく捜したら、可からう』

之れを聞いて、警吏は、はや立ちかゝつた。

『ちよつと、待つてくれ』

『何ぢや』

『居なかつたら、どうしてくれる』

『えッ』

『その犯人とやらが、居なかつたら、どうしてくれるのだ』

『……』

『朝ツばらから、人の家へ、ふみ込んで、勝手に荒し廻つて、もし、犯人が居なかつた時は、何としてくれる』

『何としてくれる、といつて、それは、いたし方がない』

『左様か、政府なんでもものは、ソナナつまらねえものなのか、ヘン』

頭から呑むて、かゝつて居るので、警吏の方が、ヘドモドして居る。

『さア、宣しい。思ひ通り、捜してくれ』

それから、家内の搜索をはじめたが、さらに清水らしいものは、居なかつた。山田は、逸早く清水を遁れさせて、搜索に来るのを、待ち受けて居た位であるから、さんざ手古摺せて、搜索を承知したのである。

『さ、どうした、その犯人といふのは、居たかな』

『……』

『早く抑へたら、可からう』

『……』

警吏は、互に顔を見合せて、グーともいはぬ。たしかに匿まうて、あるものと見て、無理に家捜しをやつて、さら

に其れらしいものが居ない、となつては、少し弱つた。
其處で、山田は、威猛高になつた。

『オイ、汝え達は、人の家を、捜し廻つて、さんざ迷惑をかけて、置いて、役目の上だから、それでも可い、といふ
か知らねえが、己れの方では、此儘引ッ込む事が出来ねえ。さア、是れからは、一疋取ッ換だから、覺悟してか
れ』

警部の一人は、慌てゝ之れを抑へるやうにした。

『まア、山田、さう怒らずと、少し待つてくれ』

『何を待て、といふのだ』

『さ、其處が、役目であるがゆゑ』

『莫迦ッ、何を吐かしやアがるのだ。始めから穩當に、出たなら格別、權柄づくで、ふみ込んで、今更ら犯人が居な
いのでは、何といひ分けも立つめえ、只だ其儘に歸えらう、といつたツて、歸えす事ぢやねえから、さア歸えるな
ら、歸えツて見ろ』

背後を振返つて、

『己れのドスを、持つて來い』

と、子分に聲をかけた。

奥へ飛込んだ、子分は、長い刀を持つて來て、

『へー、親分……』

『よし』

左の膝元へ引きつけて、ブツリ臍口を切つた。

『さア、片ツ端から撫斬にする、對手になりたけりやア、誰れでも、前へ出ろ』

『ま、ま、まて……』

『どうしたツてんだ』

『こちらにも、手落ちがあつたらうけれど、君のやうに、左様怒つたのでは、話にもならぬ。少しこちらのいふこと
も聞いて貰ひ度い』

『はやく吐かせ』

『恐れ入つた。君の潔白は、よく判つたから、それで、よいではないか』

『潔白は、初めから極まつて居るのだ。その潔白を汚されたから、それを、どうしてくれる、と、いつて居るのだ』

『まことに相すまむ』

『すまねえ、と、いふのか』

『左様ぢや』

『それなら、勘辨してやる』

『引取つてもよいか』

『勝手にしやアがれ』

警吏の威嚴も、何もあつたものぢやない。

實に、醜體を極めて、這々の有様で、一同の巡査は引上げた。

『さア、みんな支度しろ』

『親分、何です』

『此仕返しがあるに、極まつて居るから、こつちも、其れ丈の支度をして、いつでも、對手になるのだ』

『ようがす』

子分は、それ／＼に、用意をはじめた。四方へ使ひが飛ぶと、追々に、集まつて来る、子分は、忽ちにして、五六

十人、恰でなぐり込みでもするやうな、騒ぎであつた。 亂暴な遺方といへば、それに違ひないが、警吏を相手に、一と闘ひやらうとする、その意氣は、實にさかんなものである。

若し、此時に、警吏の方で、下手な仕向けをしたら、すぐにも、慘劇は演出されたのであるが、幸ひにして左様いふことにならなかつたのは、何よりの事であつた。

けれども、理窟は、しばらく措いて、事情の上からいへば、斯うした危機を、孕んで居たのだから、どうしても一度は、何事か起る可き、筈であつた。

たとへば、火薬庫の上に立つて、双方が睨み合つて居ると、同じ事で、誰れでもマツチを、一本擦るものがあるば、すぐ爆發し得る迄には、なつて居たのだ。

四八

山田丈之助は、一個の博徒にすぎぬ。

左様した、身分の人に、どれ丈け、政治思想が有つたか、甚だ疑はしいが、たとへ博徒でも、天下國家に志のない、といふ事はいへぬ。

假りに、其志は有つた、としても、要するに、矛盾した考へや、一身の境遇から來た、いろ／＼な誤解もあつて其志を爲すべき、働きの上に、常軌を逸した事があるのは、遺憾千萬である。

宮部から教へられて、幾分は、政治の事も、解つて來たが、同時に、警察官との感情は、日を逐ふて、悪くなるばかりであつた。

町田鶴五郎や、神宮茂十郎が、探偵の藤田丈吉を殺して、その家に、火を放つた一條から、其筋の眼は、山田の一家に注がれ、何といふ事なく、子分等への當りも、良くないのは止むを得ざる事としても、山田の不快は、日一日と募つて來るのであつた。

其處へ乗じて、照山の煽動もあり、旁々以て、山田の感情は、ひねくれてゆく。

博徒と役人、此兩者の感情が、しつくり行く筈はなく、昔から睨合ひの姿で、押通して來た事は、改めていふ迄もない。

多くのうちには、役人と、上手に折合を、つけてゆくものもあるが、山田の氣性は、左様した事を許さず、事毎に衝突して、殆んど仇敵の如き、關係になつて居たのである。

國定忠次が、岩鼻の代官を殺して、赤城山へ立籠つた事は、彼等の爲めに、此上もなき、範を示した如く、その結果が、たとへ何うあらうと、そんな事は、彼等の考へには、ないのである。

博徒ではあるが、五千人の子分を有する、と、いはれた位に、大きな勢力を持つ男、學問は無いにしても、物事に理解はあり、博徒には、惜む可き人物として、宮部は、親切に、指導して居たが、何時か知らず、自由黨の壯士が、多く出入するやうになつてからは、過激な政治論が、子分の感情を唆り、終には山田までを、動かすやうになつて來た。

秩父方面の大親分、田代榮助とは、兄弟の盃も取交はして、その親しみは、一と通りでなかつた。多く子分を有する點からいへば、山田の方が、田代に、すぐれて居たが、その代り、田代には、秩父連山を、股にかけて跋渉する

獵夫の總てが、その配下に、屬して居た。

一挺の銃を持って、いかに暴れ狂ふ猪でも、狙ひ撃ちの一發に、美事に仕留める、といふ、腕の牙えたものは、多く居たのであるから、田代の心次第で、此連中は、すぐにも勢揃ひして、飛出すとの事が傳へられ、田代に對する、官憲の恐れは、まさに此一つであつた。

また、山田に比べると、田代の方には、大井憲太郎の勢力が、直接に注がれてあつたから、大井配下のものは、しばしば田代を訪ねて、萬一の時の約束も、出來て居たのである。

當時の自由黨にも、硬軟の二派があつて、しきりに争つて居た。硬派の主張は、どういふので、あつたらうか。

「政府が、言論を壓迫し、政黨に脅威を加へて、悪政を、悪政とも思はず、獨り藩閥に立籠つて、さらに省る所のない以上、平和の争ひは、無用である。宜しく進んで、直接行動に訴へ、大々的に、破壊運動を、爲す可きである。フランスの革命や、ロシアの虚無黨が、専ら行つて居る、暗殺手段は、我黨も、亦た大に學ぶ可きものだ。

全國の黨員中には、殺身爲仁の烈士も、少なからず、在るのみならず、黨外の同志も、また多く居るのであるから、内外相呼應して、事を起せば、目的を達し得る。假りに破れても、陳勝吳廣たる事は得るのであるから、後日に悔を残す事はない」

過激派は、斯ういふ事をいふて、しきりに政府顛覆を、焦るのであつた。

これに對して、軟派ともいふ可き、溫和派の主張は、

「政府の悪政は、急進派のいふ通りであるが、さればとて、明治廿三年も、追々に、近付いて來る、今日に於て、俄に思ひ立つて、謀叛や暗殺でも、あるまい。靜かに、國會が開けるのを待つても、敢て遅くはないのであるから、左様した暴舉に、與みすることは出來ぬ。

殊に、今日の世は、由比正雪の時代と違つて、左様に容易く、事の成るものでもないから、徒らに火申へ飛込んで、身を焼くよりも、徐ろに機會の來るを待つ方が、賢明の策である」と、いふのであつた。

過激な急進派には、大井の一行が、恰て火の玉のやうになつて、何事かの計畫を、立て居る。それとは、全く別になつて、星の一派は、之れも、大井等と同じやうに、東海道筋の同志を煽つて、不穩の企てを爲して居たのである。

板垣總理を中心として、土佐派の連中は、多く温健な説を唱へ、關東派の大井等に反對し、また、東海派の星等にも、對抗して居たのが、當時の状態である。

星は、少し遅れて、自由黨へ加はり、従つて、大井の勢力には、遠く及ばなかつた。大井の生れは、豊後の馬城山下であるから、純な九州人であつたけれど、關東の自由黨は、擧げて其配下に、屬して居た。

於此星は、東海道筋へ、手を入れて、自分の勢力を、植付けた。後には、大井の凋落と共に、關東も、その手に收めてしまつたが、初めは、大井の勢力が強く、動もすれば、押付けられさうに、なつて居たのである。

宮部は、大井と星の間に介在して、巧みに兩者を扱ひ、正面衝突を爲せまい、として、苦勞したものであつた。

大井の使ひとして、氏家直國が、田代の許を訪れたのは、山田の陣馬ヶ原事件の後ちではあつたが、秩父暴動は、之れから起つたのである、といふ事も、念の爲めに、斷つて置く。

上州から、武州へかけての、博徒は、宮部の骨折で、自由黨へ、結び付けられたので、何時か、其力を利用する事もあらう、と考へたのは、急進派の連中であつた。

鐵道工事が完成して、仲仙道の汽車が、全通する事になつた。沿道の町村では、それを祝して、大掛りの祝賀式を本庄町に、擧げる計畫が、群馬、埼玉の兩縣廳と、鐵道局の間に調うて、明治十七年の五月一日には、いよ／＼開通式を、執行する事として、一切の相談が纏まつた。

「親分、いよ／＼鐵道が出来上つて、大きな祭りを、本庄町で、やる事に、きまつたさうですぞ」
「左様か」

「何でも、政府の偉い人達も、みんな来る、といふ事ですが、大したもんですな」

「偉い人ツて、そりや、何だ」

「大臣や參議を、やつて居る人でさアね」

「そんなものが、出て来る、といふのか」

「へー」

「そいつア、面白い」

「えツ、面白いんですつて……」

「……」

「何が、面白いんです」

「汝え達が、知つた事ぢやねえ」

「へー」

照山を、田代への使ひとして、送り出してから、相當に、日を經て居るのだが、さらに歸つて來ない。

何事も、田代の返事を待つてから、とは思つて居るが、あまり遅ければ、自分支けても、事を起してしまはう、と考へて居るのであつた。

然るに、鐵道の開通式が、本庄町に催され、其處へ、大臣や參議が、うちつれて来る、と聞いては、もう堪忍が出来なくなつた。此機會を外しては、再び事を起す時期はなからうから、とに角、開通式に乗じて、事を起してしまはう、と、山田は決心した。

子分の奴等が、追々に、開出して來ては、山田へ告げるので、開通式の事は、漏れなく判つて。其處で、重立ちたる子分を、集める事にした。

五月一日を前にして、山田の家には、重立ちたる子分が、集まつて來た、二百人や三百人を、動かす力を、持つたものばかりである。

「己れには、現在の時世が、氣に食はねえから、大毀しに、ぶちこはしてしまひてえのだが、汝え達は、己れに、腕を貸すか、どうだ」
之れを聞いて、子分の人達は、ちよつと、答へを仕かねた。そのいふ所が、あまりに大膽であり、且つは、ぶちこはしの意味も、よく判らなかつたからである。

「親分、どうしやうツてンです」

「政府の爲る事が、一から十まで、みんな氣に食はねえから、思ひ切り、大こはしにやつてしまはう、といふんだ」
「而し、どんな事を、やるのですか」
「本庄の町では、鐵道の開通式があつて、大臣や參議が、みんな來るといふから、そこへ押出して、片ツ端から、殺

ツつけてしまはう、といふのが、己れの考えた」
「自分は、各自に、顔を見合せた。そのうちには、驚異の眼を睜つて、太い息を吐くものもあつたが、大概は、壯快な企てだ、といった風を示して、不同意は、ないやうであつた。」

「左様いふ事を、ヤツつけて、後の始末は、誰れがつけるのですかね」

「そりやア、自由黨の先生方が、控へて居るから、少しも心配はねえ」

「なる程、左様ですな」

「其處で、いよく始める、となつたら、びつくりするほどの事を、ヤツつけるのだから、相談は、よく行き届かせて、置かなければならねえ。高崎の觀音堂へ寄つて、萬事の手筈を、きめる事にしやう」

「それが、いゝでせう」

「今日の席に、來なかつたものえも、汝え達から知らせて、觀音堂の時は、手落ちのねえやうに、しなけりや、いけ

わえ」

「承知いたしやした」

「そのうちには、秩父の田代からも、何とか、いつてくるだらう」

「えッ、秩父の親分も、此事は、承知なすか」

「左様だ」

「へへ、左様でしたか、こりやア、大した事に、なりますぜ」

「人は人、己れは己れだ。別に、田代を頼りにする、といふ譯ではねえが、田代も、矢ッ張り、政府の仕方が、良くなえ、といつて怒つて居たから、誘ひをかけたなら、直ぐに返事をして來たのだ」

「この頃の、警察の奴等は、滅茶苦茶に威張りやがるから、たまには、目潰しをくれてやるのも、いゝだらう」

「それぢやア、みんなで、能く打合せをして、觀音堂へ、集つてくれ」

「合點です」

「氣取られねえやうに、うまくやつてくれ」

「大丈夫です」

「それにしても、照山さんは、どうしたか」

「照山ツて、那の景氣のいゝ人ですか」

「さうさ」

「へ、那アいふ景氣のいゝ人が、一枚加つて居ると、大勢の氣が引立つて、ようがすぜ」

「秩父へ、使ひを頼んだら、すぐ出かけてくれたが、それツ切り、音沙汰無しだから、己れも、變に思つて居るのだ」

「誰れか、容子を見せに、やりませうか」

「左様して貰ひてえ」

「氣の利いて、足の疾い野郎を、誰れか、見立て、やりませう」

「頼むぜ」

「此日の集合は、それですむだが、それから三日目には、高崎の觀音堂へ、重立ちたる子分が、残らず集つて、眞劍の相談をはじめた。」

高崎の町を離れ、大きい川を隔て、高く聳えて居る、山の半腹に、觀音堂が在る。自由黨の祕密會は、多く此處

で開かれたもので、宮部が、田代や山田を呼ぶ時は、觀音堂に、限つて居た、その關係から、山田も、之れを集合に

利用したのである。

秩父へ、使ひに行つた、照山は、此時は、既う殺されて居たのだ。それは、絶體に秘密にされて居たから、田代の方は勿論、山田でさへ、少しも知らなかつた。

照山殺しの一條は、追々に、速べる事として、山田の方の事件から、片付けて行かう。

四九

政治的に、何等かの意見があつて、政府を倒さうといふのではなく、時々起る、警察吏と、子分の争ひ、それから、自由黨員と、地方官吏の軋轢、左様した事の見聞が、自然に、政府に對する、反感となり、反上抗官を、一種の任侠行爲と、考へて居る、人達が、理由もなく企てた、大臣暗殺、さても恐ろしい事件である。

觀音堂の集會で、大體の方針を定めて、ひそかに、準備を始めた。第一には、刀や槍の類で、それから小銃、不足の分は、竹槍と棍棒で、間に合せる事にした。

各方面に別れて、子分が、奔走した結果、いよくといふ時に、集まるものは三千人以上、それから先きは、時の勢ひで、集つて来るだらうから、五千人にはなる、と見込んで、その準備は、追々に運んでゆく。

只だ不思議なのは、之れだけの計畫が、いかに秘密の間に、行はれるとしても、全く警察吏の知る所と、ならなかつたのは、果して、何ういふ譯であらうか。

「親分、駄目ですぜ」と、いつて、參謀格の子分が四五人、かけつけて来て、山田の前に、坐り乍ら、斯ういふのであつた。

「何が、駄目だ」「開通式とかいふのは、中止になつちまつて、何時やるのか、判らねえツて事ですが、どうしますね」

「何だツて……開通式は止めになつた、といふのか」

「へー」

「ふふーむ、そいつは、變だな」

「無期延期とか、いふのです」

「それぢやア、止めたのだらう」

「何でも、こつちのやる事が、知れたのぢやアねえか、と思ふんですが……」

「誰れが、聞込んだのか」

「閻魔が、聞いて来たのです」

「傳次が、聞き出したのなら、間違ひはなからう」

「今、閻魔が、やつて來ますから、聞いて御覽なせえ」

「うむ」

閻魔の文身があるので、いつか綽名を、閻魔と呼ばれ、度胸が太いのと、腕ツ節が、強い所から、子分のうちでも、重きを爲して居る、傳次といふ奴は、元は本庄の生れて、那の邊の、地理に詳しい、といふので、大體の方針が定まると、すぐ本庄へ、飛んで行つたが、その傳次からの報告で、開通式が、延期されたのも判り、くはしい事は、傳次が、来て話す、といふのであつた。

「閻魔が、來ましたぜ」「左様か」

山田が、廊下の方を、振返る刹那に、のそりと、はいつて来たのは、上背のある、骨太の傳次であつた。

『どうだ、傳次、一件は、延期になつたさうだな』

『へー、延びましたよ』

『どういふ理由で、延びたのか』

『そりや判らねえが、鐵道の方へ、こつそり入らせて、置いた奴の話では、何でも、急に止める事になつたので、前橋の縣廳から、そんな事を、いつてよこしたのが因だ、といつて、居ましたよ』

『ふーむ、而て見ると、こつちの企てを覺つたかな』

本庄町は、埼玉縣兒玉郡である、縣の所屬から言へば、埼玉縣廳の管轄に、なつて居るのだ。前橋は、群馬縣廳の在る所であるから、前橋の縣廳として、本庄町へ、直接にいふてよこしたのではなからう。浦和にある、埼玉縣廳から、中止の通知が、來たに違ひない。要するに、群馬埼玉の二縣が、地理の上から、本庄町を、開通式の場所に、ふり當てたのであつて、いよくといふ今になつて、急に中止する、といふのは、深い事情があつたに違ひないが、果して、山田等の計畫が、其筋の知る所となつて、中止する事になつたのか、どうか、といふ事は、判然して居たのではない。

けれども、山田を始め、子分の一同は、てつきり左様と、定めてしまつたのである。

其處で、山田は、また相談の、くり返しをやつて『自分等の計畫が、漏れた爲めだ、とすれば、必ず其筋のものが一同を捕へに、向つて來るのは、きまつて居るから、どうせ一たん、考へた事は、大なり小なり、ヤツつけた方が、男らしくてよからう』と、いふ事になつて、それから、再び計畫の建直しを爲る事になつた。

妙義山の麓に、陣馬ヶ原と、いふのが在る。其處へ集つて、第一には、附近の富豪——不義にして利を貪る——を脅かし、それから、松井田と富岡の、警察署を襲撃して、前橋へ押出し、縣廳や警察本部へ迫り、同時に、監獄を解放して、四方に、同志を求め、更に高崎の兵營を侵さう、といふのであるから、實に驚き入る外はなく、大膽な計畫であつた。

尤も、山田の背後には、自由黨員が、附いて居た事は、改めて、いふ迄もない。陣馬ヶ原に勢揃ひをして、いよいよ押出す時には、檄文を散布したが、その文字は堂々たるもので、明かに革命の先驅たる事が、立派に認めてあつた。

五〇

山田の繩張は、上信二州に跨つて、實に絶對なものであつたから、上州に於ける根據地、南北甘樂郡は、いふ迄もなく、信州の方は、碓氷、南佐久の、二郡へかけて、檄を傳へると、忽ちにして、集つて來たものは、三千人を越えるの、有様であつた。

時に、明治十七年の五月十三日、さしもに唐き、陣馬ヶ原も、人を以て埋められるの觀があり、向鉢巻に繩、草鞋穿きの輕裝で、或は竹槍、或は鐵砲、長い刀を、腰に帶して、意氣、天を衝くの概を示した。

要するに、博徒の爲る事であるから、いかに人數が多くとも、隊制とか、陣形とか、いふ點に就ては、敢て視る可きものもなく、只だ雜然として集り、徒らに騒然として、喚くばかりではあつたが、親分への情誼を重んじ、子分としての、義理を果す可く、生命を賭けて、來たものばかりであるから、その意氣込みは壯んで、いかなるものにも、恐れぬといふ元氣は、溢れて居た。

近年になつて、政黨の院外團が、いくたびか試みた、上野公園の示威運動、那のやうな力弱い、つまらない集合と

は、全く同日の論にならぬ。

『さア、人数は揃つたが、これから、何うする覺悟ですか』

山田の、左右に控へた、自分のうちから、斯ういひ出したものがある、と、それについて、

『松井田を、先きにするか、それとも腕試しに、どこか、ヤツつけませうか』

と、訊くものもあつた。

『己れの考へを、いはう』

『へー』

『岡部爲作の生産會社を、第一番に片付けてしまはう、と思ふが、どうだ』

『なる程、そりやア、面白え』

『名前は、立派な生産會社でも、その爲る事は、無慈悲な高利貸だ。今迄に苦められたものは、どれほどあるか知れ

ねえ、多くの人の怨みが、懸かつて居る會社だから、先づこれを焼いてから、松井田へ、押出す事にしやう』

『それが、良いでせう』

『松井田から、先きの事は、その時／＼に定めやう』

『へー』

『さア、一番手のものは、直ぐ繰出せつ』

『合點だ』

傳令の役は、四方へ飛ぶ。

忽ちにして、二三百人の一團が、動きはじめた。

北甘樂郡の、生産會社といふのは、岡部爲作の、個人經營に成り、高利貸を目的と、爲るものであつた。

一概に謂ふ、金貸商賣は、まことに忌な營業である。困るものが、借りに来るから、その需めに應じて、金を貸附

ける。借りる時は、難有がり奉つても、返す時には、きつと、苦情が附く、利息が高いからだ、とは、いふものゝ

其れは始めから、覺悟の上ではないか、貸す方の身に、なつて見ると、ふみ倒されないやうに、と心掛け、萬一にも

返済されぬ事があつても、丸損にならぬやう、考へて、高い利息を取るのだ。その上に、手堅い擔保を入れさせたら

いよく大丈夫と、いふ事にもならう。それで、滞りなく返済されたら、元金の二倍にも、三倍にもなるが、ふみ倒

されても、丸損にはならぬ。

斯んな、ポロい商賣は、他に多く在るまい。その代り、人の怨みは残るのだから、あまり、良い商賣とはいへぬ。

人情味の薄く、思ひ遣りが、少ない人でなければ、とても、行つてゆけぬ、商賣である。

只だ、茲に一つ、不思議な事は、昨今の銀行が、昔の高利貸と、同じやうな事をやつて、居るのだが、個人の金貸

ほどに、悪く思はれない事である。

銀行の方で、高い利息を、取つた上に、取締役や支配人、または貸附係にも、多くの袖の下を、與へる事は、どの

銀行にも、平氣で、行はれて居るが、世間の人も、さうした事には、無關心で居るやうにも、思はれる。

銀行で、金を借りて居る事は、自慢らしく、話すものも居るが、金貸から、借りて居る事は、ひどく人に知られる

のを厭ふやうな、風がある。

著者は、どちらも經驗の無い方であるから、貸借の上に、どうした心理が、現はれて来るか、そんな事は、勿論、

知り得ないが、何時も變な事だ、と思つて、之れを視て居る。

生産會社から、金を借りて、土地や家屋を取られ、再び浮上り得なかつたものは、實に少なからずあつたので、それ等の人は、どうせ會社を、よくいふ譯もなく、従つて、岡部といふ人は、鬼か悪魔の如く、一般には、噂されて居たのである。

十六日の夜になつて、一團の博徒は、會社を眼がけて、殺到した。

岡部の家人や、會社のものは、何者からか、此報を傳へられて、逸早く逃げてしまつたから、一人も、死傷はなかつたけれど、家屋と倉庫には、火を放つて、殆んど其全部を、焼き盡してしまつた。

此處へ、押寄せゝる迄にも、小さい金貸や、評判の良いくない、富豪には、相當の制裁を、加へて來たので、會社へ、火を放つ頃は、可成り、殺氣立つて居た、といふ事である。

一番手、二番手と、追々、くり込んで來て、呐喊を、つくり乍ら、狂れ狂ふ状態は、何とも名狀のしやうもないが、それ迄になる間、警察權は、少しも行はれて居らず、巡查の片影だに、認め得なかつたのは、頗る奇怪千萬であつた。

會社を焼いて、一團は、かねての計畫通り、松井田へ、押出して來た。警察署の破壊をしやう、と爲るのであつたが、此時には、高崎分營の兵士が、すでにくり出して、それ／＼部署を定め、警戒の任に、ついたのみならず、前橋の警察本部に於ても、大體の方針を決して、いよいよ攻勢を取る事になつたので、形勢は、遽に一變して、博徒の方

は、やうやく浮き足に、なつて來た。

元來が、烏合の勢でもあり、晝夜、暴れ廻つた、疲れも出て、松井田警察署へ、迫つた頃は、よほど力も、弱つて居た。

鑑臺兵の出動と聞いて、いくぶんの恐れを、抱くやうにもなり、巡查の方の勢ひが、それと全て、反對に、強くなつて、警察署が、破壊される事は、防ぎ得たので、暴徒は、追々四散して、初めの勢ひは、全く失はれてしまつた。

重立ちたるものは、多く山を越えて、南佐久郡へ遁れた。それを、逐ひ打ちに、後から迫り、碓氷の方面を、堅めて居た、兵士や巡查が、之を挟み打ちにする。今でも、那の方面の立木には、銃丸の跡が、残つて居る位だ。

山田を始め、捕へられたものは、數十名に及び、裁判の結果、死刑になつたものも、數名在つて、長い刑期の處分を、受けたものも少なからずあつた。

五.一

照山が、どうも怪しい、といふ事は、先輩の間にも、時々、口走るものがあつて、やうやく疑問の人とは、なつて來たが、それにしても、一般の黨員は、彼を自するに、一廉の志士を以てしたのは、さすがに、照山の立廻りが、巧

みてあつたものと、視る外はない。

表には、慷慨義烈の志士を粧ひ、裏には、同志の秘密を賣物にして、官憲へ、取入つて居たのは、憎むべき事ではあるが、今から、當時の事を顧みれば、決して彼一人ではなく、それと同じやうに、汚い事を、行つて居たものは、少なからずあつたのだ。

『明治密偵史』といふ書物がある。

是れは、宮武外骨が、編纂したものであるが、櫻間要三郎や、大津淳一郎が、槍玉に上つて居る。

櫻間は、徳島縣の生れて、明治十五年の十二月十六日、大阪の東區、北久寶寺町の第一樓に於て、自由平權忘年懇親會が、開かれた際、臨時會員として出席し、主催者の一人たる、松木正守と、爭論の結果、松木を短刀にて、刺殺した所から、折角の懇親會が、血塗れ騒ぎとなり、櫻間は捕はれて、裁判沙汰に、なつたのであるが、爭論の原因は

櫻間を、政府の密偵である、と、いふて、松木が、ひどく罵つたので、櫻間も、それに對抗して松木と争ひ、果が、

腕力に訴へて、格闘に、なつた所から、櫻間は、隠し持つた、短刀で、松木の胸を、ぶつりと刺して、即死せしめたのである。松木が、相當に知られて居る人丈けに、世間の評判は、ナカ／＼に大きく、新聞の記事も、賑はつた位である。

東京からは、大岡育造が、櫻間の辯護人として、大阪へ下り、得意の雄辯を揮つた、刑事の辯護は、最も得意であつたし、例の花井お梅を、辯護してからは、一層、其名を知られて居たので、此辯論は、非常に有力なものであつた。

斯くて、櫻間は、大岡の辯護した通り、正當防衛と認められて、無罪の宣告を受け、それから、一人前の有志家として、世間を歩くやうになつた。

然るに、明治十八年になつてから、櫻間は、國事探偵である、といふ事が、意外の事から發覺した。

それは、どうした事かと、いふに、信州の松澤求策と、いふ人が、代言人の試験問題が、或者に漏洩した、といふ事件で、司法省が、絶對秘密にして居たのを、どうした方法からか、ソツと、松澤の手へ、試験問題に關する、書類を盗み出して、渡したものが、あり、それを、松澤が、受験人の書生に與へた、といふ事件が起つた。

松澤は、國會開設請願の、運動を起した人で、長野縣に於ける、民權家の最初の一人であつた。殊に、明治十三年の頃、西園寺公望を説いて、東洋自由新聞を興し、中江兆民、松田正久、上條愷司等と共に、政府の攻撃をやつて、宮中に迄、問題を引起したほどの遺手であつたから、政府の方でも、かねて眼をつけて居た所へ、此問題が起つたので、それを幸ひに、引ッ捕へて、獄に投じ、終に窃盜罪に問ふて、一年の懲役に處し、石川島の監獄へ送つてからも、苛酷な取扱をして、トウ／＼牢死せしめた。

其判決文のうちに『野崎城雄ノ手續書、櫻間要三郎ヨリ、司法卿ニ宛タル密告書、訊問調書ヲ以テ、證據充分ナリトス』の一項があつたので、さては、彼も密偵であつたか、松木が、彼を犬と罵つたのは、全く事實であつたか、といふて、今更の如く、松木の死に、同情を表したのである。

いふて、今更の如く、松木の死に、同情を表したのである。

また、大津は、茨城縣から選出されて、古くから、代議士に出て居たが、警視廳の犬であつた、といふ事は、可成り、人も知つて居て、平民新聞がそれを、素破抜いたのを、密偵史にも、加へてある。後には、憲政會の總務となり今は、貴族院の一員となつて居るが、最近に、日本憲政史を發行した。但し、そのうちには、密偵の事は、書いてないやうだ。

人間も、存外に淺ましいもので、食ふと、食はぬの境には、どんな事でもやるが、同志を賣り、味方を陥入れるやうな、志士面をした、密偵丈けは仕たくない。

著者の長い經驗からいふと、それに、能く似たものが、本當に多く在る、しツかりした證據がないから、正確に言ふ事は出来ぬが、怪しいと思つた奴は、その外にも、多く居たのである。

明治十年の春、星亨と片岡健吉が、非常な決心を以て、薩長藩閥の巨頭を、一擧に斃すべく、大陰謀を企てた時にも、その秘密が漏れて、忽ち保安條例の發布となり、京城三里以外の地へ、巡査附きて、立退きを、命ぜられ、一切の計畫が、破れた上に、星も、片岡も、長く獄に繋がれたのであるが、陰謀遂行の、最後の會合には、選びに選んだものばかりで、僅に三十幾名の同志であつたが、その席で、定めた事が、二三時間の後には、三島警視總監の知る所と、なつたのだから、どう考へても、集つて来たものうちに、密偵が居たに違ひない。けれども、それが、誰れであつたか、五十年経つた、今日でも、さらに判らない。

初めから職業として、密偵を、務めて居るものは格別、同志のやうな顔をして、その仲間に、なつて居て、秘密を漏らす奴ほど、世に憎む可く、且つ卑む可きものはなからう、よほど品性の、下等なものでなければ、とても、やれる事でない。

其頃には、よく左様した奴があつた。不圖した事から、其れが知れる、と、大ぜい集まつて居る席で、袋叩きにしてから、除名したものであるが、ひどいものになると、息の根を留めるまでゆく。照山などは、その制裁を、受けた、一人である。

五二

大和の人で、樽井藤吉といふものが居た。古い自由黨員であるが、ちよつと、逢ふた所では、極く温和な人物で、和學と漢籍は、相應に讀んで居たが、洋書は讀めなかつた。けれども、心懸けの良い人で、翻譯書に據つて、新しい學説は、可成りに、研究して居た。

此人が、肥前島原の、江東寺に於て、東洋社會黨なるものを、興した事がある。それは、結黨式を擧ぐると、間もなく、官憲の壓迫で、押潰されてしまつたが、樽井の名は、ひろく知られて、それから、一般の人も、やうやく、社會問題の研究に、目覚めるやうに、なつて来たのである。

板垣總理が、歐米の視察をすませて、歸朝した時の演説は、一部の識者に、ひどく衝動を興へた。

『歐米の都市を、歩いて居るうちに、最も能く眼についたものは、貧富の懸隔の甚太しい事であるが、物質的の文明が、やうなく發達するにつれて、機械應用の力が盛んになり、製造工業の上へ、著しく能率が増進して、その收入も外くなる、が、それは、すべて資本家の所得となる。器械の補助の如くなつて、労働する人々の所得は、さらに増進しないのであるから、之が爲めに起る、貧富の懸隔は、日を逐ふて、甚太しい事になるであらう。

その勢ひは、終に我邦にも、及んで来るから、今後は、此點に注意して、苟も政治家たるものは、之に對する政策を、考慮しなくては不可、と思ふ』

議論の大意は、斯うであつた、と記憶して居るが、板垣は、さすがに偉い人であつた。明治十六七年の頃に、斯う

した説を立て、居たのであるから、眞に先覺者たるの、名を辱めぬ。

樽井なども、此説を聞いて、それから、社會問題の研究に、没頭したのではないか、と思はれる。

著者の記憶を呼起すと、明治二十年の政變に就て、著者は、星亨、石黒瀧一郎、片野文助、寺田寛等の人々と、共に獄に投ぜられたが、樽井は、宇陀太郎の共犯で、矢張り秘密出版物の事件で、ひとしく入獄の身となつた。著者と樽井は、事件の一部について、多少の關係があり、双方の陳述に、幾分の相異があつたので、豫審廷に於て、對質訊問をうける事になつた。

此時の豫審判事は、今でも、大阪に居るが、昨今は隱居して、令息が辯護士に、なつて居る、氏名は、松岡歸之といふのであつた。

著者と、樽井は、その陳述を異にして、互ひに一步もゆづらず、争つたが、實をいふと、著者のいふ方が偽りであつたから、樽井に、突ツ込まれると、少し受け太刀になる。さればといつて、著者が、樽井に負けて、陳述を變更する事になれば、事件の範圍は廣がつて、新たに入獄するものもあるのだから、著者は、一生懸命であつた。

終に、著者は樽井を殴りつけたから、さア、樽井は怒つて、それから組打になり、豫審廷で、大嘩喧をやつた。

書記や、廷丁の引分けて、その日の訊問は、中止になつたが、著者の立場は、實に苦しかつた。出獄の後、樽井は、著者を、訪ねて来て、その時の思ひ出を語り、著者も、自分の苦しい立場を打明け、互に手を取つて、舊交を温めた事がある。

五三

樽井の社會黨が、解散を命ぜられる前、照山は、關西方面の旅行から、自由黨本部へ、歸つて来て、宮部に、別室で面會を求めた。

「やア、久振りぢやツたね」

「先生、別に御變りもなく……」

「難有う、幸ひに達者でな」

「少し御相談し度い事があつて、別室を願つたのです」

「何ういふ事か」

「樽井君が、長崎縣へ行つて、赤松泰助君と共同で、東洋社會黨を、興したさうです」

「うむ、我輩も、聞いて居る」

「どうでせう。僕も一つ、飛込んで見やう、と思ふてすか」

「樽井は、どんな事を、考へて居るのか、未だ聞いて見ないが、西洋は知らず、我邦では、とても育つまい」

「併し、先生、樽井君は、ナカ／＼思慮の深い方で、よく考へて居りますぜ」

「どんな事を、考へて居るか」

「貧富の平均を謀つて、生活の平等を期する、といふのが、樽井君の主張で、實に雄大な思想を、持つて居るのです。僕は、樽井君を、那アいふ人物ではない、と思つて居たのですが、恰も救世主の如き人物ですな」

「ふふーむ」

「先生、自由黨なんぞの主張は、本統に、人間の幸福を、期待して居るのではなく、只だ一日の儉安を、是れ事とし

て居るに、すぎないのですから、ツク／＼厭になつて、しまつたのです」

「それぢや、どうしやう、といふのか」

「はやく、叩き潰して、樽井君の所謂、社會黨にして、しまふのですな」

「君は、左様いふ事が出来ると、思つて居るのか」

「必ず出来ぬ、といふ事もありませんまい」

「堅く信ずるか」

「はア」

「然らば、直に自由黨を、出て行け」

「えツ……」

「君は、自由黨を出てから、左様いふ事をいへ、苟も黨に居て、そんな事を考へたら、黨の謀叛人として、視る外

はない」

「……」

「馬鹿ツ」

今迄に、宮部が、斯んな激語を、放つた事は、只の一度もない。黨内の若者が、どんな亂暴な事をいふても、大概

は、笑つて聞流して居たのだが、此時ばかりは餘程、癢に觸つたものか、顔色も變つて、語氣も鋭く、恰も叱咤する

やうにして、怒鳴りつけたのであつた。

此一喝で、照山は、黙まつてしまつた。

「オイ、君は、日本を、何ういふ國だ、と思つて居る。君は、どうして、日本國民であるか、といふ事が、解つて居

ないのか。

萬世一系の天子を戴いて、特種の國體の下に、吾人は、祖先以來、今日に至つたのであるから、西洋の學說や、

異つた民族の唱へる、机上の空論を、その儘に受入れて、此美しい國體に、傷のつくやうな事は出来ぬ。

財産の均一を謀つて、貧富の平等を希望するなぞ、といふ事は、怠け者のいふ議論で、勤勉な國民が、口にす可

き事でない。生活が不平均なればこそ、各人に、奮發の心も起るのだ。貧富の差別があるから、人々に、働く勵みも出て来る譯で、昔からの富豪が、一朝にして没落するかと思へば、今日の貧乏人が、明日は、巨萬の富を握る。そこに、人間の生存上の樂みはある。但し、富者の力が、餘りに強くして、貧者の生存を、妨げるほどになれば、政治的にも、社會的にも、之れを押付ける方法は、いくらでもあるのだから、少しも心配は要らない。自分の力が足りないで、人の生活を呪ふのは、甚だ宜しくない事だ。いくら稼いでも、貧乏の境遇から、脱出する事が出来ない、といふて、世を怨むのは、間違つて居る。貧富を均一にして、生活を平等にしよう、などといふのは、痴人の夢で、とても問題にならぬ。

假りに、それが出来る、として、いよ／＼左様いふ境遇に立つものは、果して幸福か、といへば、決して左様ばかりはいへぬ。人間といふものは、いかなる場合にも、絶對の平等は、決して得られるものでなく、また、其れが得られる、とすれば、そこに復た、實力あるものと、その無いものとの間の、不平等が、現はれて来る。貧富を均一にして、生活を平等にすれば、太古の世に復歸するのだが、世の狀態ばかり、太古と同じやうになつても、人間の心が、太古の人のやうな、無欲にして、純真なものにならなければ、平和は保たれるものでない。櫻井に逢ふて、其議論を、聞いて見ないから、はつきり、賛否は、表し得ないが、君のやうな、淺薄の説を以て、今の社會組織を、破壊し去らう、とするのは、甚だ怪しからぬ事だ。全體、君は、何事にも、輕卒て不可よ。言行をもツと慎しむがよい。君に就ては、いろ／＼の悪い噂もあるから、よく注意したまへ。』

宮部は、平生から、餘り斯ういふ事は、いはぬ人であつたが、此時は、よほど疝癢に、さはつたものか、照山を、頭ごなしにやつつけて、グーとも、いはせなかつた。

殊に、最後の一言は、照山の頭へ、ピンと、響いたらしく、頗る不快の容子で、宮部の顔を見つめたが、強て其れを、質さうともしなかつた。

照山が、宮部の所へ来て、之れをいふ迄には、相當に觸れ廻つてからであるから、その後ちも、黨員の人々から、宮部へ注意するものが、あつた位だ。

兎角するうちに、東洋社會黨は、其筋から、解散を命ぜられたので、その噂も、煙の如く消えてしまつた。

五四

此事があつてから、宮部は、照山を嫌ふやうになつて、其後も、照山の舉動には、深い注意を、拂ふやうになつた。

そのうちに、月日は経つ。様々の事件は起る。何時も、自由黨員が、中心となつて、政界に、波瀾を捲起すが、其度毎に、黨の秘密が漏れて、政府側に、先手をうたれる所から、黨内に密偵が、まぎれ込んで居る、といふ説があつて、互に相疑ふやうに、なつてきた。

此疑ひは、決して空しき疑ひでなく、各人が、疑ふ通り、密偵は、少なからず潜んで居たのである。只だ、確かな證據を、握り得ぬから、一片の疑ひにすぎぬが、疑はれたものゝ大半は、まきに密偵で、あつたのだから、實に驚き入つた事である。

密偵にも、幾通りかの區別があつた。自分の身に、何かの疑ひを、うけて居て、それを、遁れる爲めに、他の人の、秘事を賣込んで、自分は、嫌疑の渦中から遁れる。といつたやうなものも在り。また、苦しい生活をして居る所へ、思ひ設けぬ金を得て、それが爲めに、ズル／＼と引込まれて、何時か知らず、御用達をする、といつたやうなものもあつて、其事情からいへば、眞に氣の毒なものもあるが、多くは金の爲めに、自分から、飛込んでゆくのであつた。

小勝俊吉も、その疑ひをうけた一人であつたが、著者には、どうしても、疑ひ得なかつた。

小勝とは、可成り親しく交つて、其家には——芝の田村町に在つた——しば／＼泊つて、親切な世話もうけたし、

また、小勝の妻といふのが、實に立派な婦人であつて、貧しい生活をして居ながら、同志のものに對して、よく世話をしてくれた事は、誰れしも、感心した位である。それを知つて居るものは、井上敬次郎とか、山口熊野とか、いふ人の外、多くは、死んでしまつて、今日では、その事を、よく知つて居るものは、極く少ないが、假りに小勝の密偵が、事實であつた、としても、妻女の親切に對しては、深く感謝して居るものがあらう。

著者の知る限りに於ては、小勝の生活状態が、餘りに貧しかつたので、どう考へて視ても、彼が密偵であつた、といふ考は、起つて來ない。併、乍、或は密偵ではなかつたか、と思はれる事も、いろ／＼人から聞かせられて、左様も考へられる事はあつた。いづれにしても、彼の密偵たりしや否は、永久の疑問と、いふ可きである。

一と頃は、荒川高俊が、密偵である、といふ評判もあつて、荒川は、ひどく神經を、惱ました事がある。

例の静岡事件を、都新聞が續物にして、長く掲げた事があつた。それには、何の證據も示さずに、初めから、斷定的に書いてあつたので、著者は、荒川の爲めに、之れを憤慨した事がある。

荒川が、清淨無垢の志士で、あつた事は、一點の疑ふ可き、餘地もなかつたのであるが、どういふ理由で、さうした事を書いたものか、その原因は不明であるが、要するに、小説を書く人の品性も、その頃は下劣であつたから、何の責任感もなく、風説を事實として、書きなぐつたものに、違ひない。

殊に、其頃は、荒川も、故人になつて居る、自身の潔白を、證明し得なかつたので、故人の爲めに、親交あつたもの、憤慨は、一だんと、はげしかつた。

山田八十太郎と、いふ人が、此事件で、八年の苦役を勤め、無事に出獄してから、都新聞社へ、談判に押かけた時、一人も之れに對して、辯明をなし得るものがなく、山田は、終に二三の社員を、殴きつけた上、應接室を打毀して、引上げた事もあつた。

荒川が、左様した、汚ない人間でない事は、確く信じて居るが、昔の北辰社時代から、同列の一人であつた、山川

善太郎の身についても、同じやうな噂が、可成り盛んであつた。此人に就ては、著者にも、幾分の疑惑があつて、必ず左様でない、とは、いひかねる。

併、山川のは、密偵といふ程度のものでなく、元來が、餘り秘密の守れる質でなく、人を煽動して置いて、後から其れを批評して、喜んで居る、といった風の人であるから、何人にか怨みをうけて、斯ういふ噂を、流布されたものだ、とも思はれる。

最初の自由新聞に、論説を書いて居て、其の人格と、文章に依つて、同志のうちに、重きをなした、曾田愛三郎と、いふ人があつた。

島根縣の生れて、學者肌の人であつたが、非常に物優しい、後輩に對しては、極めて親切な方であつた。著者も、此人から教へをうけた事は、今に忘れぬ位である。

新潟の新聞社から、主筆として迎へられ、一年餘りすると、どういふ理由か、村正の名刀で、切腹して死んだ。其遺書には、斯ういふ事が、書いて在つた。

余ハ、今日マダ、唯物論ノ理窟ニ當ルガ如ク固信セリ、然レドモ、此に至テハ、余ハ、正ニ有神論者ニ、服從セザルヲ得ズ。

汝ハ、精神的ノ教育ヲ受ケテ、余ト反對ノ歴史家タルコトヲ望ム。

汝ハ、前腦大ニシテ、萬難ヲ冒シテ、學ヲ所アラバ、世ニ立ツコト受合ナリ。

汝、文學者トナルコト勿レ、政治家タルコト勿レ、汝ハ、武人ニ非ザレバ、神學者トナレ。汝ノ祖母ハ、熱心ナル信者ナレバ、汝、幸ニ其手ニアレ。

文意から察するに、子供に、書き残したものであらう。此遺書を、うけた子供が、今、どういふ人物に、なつて居るか、その詳細を、知り得ないのを、残念に思ふ。

曾田の死は、餘りに突然であつたから、その原因さへ判らず、或は貧乏を悲觀したからだ、といふものもあるが、左様いふ人物でなかつた事は、苟も、彼と交際したものは、みな知つて居らう。

只だ、茲に一つ、聞通し得ぬのは、彼に對しても、密偵であつた如く、ふれ廻したものが、あつた事だ。

「曾田は、密偵たりし事を恥ぢて、那アした最期を、遂げたのである」と、いふ事が、さかんに傳へられた。

けれども、それについて、確な證據はなく、單に、風説として、傳はつただけであるが、著者は、之れを聞いた時に、實に怪しからぬ事を、いひふらすものがある、と思つた。

是れも、荒川と同じやうに、全く根據のない風説であつた。殊に、本人の死後に於て、左様した事を、いひふらした奴は、憎みても餘りある、下郎どもだ。

照山の事から、密偵物語に、外れてしまつたが、當時の、政界の内面は、斯うした事から、考へてゆく必要もある。前の人々に比べると、党内に於ても、照山の位地は、頗る卑く、社會的に視ても、一個の壯士たるに過ぎなかつたので、政府筋から、手を廻して、之れを陥れるやうな事も、まさかに行つたのではなからう。荒川や、曾田については、政府筋の悪宣傳も、あつたであらうとも考へられるが、照山に對して、そんな事はないものと思つて居る。當時の自由党内には、政府の壓迫に對する、種々の對抗策は、何時も、企てられてきたのであるが、不思議と、照山の關係した事には、秘密が漏れて、計畫の裏を缺かれるから、誰れにしても、不審に思つて居た。けれども、照山が、その秘密を漏らすのだと、考へたものは、殆んど無かつた。そのうちに、誰いふとなく、照山は、どうも臭い

ぞ」と、いふ事を、言ひ出したものがある、と、忽ちに噂は廣がつて、照山を疑ひはじめた。尤も、一般の黨員には未だ傳はらなかつたのだが、幹部に屬する、重立ちたるもの、間には、照山を警戒するものが、多くなつて來た。

上毛の自由黨員中には、はやくから疑ふものもあつた。長阪八郎の、愛護が深い、といふ所から、長阪に遠慮して、それを、いふものはなかつた。

いかに疑はしい、といふても、適確な證據は、握つて居ないし、長阪ほどの人物が、彼を愛護して居る以上、他のものが輕々しく、彼に對して、探偵呼はりは出來ぬので、各自の胸の裡で、口に出してまで、それをいふものはなかつた。

宮部の手許へは、彼の疑はしい、といふ事を、訴へて來るものが、多くなつて來て、自身も、彼を疑ふやうになつたので、一層、注意は怠らなかつた。

密 偵 殺 し

一

芝の葦手町に、宮部の家があつて、此處には、上毛の同志が、よく集つて来た。

博徒や俠客にして、自由黨へ、心を寄する人、または、宮部を尊敬するものは、すべて此家へ、やつて来る。従つて、宮部の身邊には、其筋の眼が光つて、非常な注意を、拂はれて居た。

明治十七年の四月十三日、鈴木新太郎と、新井愧三郎の兩個が、此家へ、やつて来た。鈴木は、博徒に、身を投じて、宮部との間に聯絡を、取つて居たもので、新井は、純な志士であつた。

宮部は、兩個が、はいつて来る、姿を見るや、すぐに聲をかけた。

『やア、今日、出て来たのか』

兩個は、席につくと、先づ新井から、口を開いた。

『かねて、書面を、出して置いたが、見てくれたらうか』

『うむ、たしかに見た』

『那れに、書いて置いた通り、田代や加藤の意氣込みは、可成り強いから、一應、留めても見たが、早晚、何か行るだらう、と思ふ』

『左様か』

『尤も、田代は、一之宮の丈之助と、深い約束があつて、互に策應して居るやうであるから、若し、事件が起るとすれば、關八州を、衝動する位ゝの事にはならうが、剛壯な意氣と、堅い覺悟は、有つて居ても、何しろ、博徒の事であるから、充分に吾人から、注意を與へてやらない、と、千仞の功を、一簣に缺く、恐れがある。その點については、大に君の考慮を、煩はして置きたいのだ』

『可矣。それは承知したが、あまり無謀な事をせぬやう。君は、始終、傍に居るのだから、一層、警戒を與へて、くれたまへ』

『田代の方は、相當に、考へても居るやうだが、山田は、那アいふ氣分の男で、さアといつたら、直ぐにも始めるから、これは充分に、注意して居ないと、飛んでもない事になるし、殊に、照山の奴が、深くはいり込んで居て、しきりに煽動して居るやうだから、危ない事、限りなしだ』

此時に、鈴木が、膝を進めて、

『實は、その事について、やつて来たのです』

『どういふ事か』

『新井さんが、東京へゆく、といふから、僕も、ついて来たのですが、途中でも、新井さんには、話して置きましたので、お聞き取りを願ひます』

『新井君、どういふ事かね』

『彼奴が、チョイ／＼、いたづらをするので、實は困つて居るのです』

『ふむ』

『それに、どうも臭いですよ』

「少しは證據が出たか」
 「適確な證據は、未だ手に入らぬが、疑はしい事は、しば／＼あるのだ」
 最近にも、山田から田代へ、或秘密の使ひにゆき乍ら 煙の如く、姿をかくしてしまつて、田代の方へは、その事を通じて無く、而も、警察署の方で、はやくも其事を知つて、手配を、されてしまつたから、何事も出来なかつた、といふ事もあるのだ。

「どう考へても、彼奴は、臭いですよ」

「實は、こちらでも、疑つては居るのだが、みだりに、いふ可き事でないから、じつと、其舉動を、見て居るのだが、慥かに變な所はある」

「どこへでも、遠慮なく飛込んで來るので、いつも邪魔になつて、しやうがない。何とかして、彼奴は、除外してしまひ度いが、名案は、無いか知らん」

「さ、それは一寸、むづかしいぞ」

新井は、聲をひそめて、

「いつそ、殺つつけてしまひませうか」

「左様さな……」

新井が、膝を進めて、何か、いひ出さう、とした時、はげしい足音をさせて、二階へ、上つて來るものがあつた。話を、打ち切つて、三人が、階子の上り口を、覗き込む、と同時に、ぬつと、姿を見せたのが、今の今までも、話をして居た、本人の照山であつたから、思はず三人は、顔を見合せて、凄しい笑を漏らした。

自由黨も、宮部が、幹事として、活動した時代が、一番に盛んであつた。會計幹事としては、加藤平四郎が居て、本部の經費の締括りをつけて、居た上に、宮部が、内外の人事に關して、その才能を働かせ、一種の智辯を以て、巧みに人を動かして居たから、地方との折合も善く、どうかすると、はげしく衝突しかける、星と大井の間を、上手に取爲して、ひどい噛合ひもさせず、壯士に對する、態度が、誰よりも良かつたので、頗る人望があつた。

壯士とか、青年とか稱して、肩で風を切る連中も、昨今では、ナカ／＼贅澤になつて、待合に流連もするし、衣服や、生活も、流行を競ひ、一定の収入なきものが、どうして、那の生活が出来るか、と思ふ位で、誰れも皆な、怪んで居るが、その實をいへば、國家や政治が、表面の看板で、昔の彼是師と、同じ事を、やつて居るのだ。

先輩が、後進の爲めに、あまり盡さなくなつたのも、一の原因ではあるが、時代の傾向が、若い人達に、眞面目な志士の精神を、堅く守らせ得ないやうに、漸次と、仕向けて行つたものであらう。

ツンツルテンの、襤褸衣物に安んじ、退潮時に、殘されたやうな、汚ない下駄を穿いて、鮭の頭を、噛り乍ら、天下國家を論じて居た、昔の壯士と、今の青年を比べて見て、あまりの相異に、驚く外はない。

松島事件に、深く喰込んで居た、岩崎勲の所へ、同僚の代議士が、たつた五十圓の、時借を申込んで、刎付けられた事を、聞いて居るが、一人で廿萬圓も、懐裡に入れて、家屋の新築をして居たものが、同僚の急を、救ふ事すら仕ないのだから、その輕薄と無情は、言語道斷である。

彼等は、待合の一夜に、千金を投ずる事は、知つて居ても、友人の爲めには、一文半錢の支出をも、拒むのである。藝妓を、身受する事には、いくらでも出すが、後進の爲めには、十圓の金を吝む、といふのが、今の先輩である。多くの中には、異例のある事は、いふ迄もないが、概して、其んな風であるから、後進のものも、金を見なければ、さうに動かう、としない。まことに情けない時代に、なつてしまつた。

宮部は、東京に、厚德館と、いふものを興した。地方へも、支部を設けて、壯士の爲めに盡した。

厚徳館には、多くの代言人が居て、訴訟事件を、引受ける。その謝金の一半を寄附して、維持費に充てた。厚徳館へ、申込んだ事件は、可成く、手軽に扱つて、謝金も安くしてやつて、そのうちの一半は、館の方へ收め、之れを以て、壯士の養成費や、救済費に使つた。
星亨、大井憲太郎、北田正董、楠木綱二郎、山田泰造、武藤直中、浦田治平、仁杉英、林和一、其他にも、多く居たが、先づ是等の人々が、主たるものであつた。
自由黨本部には、何時でも、二十人位の壯士が、ゴロ／＼して居た。それ等のものは、厚徳館の方から、小使錢を貰つて居たのだ。宮部の取廻しが上手であつたから、不平を抱くものもなく、壯士は、よく宮部のいふことを、聞いて居た。

『それぢやア、これで失敬して、厚徳館へ、行つて来るから、今夜は、泊つてゆくがよい。そのうちに、長阪も、歸つて来るだらう』

『左様ですか、それぢや、泊めて貰ひます』

宮部は、鈴木と新井を残して、階下へ行くと、照山が、坐つて居た。

『やア、先生』

『照山君、どうした』

『どこへ行くのですか』

『厚徳館へ、行つて来る』

『誰れか、居ますか』

『鈴木新太郎と、新井愧三郎が、来て居るから、二階へ行きたまへ』

『はア、左様ですか』

『我輩は、ちよつと、行つて来る』

『遅くなりますか』

『イヤ、ぢきに歸る』

『それぢや、待つて居ます』

『うむ』

宮部が、出てゆくと、照山は、二階へ上つて来た。鈴木と新井は、照山を嫌つて居たので、厭な顔を爲した。

『何時、出て来たのです』

『今日、出て来たのだ』

『新井君、どうです、昨今の状態は……』

『……』

『政府の奴等は、亂暴狼藉を極め、政黨員は、みな腰拔で、役に立たず、此儘に進んで行つたら、亡國の外は、ないのだ、が、君は、どう考へるか』

新井は、照山が、また始めた、と思つて、可成く對手に、ならぬやう、はつきりとした、答へもせず、その辯ずるにまかせて、置くと、照山は、いよく、岡に乗つて。

『僕は、これから、共和政體論を以て、大に同志を糾合しやう、と思つて居るが、今夜は、宮部先生の意見も、聞いて見やう、と思つて、やつて来たのだ』

『……』

『君は、どう思ふかね』

「我輩には賛成できぬ」

「不賛成ですか」

「賛成も、不賛成もない。そんな莫迦らしい事には、觸れるのも厭だ」

「莫迦らしいとは、どういふ譯です」

「莫迦らしいぢやないか、日本が、共和政體に、なり得る國と、君は、思つて居るのか」

「やつて、出来ない事はあるまい」

「君の議論は、何時でも、其れだから不可ない。もつと、冷靜になつて、よく考へて、見るが可い」

「何故です」

「君は、日本の歴史を讀んだか」

「讀んで居る」

「讀んでは居るまい」

「イヤ、讀んで居る」

「それを、讀んで居るものなら、そんな莫迦な事は、いへぬ筈だ」

「莫迦な事とは、怪しからん」

「我輩は、君と、議論する事を、好まないのだ。君のやうな人は、同志を誤り、先輩に迷惑をかけて、それを得意とするものだから、對手には爲ぬ」

之れを聞くと、照山は、怒髪、冠を衝く勢ひで、新井に、喰つてかゝつた。

「君は、僕に、何の含む所があつて、そんな暴言を吐くのか、君の言に従へば、僕は、同志中の異分子で、恰も獅子」

心中の蟲の如く聞取れるが、君は、さう考へて居るのか」

「まあ、左様だね」

「け、け、怪しからん、何を以て、君は、左様思ふのか」

「君の一言一行が、すべて左様としか、思へないのだ」

「敢て、其説明を聞かう。僕にも、覺悟がある」

照山が激して、新井に迫るほど、新井は、冷靜な態度になつて、驚く容子が無い。

秩父暴動の時、田代榮助の參謀として、那れだけの大騒ぎを引起したのも、その一半の力は新井にあつたのだ。

多數の巡査に包圍されて、はげしい斬合を、やつた時も、背後から、首筋の所を斬られて、少しもひるまず、左の手に、頭を抑へて、右に、日本刀を揮つて、且闘ひ、且退き、終に包圍を遁れた、といふほどの人物であるから、照

山の怒號に、驚くやうなものではない。

「是れほどに言はれても、未だ悟れないのなら、改めて、いふて聞かすから、よく聞いて居れ」

「うむ、聞かう」

「君は、今、日本を、共和政體に爲る、運動を始める、といふたな」

「……」

「そんな事を、日本の國民が、口にしても可い、と、考へて居るのか、日本の國體は、萬世一系の皇室を戴き、その下に、無數の國民は、生きて來たのだ。將來も、此國の有らん限り、其れでなければならぬ位の事は、君にも、解つて居るだらう。然るに、君は、共和政體の運動を始めやう、と爲るのだから、それに對して、莫迦呼はりをした

のに、何の不思議があるか。

左なきだに、反對黨や、政府の大官は、我黨を目して、反逆人の集團として居るではないか。それといふのも、畢竟するに、君の如き、輕卒にして、過激な議論を、爲るものがあるからだ。

我國體と、共和政體が、兩立し得ない事は、火を視るよりも明かて、共和政體を唱ふるものは、我國體の破壊を企てるものであるから、これが、眞の逆賊である。

板垣總理始め、我黨の先輩に、そんな人間は、只の一人もない。皇室を中心としたる、立憲政體の確立を、希望して居るものばかりだ。

併し、薩長藩閥の、政治家には、我輩も、反對して居る、實に、反對して居るばかりでなく、彼等に依つて、壓制をうけて居る、我輩等は、飽迄も闘はなければならぬ。或は血を流す迄、ヤツつけるかも知れないが、要するに、國家を愛する、一念からて致方がない、君は、常に、強い事は、いふて居るが、いざとなつたら、一ばん先きに、逃げ出すだらう。凡そ、此世の中に、人前をつくるふ爲に、強い議論を吐くものが、一番の屑だ。

我輩は、君の將來を思つて、これだけの事を、いふて置く」

新井の口調は、極めて穩當であるが、そのいふ所は、筋道が、立つて居て、正義の熱は、籠つて居た。さすがに、照山も黙つて、聞いて居たが、持前の強情から、その儘に、折れて出やうとはしなかつた。

「いざ、といふ時に、先づ逃げ出すだらう、とは、そりや、誰れの事ですか」

「君の事だ」

「失敬な事をいふな、僕は、未だ曾て敵に背後を、見せた事はない」

「敵に、背後を見せなかつたかも知れないが、其態度を、曖昧にした事はあらう」

「黙れツ……」

「ハツハ、……、それは枝葉の争ひだ、要するに、言葉尻の取合に、すぎないが、君は、飽迄も、共和政體を主張するののか」

「無論だ」

「然らば、皇室を、何と爲るつもりか、オイ、それを、判然いへるか」

「……」

「いへまい。いくら君のやうな、無責任な男でも、それは、いへまい」

「……」

「結論のない説は、議論として、一文の價值もないのだから、そんな事は、いはない方が、良いだらう」

今迄、兩個の問答を、黙つて聞いて居た、鈴木は、此時に、啄を容れた。

「もう、大概にしたら何うです。照山君も、よほど弱つたやうだから……」

之れを聞くと、照山は、鈴木の方へ、膝を向け直した。

「誰が弱つたか」

「君が……」

「莫迦吐かすな。僕は、少しも弱りやせんぜ」

「新井さんのいふ事に、答へが出来なければ、弱つたのだらう。弱らないのなら、何とかいふて見なさい」

「……」

「今迄に、新井さんが、いろ／＼いふて居るから、私は、黙つて居たが、全體、君は、良くないのだ」

「何が、良くないのか」

「強い事ばかり、いつて居て、少しも強くないぢやないか。人に頼まれた事だつて、その通りに、果した事はないし

一つとして、男子らしい所は、ありやアしない。政府の犬だつて、もう少し、氣が利いて居るぜ」

「何をツ」

と、いふがはやいか、照山は飛びかゝつて、鈴木の、横ツ面を殴りつけたから、さア、鈴木も、承知しない。

『糞ツ』

と、一喝して、照山に組付いた。

新井には、幾分の敬意を、持つて居たが、鈴木は、自分より以下のものと視て居た。それに、嘲罵を加へられたから、今迄の憤懣が、一時に勃發して、飛びかゝつたのであるが、鈴木も腕力の方では、充分に自信があるほどであるから、決して負けては居ない。すぐ之れに應じて、殴り合ひをはじめた。

兩個が、ドタンバタン、やつて居るのに、新井は、仲裁もしなければ、手出しもせず、ニヤ／＼笑つて視て居る。よほど落ち付いたものだ。

所へ、長阪八郎が、やつて來た。

此有様を見るや、長阪は、先づ聲をかけた。

『君等は、何を爲るのか。同志が、組打ちなどを仕て、見苦しいぢやないか』
長阪の一と聲で、すぐ兩個は、殴り合ひを停めた。

一一一

群馬縣の長阪、神奈川縣の石坂昌孝、埼玉縣の矢部忠右衛門、之れを關東の三長老と稱して、若い人達は、ひどく敬意を、持つて居た。殊に、長阪は、癖のない人で、眞に長者の風があり、立派な人格者であつた。

群馬縣の青年は、いふ迄もなく、相當に勢力を有する、町村の有志家も、長阪の前には、頭が上らず、古い人としては、木呂子退藏が居たけれど、それは、國會請願運動の時代に、縣の代表者として知られたので、自由黨が組織されてからは、長阪の人望に、遠く及ばなかつた。

照山の如きも、長阪の配下で、いくら威張つて見ても、長阪の前へ出たら、グーの音も出なかつた。

新井は、長阪に會釋して、

『とんだ所を見せて、申分けない』

『君が、傍に居ながら、斯んな事を爲せる、といふ法があるかい。何故、はやく抑へなかつたのか』

『照山が、亂暴な議論を爲るので、その對手になつて、居るうちに、鈴木と、殴り合ひをはじめましたから、どちらか負けたら止めるだらう、と思つて、見て居たのです』

『冗談を、いつてはいかん、いづれにしても、同じ黨員で、あり乍ら、組打などをする、といふのは、宜しくない』

鈴木は、モヂ／＼して居たが、

『先生、照山が、餘り生意氣ですから、叩き伏せてやらう、と思つただけで、別に宿意のある譯でもないのですからどうぞ御勘辨下さい』

『照山が、どうした、といふのかね』

其處で新井が代つて、今迄の顛末を、くはしく物語つた。

長阪は、苦々しい顔をして、それを聞いて居たが、照山に向つて、

『新井君の、いふ通りか』

『まア、そんなものです』

『それは、君が宜しくない。平生から、能くいふてある通り、君は少し、言行を慎まぬと、終には禍を引起す、と思ふから、將來は、大に自省したまへ』

更に、鈴木の方へ向直つて、

『假りに、照山が悪い、としても、その對手になるのは、感心出来ない。君も、可成り手の早い方だから、どちらが、先きに打つたのか、我輩には、よく判らないが』

「イヤ、そりやア、照山です」
「まア、待ちたまへ。一つや二つ打たれても、その時は堪らへて、後になつてから叱言をいふたら、却て恐縮するだらう」

「私には、そんな、聖人の眞似は出来ません」

元氣な鈴木は、ブン／＼怒つて居る。

何時の間にか、宮部が、歸つて来て、立つた儘で、之れを聞いて居た。

「やア、宮部君か」

「君の裁判が、餘り面白いので、ツイ立ち聞きを、やつて居たのだ」

「とに角、坐りたまへ」

「照山では、いく度も、手を焼いて居るから、我輩は、口の出しやうがない」

「左様いつてしまつては、照山の立つ瀬がないから、もツと、親切に、話してやるがよい」

不意と立上つた、照山が、黙つて、階下へ行くから、便所へでも行くのだらう、と思つて居たら、格子の開く音がしたので、宮部は、窓の障子を開いて、往來の方を見る、と、照山の後姿が、闇のうちに消えたから、

「彼奴、とう／＼尻尾を巻いて、逃げ出してしまつた。ハツハ、、、」

と、宮部は、高く笑つたが、長阪は、太い息を吐いて、

「どうも、困つたものだ、少し癖はあるが、良いところもあつて、使ひやうに依れば、役には立つのだが、惜しいものだ」

「君は、しきりに彼奴を惜しむが、賜まで、腐つてしまつたのだから、もう、療治は届かぬ。斷念める外はあるまい」

「例の話かね」

長阪は、肩をよせて、

「例の話かね」

「うむ」

「全く左様なのか」

「いよく左様らしい」

「證據が擧つたか」

「最近にも、一之宮の丈之助と、秩父の田代の爲に、大切な使を、たのまれ乍ら、その使命を曖昧にして、非常な手違ひを起させ、而かも、自分は、双方から少なからぬ金を得て、どこかへ姿を消した、といふ事もあるのだ」

「それは、甚だ良くない事だが、併し、スパイといふ事は、未だ判然しないのだらう」

「スパイである、といふ證據は、どうせ判然しませんが、大體に於て、怪しい、となつたら、左様、極めた方が、安全だらう、と思ふ」

「左様かな」

「今、話した一之宮の事も、田代の返事を、丈之助が、聞かないうちに、警察側のものは、よく知つて居た、といふのだから、疑へば、充分に疑へる譯だ」

「成程」

此時 鈴木が、急に膝を進めて、

「實は、その事について、私も、聞込んだ事が、あるのです」

と、これから、照山の怪む可き、行動について、二三の例を擧げ、今では大分、人も知つてゐるらしい、といふ事を、くはしく物語つて、いよく照山は、スパイである、といふ事に、三人で、定めてしまつたから、長阪にも、

之れを辯護してやる餘地がなく、三人の、いふところを信ずる外なかつた。

翌日の午後、宮部は、厚徳館へ、来て居たら、新井と鈴木が、訪ねて来た。

折柄、來客もなく、三人が相談するには、此上なき好都合であつた。

『時に、照山の事は、どうしたものでせう』

と、新井が、先づ切出した。

宮部は、むづかしい顔をして、考へて居ると、鈴木が、聲をひそめて、

『やっつけて、しまひませうか』

『左様だな』

『先生、彼奴は、可成り、我々の秘密を、知つて居ますから、もし大だ、とすれば、これからも、不都合が起りませうぜ』

『……』

『……』

『先生の手を煩はさう、といふのではないのです。我々の方で、こつそり、片付けてしまつたら、よいでせう』

しばらく考へて居た、宮部は新井の方を向いて、

『どうぢや、君の考へは……』

『鈴木君と、同じです』

『君も、左様思ふか』

『どうも、仕方がありません。それに、田代は、初めから、彼奴を信じて居たので、大切な事も、打明けてあるやうです。今、今のうちに、處分してしまはないと、後日に大なる祟りを、爲るでせう』

『可し。やっつけてしまへ』

鈴木は、すぐに答へ、

『承知しました』

それから、二日ほどして、新井と鈴木は、自由黨本部へ、やつて来た。丁度、照山も、来て居て、話は、存外に打解けて、此間、殴り合つた事などは、ケロリと、忘れて居るやうな容子だ。相變らず元氣で、面白い事ばかり、いふて居るから、

『オイ、飛鳥山へ行かう』

と、鈴木が、誘ひを、かけて見た。

『うむ、可からう』

『行くか』

『大に御馳走さへすれば、ハツハ、……』

『そりやア、新井さんが、附いて居るから、大丈夫さ』

『歸りは、根津へ行かう』

『それも、引受ける』

『莫迦に、景氣が、好ささうだな』

『實は、變な行掛りて失敬をしたから、御詫のつもりだ』

『ア、此間の事か』

『左様さ』

「ありやア、僕も、よくなかつたのだ。少しムシヤクシヤして居た事があつて、それで、勝手な熱を吹いたので、新井君に怒られ、それが原因になつたのだから、此方にも、悪い所はあつたのだ」

「君が、左様いつてくれると、いよいよ申譯のない事になる」

「なアに、あんな事は、どこにでもあるさ」

「とに角、出かけやうか」

「うむ」

三人は、揃つて、本部を出た。

飛鳥山の花は、今が盛りで、大層な人出だ。ト野は、もう遅い、といふ頃から、飛鳥山が好くなる。その間を縫ふて、向島といふ、格別なものもあつた。

隅田川の清流が、うねくと、落付いた姿で、流れて行く。それに沿ふて築かれた、十里の長堤、是れは又た格別な、二つとない眺望であつた。

昨今は、向島の花なぞ、とても眺められるものでない。ぐづくして居れば、自動車に引倒されるか、荷車に突當るかして、生命の惜しくないものが、向島へ行くのである。されば、名物の櫻餅も、殆んどすたれてしまつた。新しいものではあるが、言問團子の生命も、ポートルースのお蔭で、僅に保つて居る位のものだ。

遠い昔は知らず、著者が、未だ書生時代の向島には、野趣満々、何ともいへぬ、のんびりした所があつて、雑沓する花見時にも、此處だけは、他の土地に見られぬ。一種の風韻があつた。

御殿山の櫻は、錦繪に、見る丈けのもので、今は、後形もなくなつてしまつたが、飛鳥山だけは、昔の通り、今でも、幅を利かして居る。

明治十七年頃も、昨今と同じやうに、ナカ／＼の人出であつた。殊には、今のやうに、汽車の煤烟もなく、高臺から、見下ろした、一面の田園、遠く筑波の翠岳を、望む所は、千金の價値があつた。

東京の中央から、往復を徒歩しても、健脚の人なら、さまでに苦痛はなく、丁度、一日の遊樂には、持つて來いの場所であつた。

晝の雑沓に引返へて、夜は、存外に静かであるが、月明の時は、相應に人出もあつて、掛茶屋も、夜櫻の客を迎ふべく、それ／＼に用意して、赤毛布の縁臺は、樹の間／＼に、拵へられてある。

何處で飲んだか、照山の足元は、可成り危く、ふらくして居るが、新井と鈴木は、それを庇ふやうにして、崖に近い、縁臺を見付けて、腰を下ろした。

「オイ、新井君、實に今日は、愉快であつた。鈴木君も、此間の事を忘れて、隔意なく、やつてくれたので、僕ア、こんな愉快な事はない」

「君に、左様いはれる、と、却て恐縮する。お互に疝癢は、強い方だから、どうか爲ると、那んな事になるのだ。實に失敬した」

「ハツハ、、、い、いやに、丁寧だな」

「だつて、人間の禮儀だから、悪い事は悪い、として、一應は詫るさ」

「そんな事は、どうでもいゝとして、根津行きは、どうだね」

「日が暮れて、未だ間もないから、もう少し遊んでゆかう」

「同じ飲むなら、向ふへ行つてからの方が、いゝな」

「さう、急ぐ事もなからう」

『それぢや、大に飲むか、ハツハ、』
 赤前垂れの小女が、持つて来た、煮込みの芋や蒟蒻を、酒の肴に、これから飲みはじめた。斯うして、飲み合つて居る間は、無邪氣な男で、とても憎む心は起きないが、何しろ、同志を裏切る、スパイといふ事が、判つた以上、もう容赦はならぬから、一と思ひに、ヤツつけて、しまはうの考で、誘ひ出しては見たが、何分にも、人目が多くてどうする事も出来ぬから、此處で、時間を送り、根津の廊へ、ゆく途中、隙を狙つて、手を下ろす事にして、照山の機嫌を、取つて居たのだが、そのうちに、彼是れ八時頃に、なつたから、
 『さア、行かう』
 といつて、三人は、ひとしく歩き出した。
 途中には、寂しい所もあつて、いく度か、鈴木は、懷裡の兇器に、手をかけたけれど、生憎に、人影が見えて、機會を逸し、終には根津の廊まで、無事に送り込んでしまつた。

四

當時の照山は、官吏侮辱の、缺席裁判をうけて居たので、本来なれば、隠れて居る可き筈であつたが、どういふ事情か、更に左様した、様子も無く、白晝横行、過激な議論を吐いて、威張つて居たのが、甚だ不思議である。自由黨員でさへあれば、いかなる微罪でも、容赦なくやつつける、といつた態度で、ずるぶん峻厳な、取扱ひをして居たにも拘り、獨り、照山に對して、頗る寛大であつたのは、實に怪む可き事であつた。
 尤も、缺席裁判を、うけたもので、照山の外にも、うまく通れて、刑の執行を、うけなかつたものも、多少はあつたが、照山の如く、大手を振つて、歩いたものは稀である。
 併し、照山も、時には『僕も、日蔭者だから、働き難い』とは、いふて居たのだから、いくぶんの懸念は、仕て居

たのであらう。

宮部の身邊には、絶えず、密偵の眼は、光つて居たのだが、それが追々にはげしくなつて、来て、今では公然、その行動を、監視するやうに、なつて来た。
 凡そ、密偵に、附け廻されるほど、うるさい事は、多くあるまい。いかなる人でも、之れを爲れると、ます／＼神經が昂ぶつて、猶ほ反抗する氣になるものである。
 商賣柄で、止むを得ぬ事ではあらうが、人の秘密を知らう、として、附け廻すのであるから、厭がられるのは當然である。其處で、附け廻すものと、附け廻されるものとの間に、一種の抵抗も、起つて来れば、暗闘も、はじまる譯だ。
 宮部には、種々の秘密があつて、密偵の狙ひ所は、その秘密を、突き留めやう、とするのであつたから、針のやうに鋭く、密偵の爲る事が、宮部の神經に、觸れて来る。
 とても、知れる譯のない、と思ふ事迄が、知れて居るやうに思はれるので、いろ／＼に、考へて視ると、同志のうち、變な奴が居て、その口から漏れるのではないか、と思はれるので、彼れか、是れかと、突留めた末は、照山が、一番に疑はしい、といふ事になつて、それからそれと、今迄の事情を、手繰つてゆくほど、疑ひの雲は、濃くなるばかりであつた。

『先生、御在宅ですか』
 と、いつて、訪ねて来たのは、村上泰治と、いふ人であつた。
 秩父郡の下日野澤と、いふ所に、可成りの土地を所有して、何一つ不自由なく、暮して居た、豪家の粹で、今は兩

親もなく、既に妻を迎へて、立流な家長にはなつて、居たが、齡は、漸く二十歳に、なつたばかりであつた。平生は、深窓に人と成つた、處女の如く、おきに顔を赤くして、羞恥み勝ちに、見える質であつたが、そのくせ、膽玉の太い、眞に男らしい、心を有つて居たので、同志の間には、ナカ／＼尊敬されて、秩父の村士といへば、氣を負うて立つ、壯士のうちにも、心服して居たものもあつた位である。宮部を、信ずること厚く、恰も慈父のやうにして、よく其命に従つて、自由黨の爲めには、少なからぬ犠牲も拂ひ、厚德館の維持にも、相當の負擔を、仕て居たのである。

『しばらくで、あつたな』

『御存じの通りの山住ひで、出入に不便な爲め、思ひ乍ら、御無沙汰をいたしました』

『君のやうな人は、どこに居ても、同じ事だ。精神さへ堅固なれば、敢て都會なぞへ、出て來ないでも、決して差支へないのだ』

『左様ばかりは、いへません。どうしても、遅れますから……』

『都會で研く、智慧は、狡くばかりなつて、不可よ。却て、山村の間に、キレイな空氣を、吸ひ乍ら、しづかに考へて居るものには、末頼母しい人物が多い』

『併し、左様いふ人物は、あまり多く居りますまい』

『數は、少なくともよい、少ない人物が、多くのものを率ゐて行くので、天下の大事は成るのだから、君も、大に自重して、その少ないうちの人物に、なつてくれたまへ。』

『どういたしまして、わたくしなぞは、矢張り山の中で、百姓や獵でもして居るのが、丁度、宜しいのです。只だ、國家の爲めに、何とかして盡したいものだ、と思つて居るだけありますから、此上とも、御指導を願ひ度いので』

す』

『指導などと、いふ事は出來ぬが、まア、年長丈けに、いゝぶんは、世故にも、馴れて居るし、多少は、政治の事にも、通じて居るから、何かの時は、相談相手に、なれるつもりだ』

『何分、お願ひいたします』

『今度は、何か、用事でもあつて來たのか、それとも、遊びに來たのか』

『まア、遊びに來たやうなものです』

『左様か。それぢや、外へ行かずに、此家へ、泊つて行くが、よい』

『もう、宿屋へ行つて、出直して來たのですから、とに角、今晚は、宿屋へ歸りませう』

それから、落ちついて話をはじめた。宮部といふ人は、曾て、演壇に立つた事はなく、公衆の前に、演説するのは頗る不得意であつたが、對坐しての談論は、實に巧みであつた。殊に、漢籍仕込みの人で、例に引くものは、多く支那の人物であるが、それが、日本には最も、適當して居るのであつた。

西洋の事情を説いたり、西洋人の名をいはぬと、物識でないやうに思はれるのは、昨今の事であつて、見聞は、廣いほど可いし、西洋人の例も、悪くはないが、國情と民族性の相異は、何としても争ひ難く、參考の一話としては、聞くに足る事でも、さて其儘に、日本人へ移し植ゑやうとすれば、そこに、少なからぬ、矛盾が起り、とんでもない、破綻が生じて來る。

ムツソリーニは偉い人である。けれども、その通りの事が、果して、日本で行ひ得るか。レーニンも世界的の人物であつた。けれども、レーニンズムを、直に日本へ、引込む事が出來やうか。少し考へて視れば、すぐ判る問題である。

左様した、面倒な點から、考へて視ずとも、今の日本の、衣食住の状態て、いかに西洋の眞似をしやう、としてもしつくり日本へ、當嵌める事は、至難しいのである。
洋服を着ても、家に居れば、今迄の通り、坐つて居る外ない。靴を穿いても、家に歸れば、どうしても脱ぐのである。西洋式の家を、建てる人は、あつても靴の儘ま、座敷へは、通し得まい。英語は使つても、その後から、日本語で、譯をつける人がある。同じ事を、二度づつ、いふて居るのだ。
洋服と、和服と、衣類は、二た通り要るし、靴と、下駄と、雪駄と、高齒と、履物は、四通りなければ、自由が足りぬ。自分丈は、一切を洋式にしても、世間へ出れば、昔ながらの日本式であるから、誰れにしても困つてしまふ。

それほどに、生活の状態が、異つて居るから、現在の所は、どうしても、複雑な事を、やる外はなく、従つて、平生の生活から起る人の、情合の、いふものが、どうしても、舶來の説とは、折合のつかぬ事になる。
昔の日本人は、今の日本人に比べて、何となく底力があつて、新しい學説に囚はれて、自分を没却してしまふやうな、弱いものでなかつた事だけは、實に偉かつた、と思ふ。

「理學や化學は、どこまでも新らしいものに、従いてゆく外はないが、國家とか、政治とか、いふ事迄、それと同じやうに、鵜呑にする必要はない。」

昨今の日本人は、その點になると、ヒヨロ／＼で、腰が弱い。何でも、新しい學説を聞くと、すぐ囚はれてしまつて、自分といふものを、忘れるばかりでなく、大切な國家までも、その通りに引直さう、とする、輕率な輩が多い。クロポトキン、オイケン、ベルグソン、マルクス、タゴール等、それからそれへと、移つてゆくが、すべて囚はれるばかりで、自己の説と、いふものは無く、恰も渡り鳥の如く、また、走馬燈の如く、東から西へ、西から南へと、限

りなく、移つてゆくだけの事である。

而して、その移りゆく道を、上手に辿るものが、一代の學者として、人氣を博すのであるから、只だ驚く外はない。話が、横道へ外れて、甚だ恐縮するが、斯うした事をいふて、見たくなるほどの、今の世相であるから、一と通りは、言はせて欲しいのである。

いづれにしても、漢籍を、輕んずる事が、日本人の爲めに、甚だ良くない事である。昔の儘にしる、といふやうな野暮な事は言はぬが、日本人の言語が、今の状態である限り、また、日本人の書く、文章が、是迄の文字から、あの限りは、どうしても、漢籍は、捨て難いものである、と、確く信ずる。

況して、漢字制限など、といふやうな、下徹底な事を仕て、日を送る奴の愚は、あらためて、いふ迄もない。逡巡を『しゆん巡』と書き、惹起を『じやく起』と書いて假名と漢字を、半分づつ使つて、今迄の熟字に、宛嵌めて居るのは、どういふ了見からか、少しも解らない。『しゆん巡』を見て、その意味を解するには、やはり逡巡の字を、知つて居なければならぬ。逡巡の字を知つて居る者には、『しゆん巡』と書いて貰ふ必要がある。逡巡が讀めない者なら、『しゆん巡』と書いてあつても、その意味は判るまい。

元來、日本人には、日本人としての本領もあれば、特殊の性格も、あるのであるから、それに沿うてゆくのが、當然である。従つて、漢籍は、一と通り教へる事にして、その上、西洋の學問も爲せる、としたら、それで、良い譯だ。横文字から、仕上げた人と、漢籍から叩き込んだ人と、それを比べて視たら、すぐ判る筈である。今のヒヨロ／＼した奴は、多く横文字専門の連中であつて、漢籍から叩き込んだものは、どことなく、底力が有つて、いよ／＼と、いふ時に、しつかりして居るのは、争ひ難き事實である。

「時に、先生」

「うむ」

「照山さんは、近頃、見えますか」

「ちよいと来るが、君も、彼に逢ふかな」

「わたくしは、しばらく逢ひませんが、彼の人は、どうも變だ、と思ひますので、それも参考に、お聞きして置き度いのです」

「どういふ事が、變であるか」

「少し怪しいのでは、ありませんか」

「宮部は、之れを聞いて、少し考へて居たが、

「實は、頗る怪しいのだ」

「矢ッ張り、左様でしたか」

「君は、どうして、左様いふ事を、訊くのかね」

「田代さんも、左様思つて居るらしいのです」

「えッ、田代が……」

「エー」

「何か、田代に對して、不都合な事でも爲たのか」

「別に、それと思ふほどの事はないが、どうも、照山は、少し怪しい、といつて居りました」

「ふふーム、田代までが、左様思ふやうに、なつたのか」

「どういふ、理由だらう」

「わたくしも、深い事は知りませんが、上州の山田さんとの間に、何か秘密の申合せがあつて、その使ひを、頼まれたのにも不拘、山田さんへは、通ぜずに置いて、東京へ、出てしまつたが、何時か、其秘密は、警察の方へ、知れて居たのださうです」

「ふふーむ」

「その外にも、金銭上に就て、何か不都合があつた、といふ事も、聞いて居ります」

「左様か」

「人物も、しつかりして居て、那れ丈けに、人にも知られて居るのに、借いものです」

「君等に對しては、何も、不都合はなかつたのか」

「是れといふて、不都合な事は、ありませんが、同志のうちに、那アいふ人が居るのは、何となく危険で困ります」

「それは、無理もない」

「殊に、多少の秘密は、知られて居るのですから……」

村上の平生を、よく知つて居る丈けに、宮部は、村上の言ふ事を、深く信じもするし、一段の共鳴も、する譯で、照山の爲めに、何か秘密を、握られて居る、と思つたのである。

「我輩も、彼れの爲めには、可成り辯護もして、やつたのだが、今は、見放す外はない、と思つて居るのだ」

「先生も、愛想を、つかしましたか」

「うむ、もう、辯護をしてやる餘地はない」

「どうしたら、可いでせう」

『左様だな、突放してしまふ外は、あるまい』

『併し、握られて居る、秘密を漏される、恐が有ませう』

『その點は、ずるぶん困る』

『わたくし等の苦むのも、その一事であります、只だ突放してしまつたら、きつと、秘密を漏しますぞ』

『うむ』

じつと、考へ込む、宮部の顔を見ながら、村上も、黙つて居た。

『オイ、村上ッ』

『ハイ』

『君の才覺で、何とかしてくれぬか』

『……』

『同志の爲めに、君の一と奮發を望む』

『……』

『君には、その位の事を、何でもなくやつて、退ける、配下の居る事は、よく知つて居るが、要するに、君の覺悟一

つちや』

『宜しい、承知いたしました』

『引受けてくれるか』

『ハイ』

『そりア、有難い』

『よほど注意して、うまくやらぬと、いかんが、君は、よく物事を、考へる方だから、我輩は、安心して居るが、此事は、一層の注意を拂つたくれぬと、失敗したら、一大事ぢやから……』

『大丈夫です』

齡は若いけれども、非常に落付きがあり、大して教育を、受けて居ないが、よく事理を解し、只視れば、女のやうに物静かではあつたが、燃ゆるやうな情熱を、有つて居た。資産も豊かて、コセくした風はなく、立流な人物で、志士の風格に、富んで居た。

斯うした、爲人の村上が、しつかり引受けたのであるから、宮部も、頗る安心した。村上は、一泊する事にして、猶ほ話込んで居る所へ、長阪が、歸つて来て、それから一しきりは、また、話に身が入つた。けれども、長阪には、兩個の相談した事は、未だ打明けなかつた。

若し、此時に、打明け話を仕たら、長阪は、きつと、反對したに違ひない。長阪と宮部には、斯うした場合になると、大部に異つた所があつた。

長阪は、どこ迄も、長者の風があつて、いかなる場合にも、極端な手段に、出るやうな事がなく、しつとりと、構へて居るので、黨内にも、重きをなして居た。宮部の如く、機略縦横の才はなく、また、談論の雄ではなかつた。

その風格に依つて、黨員の重望を繫いで居たのが、長阪であり、機略と才辯に因つて、壯士の間に、聲望の有つたのが、宮部である。此兩個が、同じ高崎から出て、關東の自由黨に、臨んで居た事は、當時の偉彩であつた。

翌日の朝、村上は、郷里の下日野澤へ歸つた。

それから、照山に對する、或計畫を、進める事になつた。先づ同志のうちから、岩井丑五郎と、南關三の兩個を、

こつそり招いて、此相談に及んだ。

岩井は、純な博徒ではないが、それに近い人であつた。南は、平生から、村上の保護を、うけて居たものである。どちらも、多少の膽氣があつて、村上の言ふ事には、よく服従して居た。

『それでは、照山を引出して、とに角、當家まで、連れて来る事にしませう』
と、南は、聲をひそめ乍ら、村上に答へた。

『ぜひ、さういふ、都合にして貰ひ度いが、よほど巧くやらないと、照山は、容易に、此處までは來まいから、その邊の事は、よく考へて、やつて下さい』

『なアに、彼奴も、頃日では、缺席裁判の事で、心配して居るやうですから、そのほとぼりを、さます爲めに、しばらく匿れて居る、といつたら、おきに乘つて來るでせう』

『併し、ナカ／＼の、しツかり者だから、充分に考へてかゝらぬと、失敗しますよ』
『大丈夫です。岩井さんに頼んで、萬事は、巧くやつて貰ひませう』

と、いつて、岩井の方に、南が、向直つた時、岩井は、軽く首肯した。

『いよ／＼の時は、ワツしが、引受けます。あんな奴の一疋位、何でもありやせん』
村上は、幾分の不返もあつて、

『さう、軽く視ると、失敗しますよ、照山も、相當に腕力がありますから……』

『なアに、大丈夫です。いくら強い、といつた所で、要が、壯士の一人位、料理するのは、大した事でも、ありやせん』
『どういふ風に、やるつもりですか』

『とに角、南さんの骨折で、此處まで、引入れて置いて、それから、何とか口實を設け、杉の峠へ、誘ひ出して、すツぱり、やつてしまつたら、それ迄の事です』

『なる程、それは可いてせう、杉の峠は、よい思ひ付きます』

『彼處は、信州へゆく、抜け道で、ふだんは、人通りの少ない所ですから、うまい場所を、見付けて置いて、後くされの、ないやうに、片付けてしまひますから、安心して下さい』

『萬事は、お任せいたします』

『承知しました』

却説、東京の本部では、宮部が、照山を、別室に招いて、説得の最中である。

『君の事が、面倒になりさうだ。昨日も、刑事が、二三度、來たやうであるし、例の缺席裁判の一條ちやあるまいかと思つて、我輩が、うまく應對して、刑事は追返したけれど、とに角、一時は、身を匿した方が、よいと思ふが、君の考は、どうか』

『要が、一ヶ月か、二ヶ月の苦役ですから、はやく勤めて來た方が、僕の爲めには、良いかも知れないが、今、行く事は考へものだ、と思つて、斯ういふ風に、避けて居るのですが、さう注意されるやうになつては、匿れるのが得策でせう』

『我輩も、その方がよい、と思つて居るのだ』

『併し、どこへ行かう、といふ的もないのですから、二三日、考へて見ませう』
宮部は、少し考へるやうにして、
『オイ、村上の家は、どうだ』

「村上ツて、いふと」

「秩父の村上だ」

「うむ、なる程」

「村上の家は、人里を離れて、寂かな山の中で、土地のものゝ外には、那アした所に、用事のあるものもなく、殊に村上は、若年者ではあるが君も、知つて居る通り、膽力のある男で、然諾を、重んずる風もあるから、君の匿れ場所としては、此上もない所だ」

「御尤もです」

「左様するか」

「左様ませう」

「それぢや、少しばかり都合してやるから、今晚にでも、我輩の家まで、来てくれ」

「はッ、先生には、いつも御厄介をかけてすみません」

「大した事は出来ないが。旅費と小使錢の少しばかりぢや」

「僕の事について、いろいろの悪聲を放つ奴もありますが、先生のやうに、親切にして下さる、と、恐縮します」

「なアに、御互の事ぢや」

照山が、存外に神妙なので、宮部も、少し可哀想だ、とは思つたが、今更に計畫を、中止する事も出来ず、殊にはスパイを、やつて居る事が、可成り、判然して來たので、いッそ、處分してしまふ方が、同志の爲めでもある、と考へて、心を鬼に取直し、翌朝は、照山の來るを待うけた。

「先生、やつて來ました」

「やア、早かつたな」

「一番汽車に乗らう、と思ひまして……………」

「これからで、間に合ふか」

「いそげば、間に合ひます」

「左様か」

懐中から、金包を取出して、宮部は、照山に渡した。

「十五圓あるから……」

「先生、こんなに戴いては、すみません」

「もう少し、と思つたが、これ丈けしか、都合が出来なかつた」

「十五圓あれば、大盡です。ハッハ、ハ、ハ」

無邪氣に哄笑した、照山の顔を見て、宮部は、思はず、眼を外らした。

「それぢや、先生、行きます」

「うむ」

「村上の家へ行つたら、書面を出します」

「それは不可、匿れて居る間は、どこへも通信しては悪い」

「左様ですか」

「村上に、宜敷いふてくれ」

「ハッ」

照山は、宮部の家を出た。
明治十七年の四月十七日、上野の桜花は、もう散つて居たが、飛鳥山や小金井は、今が盛りで、人出のはげしい時であつた。

六

埼玉縣の本庄町から、秩父の大宮へ行くには、乗合馬車があつて、是れが、唯一の、交通機關になつて居た。
汽車や電車、それから自動車、追々に廣まつて来るから、今に、乗合馬車などは、無くなる時代も来るであらうが、果して、幾年の後に、左様した時が来るか、とても、二十年や三十年、では至難しいと思ふ。
大きい都會から、小さい町へ行くには、それ／＼に、電車も通じやうが、小さい町から、偏鄙な町村への交通は、昔ながら、乗合馬車で、往來の不便を、補ふ外はあるまい。
今でも、東北線の、稍や大きい、と思はれる、驛の前には、汽車の發着毎に、喇叭の音が聞えて、薄汚い馬車の駛るのを、よく見る事がある。

肉が落ちて、背骨のみが、高く現はれて居る馬、屋根の四方から、ズツクが垂れが下つて、馭車臺には、嚴めしい顔付をした馭者先生が、鞭を持つて控へ、後方の履臺には、年の若い馬丁が、怪しげな古洋服を着て、車の動搖に堪へ乍ら、立つて御座る。

客席は、狭い腰掛けが、向き合ひになつて居て、八人又は十人位と、詰めるやうになつて居るが、膝と膝は、びつたり押合つて、窮屈な事は、此上もないが、動搖のげし馬車には、斯うして、詰め込まれる方が、體の揺れが少なく、却て好都合だ、といふ。道路の凸凹のひどい所で、頭と頭を、ゴツンと、やる事などは、通例の事であつて、動搖の度毎に、膝と膝が、かち合つて、互ひに刺さむやうになる。對手が、美しい女の事もあり、土臭い婆あさんの事もある。

誰れかの小説に、懷裡から、手を入れて、隣りの女の乳を、搜つて居たら、いつか知らず、女も、手を出したので、ぐツと握りしめた儘で、いよく馬車が停まると、その手は、男の手であつた。といふやうな事を、巧みに書流してあるのを、讀んだ記憶がある。

地方の乗合馬車には、どうかすると、斯うした話の種子を残して、都會の生活に、終始して居るものには、一寸味ひ得ぬ、面白味のあるものだ。

今では、電車が、通じて居る、と聞いたが、昔は、兒玉郡の本庄町から、秩父郡の大宮へ行くには、どうしても乗合馬車の外に、交通機關らしいものはなく、それも限りある、馬車の事として、何時も混雑するほど、乗合客は、多く在つたものだ。

下日野澤の、重木へ出るには、本庄から乗つて、太駄村といふ所で降りてから、峻しい道を、歩く外に、何として方法のない、といふほど、交通不便な、山の中の村落であつた。

重木から、杉の峠を越えて、山から山へ抜ける、昔からの間道があつて、越後の方へ行く、近道になつて居たが、此邊の人が、多く利用する道で、外の方面の人には、必要の道ではなく、それを知らぬものゝ方が、多い位であつた。

村上の家は、山と山の間に在つて、特別に用事でもなければ、人の氣付かぬほど、偏鄙な所に在つた。軒並びに、家の在るやうな、一般の村落とは違ひ、隣家へゆくにも、可成りの隔りがあつて、實に閑寂な、山住であつた。

併し、父の代から、資産は豊かであり、贅澤を仕度いにも、斯うした、山中の生活では、大した事は出来ぬ。自由黨の爲めに、幾何かの密附を爲るとか、友人の困つて居るものを、救うてやとるか、いふ位ゐる事で、自分としては

東京へでも出かけて、先輩や、同志を訪ねるのが、唯一の楽しみに、なつて居たので、その間は、宿屋に、泊つて居るから、餘計な金も使ふが、そんな事で、財産に、龜裂の入るやうな、心細い身代では、なかつた。
齡の若い割合に、極めて落付きもあり、膽玉も太く、深い造詣は無かつたが、讀書にも、趣味は、有つて居た。

東京の花期は、もう過ぎてしまつたが、此邊は、例の山櫻が、今を盛りと、咲亂れて居る。
長い歳月を、育つが儘に、杉や松の、生ひしげつて居る間を、所々に、山櫻の咲いて居る状態は、何ともいへぬ眺めである。

斯ういふ所に、一切の俗塵から遠ざかつて、氣樂に、日を送る人の心は、無そのんびりとして、娛しい事であらう。
若し、材上が、山の中の一軒家に、物持ちの坊ちゃん、として、世間から、かけ離れた生活を、獨り樂む、といつた心の人であるなら、思ふに、其生涯は、まことに安らかなもので、あつたらうが、持つて生れた、氣風は、それを許さず、はやくから、自由黨へ飛込んで、天下國家を、論ずるやうになり、多くの先輩からも、その氣風を見抜かれて、殊の外に、尊重される所から、知らず識らず深入りして、探偵殺しの大事まで、引受けるやうになつたのは、不思議の運命と、いふ可きである。

『旦那、お宅ですか』

と、いつて、のそりと、はいつて來たのは、岩井丑五郎であつた。

材上の妻、お半は、岩井の姿を見て、

『オヤ、岩井さん』

と、聲をかけ乍ら、岩井を迎へた。

『どうも、御無沙汰しました』

『そりや、お互の事ですよ、斯んな邊鄙な所に居りますから、おいて下さるにも、ナカ／＼大變ですから……』

『お宅ですか』

『エー、今ま、一寸出ましたが、もう歸る時分ですから、まア、此方へ上つて下さい』

『關三さんは……』

『居りますよ』

『左様ですか』

『岩井さんが、見えるだらうツて、いつて居りましたが、何か御約束でも、あつたのですか』

『イエ、何、これといつて、約束もないのですが、久振りて、話に行かう、といつて、おいたので、それで、關三さんが、待つて居てくれたのでせう』

『今、裏山へ、行つて居ますが、もう歸る時分ですから、こちらへ上つて、ゆツくりなさい』

『難有う』

東京で、約束した事は、村上と南の兩個丈けて、お半には、未だ何もいふて、なかつた。國事探偵を、殺す、といふやうな、大事を、女に打明けるのは、固より慎む可きではあるが、お半に對しては、その遠慮は、要らなかつたのである。

世に謂ふ、男優りの女とは、お半の如き人を、いふのであらう。村上の妻としては、極めて柔順であつたが、女に似合はぬ、大膽な所があり、強者には、何處までも對抗してゆく、といふ氣概も、有つて居て、村上を、知る人は誰れも皆な、お半の男優りには、感服してゐたのである。

岩井は、平生から、村上の保護を、受けて居たし、いくたびか、訪ねて来ては、泊つた事もあるので、お半の気分は、よく知つて居たが、村上も、南も、居らぬ所で、わざわざ訪ねて来た、用件を、打明けたいのは、無論である。裏山へ行つた、といふ、南の歸りが遅く、近い所へ行つた、といふ、村上の歸りも遅いので、岩井は、どうしてもお半を對手に、語り合ふ外はなかつた。

『ネー、岩井さん』

『へー』

『照山さんは、此頃、どうして居ますか、御存知ですか』

『さ、どうして居ますか、少しも知りません』

『今日か、明日は、こちらへ見える、といふぢやありませんか』

『ははア、さうですか』

『あなたは、御存じないのですか』

『少しも知りません』

『そりや、變てすね』

『……』

お半から、照山の事を話出されたので、岩井は、頗る苦んだ。

村上や南から、どの程度まで話してあるか、うつかりした、事はいへず、さればとて餘りに曖昧な事も、いへぬのは、下手な答を仕て、お半の氣を悪く爲ると、大事の場合に、どんな妨げが、起るかも知れぬ。それにしても、村上

や南から、かねての計畫を、自分に無断で、お半へ、打明ける筈はないとも、思つて居るが、照山の事を、突然、い

ひ出すには、お半が、いくらか事情を、知つて居ての事では、ないかとも考へられて、さすがの岩井も、急所にふれ

た答は、可成く、ぼかして居る。

『わたしは、この頃、斯んな書物を、読んで居ますが……』

と、いつて、お半は、一冊の書物を、岩井の前へ置いた。

『へー、こりやア、何が書いてあるのです』

『西洋の物を、翻譯したものださうですが、ナカ／＼面白いものですよ』

『ははア……』

岩井は、どちらか、といへば、書物に親しむ方の質でなく、文字にも、迂い所から、普通の小説本や、武勇傳の如

きものにこそ、多少の嗜好はあつても、西洋物の翻譯小説など平生から、手にした事もなく、従つて、お半が、今ま

突付けるやうにして、膝の前へ置いた、書物を、チラリと、見た丈けて、手に取つて見る氣にもなれなかつた。

『これは、地底の秘密と、いふのですが、本統に、面白い小説です』

『どういふ事が、書いてあるのですか』

『ロシアといふ國の、虚無黨とかいふ、恐ろしい黨派の事ですが、實際に在つた事を、小説風に書いてあるので、讀

んで居ても、ハラ／＼する位です』

『へへー、虚無黨といふのは、何でも、人ばかり殺して居るツて事だが、西洋には、恐ろしい黨派がありますな』

『人を殺す、といふのは、良くない事ではありますが、此小説では、ロシアの政府が、悪い政治を布いて、人民を壓

制するから、それで、虚無黨の人達が、暗殺の組合をつくつて、悪い役人を、片ツ端から、殺してしまふのだ、と、

いふやうに、書いてありますが、初めのうちは、只だ恐ろしい黨派だ、とばかり、思つて居ましたが、だん／＼讀

んで居ると、虚無黨の方にも、無理はない、と思ふやうになりました』

『日本でも、徳川様が、潰れる時分には、よく人が殺されたもので、どこの國にも、同じやうな事はあるもんです

「内務大臣だとか、警視總監だとか、大い役人が、バク／＼殺されてしまふのですから、読んで居ても、體が熱くなり
りますよ」

「そんなに、大い事が書いてあるのを、政府が、よく出版させて居ますな」

「だつて、小説ですもの……」

「ナールほど、小説ぢやア、仕やうがねえ」

「そのくせ、本統に、在つた事なんてすから、面白いちやありませんか」

「皆んな、在つた事ですか」

「そりや、左様ですとも……」

「本統に在つた事を、小説のやうにして、あるんすな」

「左様です」

「その中で、一番に、物凄いの所を、ちよつと、聞かしておくんなせえ」

「物凄いつていふのは、どんな事か判らないが、女の身で、警視總監に、ピストルを撃つた事が、書いてあります
よ」

「大い女が、居りますな」

「ウエラ、サンユリツチといふ、二十二の女で、大層美しかつたやうに、書いてあります」

「ふーむ。その事件は、どうになりましたね」

「狙ひが外れて、いけなかつた、さうです」

「そいつア、残念だつたらう」

「それから先きは、未だ読んで居ませんが、そんな事ばかり、書いてあるので、ハラ／＼しますよ」

「何といふ人が、譯して居るのですか」

「お前さんも、知つて居るでせう。それ、宮崎夢柳先生でさアね」

「えッ、那の先生が、へへー」

「探偵殺しの所なぞは、うまく書いてありますよ」

「えッ、探偵殺しですつて……」

「はア」

「ふふーむ」

お半は、膝を進めて、何か話出さう、とした所へ、裏山から、歸つて來たのが、南關三、一と足違ひで、表門を、
はいつて來たのは、主人の村上泰治であつた。

七

其頃の自由新聞には、櫻田百衛といふ人が、フランスの革命を、小説風の筆に托して、書いた居た。アレキサンダ
ー・ジューマの原書から抜出して、馬琴流の七五調で、上手に、書き流して居たが、非常な名文章であつた。

バルサモーといふ、志士が、政府に囚はれて、パスチールの獄に、はいつて居るのを、革命黨の連中が、監獄へ押
寄せて、血を流し、屍を積んで、終にバルサモー始め、憂國の志士を救出す、といふ、一段の如きは、壯烈を極めた
場面を、遺憾なく、現はし得て、實に巧いものであつた。

之に對して、自由の燈といふ、繪入新聞が在つて、共に自由黨の機關紙ではあつたが、自由新聞の方は、株式組
織に、なつて居て、社長は、板垣退助であつた。燈の方は、星亨が獨力で、發行したもので、一時は、非常な賣行で

あつたが、一は、黨員中の、智識階級に屬する、人の讀むに適するやうに、なつて居り、一は、一般の人に讀ませて自然のうちに、黨の味方たらしめるやう、極めて通俗的のものであつた。

自由新聞に、櫻田百衛の居た如く、燈の方には、宮崎夢柳が居て、櫻田とは、全く異つた、行き方の筆致で、虚無黨の活動を、面白く書いてあつた。

お半が、岩井に示した『地底の秘密』が、則ち其一冊であつた。別に『鬼啾々』と題して、後に出版されたものは多く世に傳つて居る筈だ。

櫻田の死後に、自由週報といふ題名で、櫻田の残した部分を、補修的に書いたものが、出版された。それも、宮崎の筆になつたものである。

斯うした書物が、當時の黨員には、ひどく愛讀された。實に、男子の黨員ばかりでなく、婦人にまで、愛讀されたのであるから、甚だ妙である。

それであるから、當時の自由黨は、深く家庭にまで、その勢力は侵入して、婦人に、存外の熱心家があつた。豊橋には、村雨栄山子の妻、信子といふのがあり、評判の女丈夫であつた。其近くの田原には、村松愛蔵の妻が居た。濱松へ行けば、山田八十太郎、中野二郎三郎の妻女が、共に評判の烈女であつた。其他新井章吾の妻の如き、いづれも、男優りの女性で、到る處、左様した、婦人の活動は、どれほど、自由黨の力を、強めたか判らない。

櫻田や、宮崎の書いた、革命小説が、是等の婦人に與へた、衝動は、實に大きいものであつた。

『やア、岩井さん』
『オ、村上の旦那ッ』
『旦那といふ丈は、約束通り、止さうぢやないか』

岩井は、思はず、額を叩へて、
『こりや、しくじつた。ハッハ、、、』

『よほど、待ちましたか』
『イエ、今少し前に来て、奥さんから、種々の話を、承はつて居た所でした』

『お半の話では、大した事でもなかつたらうが、それでも、一人て居るよりは、寂しくなかつたでせう』
所へ、足を拭いて、のそりと、はいつて來たのが、南であつた。

『關三さん』
『丑さんか』
『一人かね』
『うむ』

『彼の男は...』
『此方へ何とか、いつて來ませんか』

岩井と南の話が、やうやく進まう、とした時、村上は、南の顔を、チラリと見て、
『彼方へ、行かうか』

『それが、よいでせう』
三人は、ひとしく立上つた。

離座敷と、いふほどのものではないが、母屋の座敷と、廊下を隔て、村上の讀書室の如きものが在つた。

それへ、三人が落ちつく、と、村上は、岩井に向つて、聲をひそめた。

「例の男は、いよ／＼東京を出かけて、こちらへ、来る事に、なつて居るが、馬車の立場までは、誰れか、迎ひに行く方がよい、と思ふが、どうです。岩井さんに、願ひ度い、と思ふが……」

「いよ／＼、來ますか」

「左様です」

「知らせでも、ありましたか」

「宮部先生から、秘密の知らせが、ありました」

「それなら大丈夫、来るにきまつて居る」

「迎ひに行つて、くれませんか」

「宜しい、承知した」

「關三を、一しよに出しても、よいのですが、顔を知られて居るものは、避けた方がよからうと思ひまして、岩井さん丈けに、願ひ度いのです」

「左様さ。馬車の立場なぞには、いろ／＼な人間が集まるから、關三さんの行くのは、面白くない」

「君ならば、土地の者も、知らないから……」

「その通りです」

「つまり、彼の男を、知つて居るものなら、それでよいのですから……」

「氣の短い、岩井は、もう立ち上つて、」

「それぢや、行つて來ます」

「何分、お願ひいたします」

「承知いたしました」

山道の旅には、馴れて居る、岩井、足の早い、かねて自慢の男である。

その姿を、見送つて居た、村上は、南と共に、坐敷へ戻つた。

お半が、村上に向つて、

「岩井さんは、忙しさにして、出て行つたやうですが、どこへ行つたのです」

「太駄村まで……」

「誰れかを迎ひにでも、行つたのですか」

「うむ」

「誰れを……」

「兩個は、しばらく黙つて居たが、お半は、膝を進めて、」

「誰れを、迎ひに行つたのです」

村上は、靜かに居住るを改めた。

「お半……」

「ハイ」

「これは、極く内密の事だから、他日になつても、人にいふては、いかんよ」

「それは、よく承知して居ますが、誰を迎ひに、行つたのです」

「照山を、迎ひに行つたのだ」

「照山ツて、顔の赤い、頭の髪の白い、那の人ですか」

「うむ」

『那の人を、迎ひに行くのが、どうして、内密にしなければ、いけないのです』
『あれは、政府の犬なのだ』

『あつ、さうでしたか、わたしも、少し變だ、とは、思つて居たが、犬でしたか』

『いよく、犬といふ事が、判つたのだ』

『そんなに、よく判つて居る、犬を迎ひになんぞ行かないでも、いゝでせうに、なぜ、岸井さんが、迎ひに行つたのです』

『他へ外れると、困るからだ』

『それで、無理にも、連れ込まう、とするのですね』

『まア、そんな譯さ』

『左様ですか』

『此處へ、連れ込んでから、越後の方へ、送りつけやう、といふのさ』

『越後の方へ……此處へ、連れ込んでから、また、越後の方へ……』

『杉ノ峠を、越えて行かう、といふのだから、お前も、その覺悟で居て、貰ひ度い』

『……』

『併し、此事は、どこまでも、内密だよ』

『解りました』

『よく解りました』

『お前も、村上の妻だ。平生の氣性は、よく知つて居るが、此事ばかりは、殊に能く頼んで置くよ』

男優りのお半には、良人の心が、よく解つた。どうせ、手荒な事を、爲る覺悟と、その計畫の裏は、よく解つた。

『越後の方へ、つれ出すのは、何日の事に、なります』

『岩井が、照山を、つれて歸るのは、多分、夜になるだらうから、それから、といふ事にも、なるまい。いづれ、明日の夜にでもならう、と思ふ』

お半は、少し考へて居たが、

『夜になる、といへば、那の杉ノ峠を越えるのですね』

『左様さ』

『それでは、彼處で、何か仕やう、といふのですか』

『えッ……』

『那の人が、いよく、犬だ、といふ事になつて、それを引出す以上、何とか仕てしまはなければ、皆さんの迷惑にもなるでせうから、杉ノ峠なら、場所も、いゝぢやありませんか』

『……』

さすがに、村上も、胸の動悸を抑へるほど、お半の一言には、驚かされた。

男勝りの女とは、かねて知つて居たが、これほどの度胸が、あらうとは、さらに考へて居なかつた。照山を、處分

した後ち、或は、其事情を打明けるときは、來るであらう位に考へて、その豫備にも、と思つて、それとなく、照山

のつれ出しには、何か秘密がある、といふ事を、呑み込ませて置くつもりで、話の小口を開いたら、もう照山を、殺

してしまふのだ、と悟つて、はつきり、其れを、いはれたので、村上は勿論、之れを聞いて居た、南も、少なからず

驚かされた。

『其處まで、お前が、覺つて居るなら、もう何も彼も、打明けてしまふが、照山は、同志の秘密を漏す、政府の犬で

あるから、一と思ひに、片付けてしまふのだが、若し、露見をした時は、各自に、覺悟もしなければならぬし、それ迄には、いろ／＼の経緯も起らう、と思つて、豫め此事だけは、お前にも、打明けて置くのだ」

「よく打明けて下すつた。大概は、そんな事だらう、と思ひました」

「本人に、萬一覺られたら、それこそ大變だから、今にも、岩井が、連れて歸つた上は、萬事の待遇は、お前に、何分たのむ」

「承知いたしました。わたしが、うまく綾なして置きますから、それは、御心配なさるな」

「難有い。それで、萬事は、好都合に運ぶだらう」

「此時に、南は、初めて口を出した。」

「イヤ、實に驚いた。姉さんは、かねて男優り、と思つたが、これほどの度胸がある、とは思はなかつた。實に大いもんだ」

「オホ、、、、關三さんは、ずあぶんだよ。今迄、わたしを、そんなに、い／＼なした、と思つてゐたのかい」

「イ、エ、左様ぢやないが、これほどだとは、思はなかつたのです」

「矢ツ張り、同じ事ぢやないか」

「ハツハ、、、、さういはれりやア、そんなものだ」

これから、三人は額をあつめて、いろ／＼と、照山が、來てからの相談をして、その手筈が、すツかり、ついた時

分に、もう日が暮れかゝつたから、座敷の掃除をしたり、風呂を沸かして、それ／＼に、支度をする。

村上は、獨り自分の座敷へはいつて、何か知らぬが、しきりに調べものを、はじめた。時間は、追々に進んで、既に十時をすぎた。山の中の夜は、一だんと、物凄しいほどの、寂しさである。

八

秩父續きの山奥、街道から外れて、人里へは遠く離れて居るので、夜に入つてからの寂さは、一と通りでない。時は今、彌生の春、山櫻は、未だ盛りであるが、日が暮れると、肌を觸る風は、存外に冷たい。

岩井は、太駄村の立場へ、照山の來るのを、迎ひに行つた。電報で知らせた通りに、上野發の一番に、乗つて居るなら、もう着く時分と思つて、村上の宅では、それを迎へる、支度をして居る。

萬事は、南が、村上の意をうけて、岩井と打合せてあるから、村上は、只だ、すまして居れば、よい譯だ。

照山は、風呂好きの男であるから、お半が、風呂場の掃除を仕て、はやく焚付けて置いてから、何時來ても、すぐはいられるやうに、なつて居た。

それ迄にして、照山を迎へるのは、つまり、安心させて置いて、連れ出さう、と爲る、深い計畫が、あるからであつた。

客間の方には、食事の支度も出來て、不便な山住ひには、珍らしいほどの、備へがしてある。酒も、照山の口に會ふやうに、東京から、取寄せたのが、温めさへすれば、よいまでにしてある。人を殺すのも、存外に手數のかゝるものだ。

「村上さん、遅くなりました」

と、いつて、先づ岩井が、はいつて來た。その後から、照山は、疲れた足を引摺るやうにして、尾いて來る。

「まあ、先生、お疲れて御座いませう」

人を外らさぬ、村上の妻は、照山の側へ寄つて、しきりに世辭をいふ。村上も、南も、ひとしく、巧いことをいふ

「とに角、客間へ案内した。
『先生、お風呂は、如何ですか』
『イヤ、後にしやう』

「一と風呂すませてから、召上つたらいかせてせう」
『少しは疲れたが、汗にはならなかつたから、風呂の方は、飲んでから後ちに仕やう』
『左様ですか』

『何しろ、一ぱい引つかけたら、疲れは脱けるさ、ハツハ、、、』
『それでは、左様いふ事に、致しませう』
『肴なんぞは、どうでもよいから、はやく酒にしたい』
『承知いたしました』

はやくから、支度が仕であつたので、忽ち酒肴は運ばれて、それから、飲みはじめたが、何しろ照山は、酒豪に近い飲み助であるから、しばらくは、盃を傾けるに忙しく、やがて、微酔を帯びて来ると、例の氣焰は、口を衝いて出るのであつた。

『東京の方には、何か、面白い事は、ありませんか』
『何一つとして、面白いと思ふ事はない。昨今の我黨も、實は、滅茶苦茶なものだ』
『滅茶苦茶ですつて……』
『うむ、すべてが駄目だ』
『何か、氣に容れない事でもありますか』

『すべて、氣に容らぬ』
『へへー、すべてといふのは、どれも、これも、いけない、といふのですか』
『その通りだ』

『左様ですかね』
『全體、君等は、今の我黨を、どういふ風に、視て居るか』
『どういふ風つて、私達には、能くわかりませんが、どんな風に、なつて居るのですか』
『君等には、判るまい』

『へー』
村上を對手に、照山の地金が、そろ／＼出て來た。

それを聞いて居た、岩井は、
『まア、先生、一ぱい戴きませうか』
と、いふて、話の腰を折らう、とした。

『岩井ツ』
『はツ』
『君は、黙つて居れ、君には、政黨の事は判らぬ』
頭ごなしにやられて、岩井は、勃乎としたが、じつと堪へた。
『本部に居る、先輩と稱する連中が、甚だ怪しからんのだ、自分一個の、愛憎に依つて、吾人に對するのだから不可苟も黨の先輩たるものは、公明な立場から、黨員のすべてを、視てゆくのでなければ、本當の働きは出来るものでない。その點に於て、黨の先輩は、みな落第ぢや、ハツハ、、、』

南は、之れを聞くと、
「併し、先生」

「何だ」

「先生は、一概に左様いはれても、本部に居られる先生は、いづれも、立派な御方ばかりで、黨員の良否位のは、みな判つて居られるでせうから、そんなに、ひどい事もありますまい」

此時分に、照山は、もう泥酔に近くなつて、少し舌の廻らぬほどに、なつて居た。元來が、岩井や南を、ひどく輕蔑して居る所へ、酔ふに連れて、傲慢な氣分も、出て來た。前には、岩井へ、一喝を加へたほどであるのに、今又た南から、自分に、反對するやうな事をいはれたので、ぐツと、疝癢の蟲が、こみ上げて來たらしく、額には、青筋が出て、絶えず奥歯を、噛んで居る。

「オイ、南ツ」

「ハイ」

「何だ、生意氣な事を吐かして……君なんぞに、何が判る、我輩の如く、本部に詰めて居るものでなければ、今いふたやうな事は、とても、判るものでない。要するに、君や、岩井は、黨員の列に加はつて居る、といふ丈の事で、何一つとして、判るものではないのに、我輩のいふ事に反對するとは、何事だ」

「別に反對する、といふ譯では、ありませんが、あまり本部の先生方を、悪くいはれるので、ツイ一言、申した丈の事ですから、そんなに、立腹なさる事は、ないでせう」

「だ、だ、黙れツ」

「……」

「未だ、生意氣な事を吐かすか」

「……」

「全體、貴様等が、我輩に對して、彼是れ反對がましい事を吐かすのは、天に向つて、唾するやうなものだ。籍は、自由黨の名簿に、載つて居ても、自由黨の主張が、果して何ういふものであるか、人に問はれたツて、その答辯は出來まい。

政治とは何ぞや、と問かれて貴様等は、これに何といふて答へるか、ハツハ、、、。本部の奴等が悪い、と、我輩がいつたら、其れに違ひないのだ。貴様等は、左様ですかといつて、只だ聞いて居れば、よいのだ。

然るに、生意氣千萬にも、我輩に對して、抗辯するとは何事だ」

罵詈訶笑、思ひの儘に、南を辱かしめた。さすがに南も、顔色を替へて、膝を進めやう、と爲るのを見て、村上がヂツと睨んだ南は、唇を噛んで、無念を忍び、何も言はなかつた。

お半は、その場を繕ふ、つもりで、口を出した。

「先生、南なんぞを對手にして、そんなに怒るもんぢやア、ありませんよ。そんな話よりは、いつものやうに、芳原の話でも、聞かせて下さいな、ホ、、、」

と、いひ乍ら、徳利を取つて、酌を仕やう、とする。照山は、大きい碗を持つて、

「さア、一ばい注いでくれ」

「さア、そんな、大きい物で……」

「うむ」

笑ひ乍ら、お半が、満々と注いだ。それを、一と息に、ぐツと、飲み乾して、

『もう、一ぱい』

『まア、驚きましたね』

『芳原の話を、仕て聞かせやう』

『はア』

『賭博の話なら、岩井から聞け』

村上は、之れを、聞くと、堪へかねたものか、膝を進めて、

『先生、冗談も、大概になさい』

『何だと』

『宮部先生からの御紹介で、あなたと、交際を結んで以來、といふものは、あなたに對して、わたくし等は、非常に敬意を有つて、お附合ひをして居るのです。』

わたくし等に、多少の失言があつた。としても、それは、能く教へ導いて下されば、謝罪も、いたしませうし、また、將來も慎むやうになるのです。然るに、あなたのやうに、さう罵詈雑言されてしまつたのでは、わたくし等の、立瀬がないぢやありませんか。

あなたから見れば、岩井も、南も、固より無筆の輩で、取るに足らぬには違ひありませんが、それならそれで、教へて下さるのが、先輩の先輩たる所以でせう。

わたくしも、あなたについて、いろいろ指導を、うけて居るが、時には、意見の相違する事も、あります、その都度に、罵詈雑言されたり、嘲弄されたりするやうでは、長くお附合ひが出来ません』

『可矣、附合つてくれんでもよい。こちらから、頼んだのではない。宮部から言はれて、それからの附合だ。強て我輩からは、頼まぬから、厭なら厭で、絶交すれば其れ迄の事だ』

今迄、じつと、堪へて居た、岩井が、突然に立上つて、照山を殴りつけた。同時に、照山も立つて、岩井に、飛びかゝつた。村上とお半は、本氣に、留めて居るのだから南は、之れを幸ひに、留める振りをして、照山を、扱へつけるやうに爲るから、岩井は、殴りよくなる譯で、照山を、捻伏せて、思ふさま、殴りつけてしまつた。村上夫婦の仲裁で、やうやく、岩井と南を、左右に押退け、照山を宥めて、一時は、納めたが、照山の憤懣は、容易にをさまりさうもない。

明朝は、越後の方へ、送り出して、途中で、處分してしまはう、とした計畫も、是れて狂つてしまつた。いかに、村上夫婦が、うまく説付けた處で、岩井と南が、照山を送る、といつても、承知を仕ないに極まつて居る。

先輩に約した上、此處まで、引付けて置き乍ら、空しく送り出したのでは、先輩に對してもすまぬ、といふ考もあつて、村上は、深い決心を以つて、今夜のうちに、片付けてしまはう、と、獨りひそかに、覺悟した。

杯盤を改めて、酒肴も新しくしたが、照山は、さらに杯を取らう、としなかつた。岩井と南も、むづかしい顔を仕て、黙まつて、控へて居る、お半が、氣を利かして、照山を、風呂場へ案内した。

『旦那ッ』

『うむ』

『何といふ、憎たらしい奴でせう』

『困つた人だ』

『旦那が、やさし過ぎるから、彼奴が、増長するのです』

『併し、君等も、ちと手荒すぎたな』

「疝癢が起つて、とても、堪忍が出来なかつたから、ヤツつけたのですが、御心配をかけて、まことに、すみませんでした」

「そんな事は、どうでもよいが、これから、どうなるつもりか」

岩井は、聲をひそめて、

「どうぞせう、此處で、片付けてしまひませうか」

「何ッ、此處で……」

「へー」

村上が、考へた通り、岩井も考へて居るらしい、南も、膝を進めた。

「風呂場でやつたら、後の始末がよいでせう」

「可矣。やつてしまへ」

「承知しました」

三人は、ひそくと、いかにして片付けやうか、といふ事を、相談したのだ。

手狭ではあるが、小綺麗な浴場、二人位は、樂にはいれるやうに、なつて居る。

照山は、只だ一人で、良い氣持になつて、熱い湯に、浸つて居乍ら、しきりに、考へて居るのであつた。

自分の方から、罵詈雑言を浴せかけた爲めに、岩井が怒つて、それからの立廻りであるから、深く考へて見れば、罪は

自分に在る。併し、それにしても、南と二人で、散々に殴りつけたり、足蹴にしたりしたのは、怪しからぬ、とも思

へば、亦いかに、残念ではあるが、今の場合、自分を戒めて、がまんする外はなかつた。

今迄の同志が、だんく、自分から離れて、何となく自分を、疎外するやうにも思はれるのでそれが自分をして、

煩悶焦慮させる、原因にもなつて居るのだが、是れとても、考へて見れば、自分に、悪い點もあつての事だから、あきらめるより致方がない。

表面は、自分を尊敬して、くれるやうに見える、村上の心も、或は自分から、離れて居るのかも、知れない。すべての調子が、半歳前の村上とは、大分に違つて居る所もある。

斯んな事を、考へて居るうちに、自分の身を、ひどく淋しく思ふやうになつて、これから、先きの事を、考へれば考へるほど、どうしてよいか、さらに、見當もつかず、獨り思ひ悩み乍ら、じつと、思案して居るうちに、大酒してからの入浴で、一時に、逆上して来たから、そろく浴槽を這出し、流し板の上に、どつかと坐つて、小桶に、汲んだ水で、頭を冷やしはじめた。

「先生ッ」

と、いひ乍ら、村上が、姿を現はした。

「やア」

「どうです、湯の加減は……」

「丁度、はいり加減だ。君も、一と風呂どうだな」

「ハイ」

「今夜は、ひどく世話をやかせて、すまなかつた」

「どういたしましたして、却て岩井や南が、失禮を働いたので、恐縮いたして、居ります」

「僕の言も、少し荒かつたか知らぬが、二人の態度も、甚だ怪しからぬ、とは思ふが、今更らいふまい」

「まア、赦して下さい」

『君も、はいつたら、どうか』

『ハイ』

『照山が、小桶の水を、頭から浴びて、さらに汲み出さう、とした時。』

村上は、かくして居た、ピストルを取つて、引金を、ぐツと引いた。

『ピシツ』

と、音がして、薄い煙りが、ばつと散る。

『ラーム』

と、叫んで、照山は、流し板の上へ、うつ伏しに、倒れた。

刹那に、戸を開いて、岩井と南が、はいつて来た。

『うまく、申りました』

『たツた、一發だつた』

『野郎、ビク／＼して居ますな』

『未だ呼吸は、有るやうだ』

銃丸は、美事に背部から、心臓を貫通して、只一發で仕留てしまった。

岩井と南は、うつ伏しに、なつて居る、照山の背に跨つて、首筋の所を、力まかせに、締付けた。

すつかり、呼吸の絶えたのを見て、頭から湯を浴びせる。溢れ出す血を浴びせた湯で洗ひ流してしまつた。

『これからは、吾人の役目です』

『どうする、つもりか』

『杉の峠へ、擔ぎ出して、始末はつけてしまひますから、御心配なさるな』

『直しく、頼む』

村上は、ニヤ／＼笑ひ乍ら、座敷の方へ、出て行つた。

後に残つた二人は、照山の顔へ、刺刀を宛て、一と皮剥いた上に、尻の穴から、槍の穂先を、突き刺した。

南が、裏の納屋から、空俵を、出して来て、それへ、照山を押し込む、邪魔になる手足は、力にまかせて、折るのであつた。

最初の一發で、殺した弾は、先づ良い、としても、後の遺方は、ずるぶん、慘酷を極めたものであるが、それを背負ひ出した、二人は、別に恐ろしいとも思はず、存外に、平氣であつた。

射殺して置いて、顔の皮を引剥くなどは、如何にも、惨忍な事で、誰にしても、眉を蹙めるであらうが、要するに

スパイであつた、といふ點から、照山に對しては、極度に、憎悪の念が湧き、それが爲にやつた、事と思はれる。も

う一つは、事件の發覺を、遅くさせる必要上、誰であるか、といふ事を、すぐに知られないやうに、考へて、斯うし

た仕業に出たものと思ふ。

けれども、屍體を検すれば、三十前後であり、頭髮を見れば、殆んど、白髪であつたのだから、斯ういふ特徴はあ

まり多くないので、照山といふ事が、早く知れて、折角の苦心も、その甲斐がなかつたのだ。

九

岩井は、杉の峠へ、照山の屍體を棄てると、其翌日、東京へ、出て来た。其跡から、南も續いて、出京した。

宮部は、村上からの報知を、心待ちに、待つて居た所へ、二人が、訪ねて来たから、附近の料理屋へ、つれて行つ

た。

いくら度胸がある、といつても、兎に角、人を殺して来たのだから、二人の態度は、何時もと、違つて居た。宮部

は、

は、はやくも、それと察して、

『うまく行つたか』

と、尋ねたので、岩井は、膝を進めた。

『すつぱり、やつて了りました』

『さうか』

『實は、杉ノ峠へ、つれ出して、それから殺るつもりでしたが、村上さんの家で、酒を呑んで居る間に、到頭、喧嘩をして、了つたので、急にやつて、了らないと、手違ひになるだらう、と思つて、湯殿へ入れて置いて、ピストルで、殺つて了りました』

『ふうむ』

『それから、よく血を洗ひ落して、俵へ詰めて、杉ノ峠へ、擔ぎ出したのですから、御安心下さい』

と、聞いて、宮部は、太息をついた。

『ピストルを撃つたのは、誰れだ』

『村上さんです』

『へえ』

それから、一部始終を、詳しく聞いて見ると、宮部の考へては、頗る下手な道方だ、と思つたが、今更いふても、返らぬ事であるから、二人には、其勞を犒ふ事にした。

『それは、非常な骨折であつた』

『私達は、村上さんのたよりを待つて、歸る事に致しますが、何か、御用がありますなら、伺つて置ませう』

『イヤ、別に、用事はない。いづれ、村上が出て來たら、改めて話す事にしよう』

『さうですか』

宮部は、幾らかの金を包んで、二人に渡した。

兇行の翌日になると、此事が、附近の騒ぎになつた。越後へ抜ける、間道ではあつたが、通行人の目にとまつて、兎に角、無様な屍體が、打棄てゝある、といふのが、評判になり、先づ、八幡山の分署から、警部と巡査が、出て來た。戸長の茂木善一郎と、庶務の今井茂十郎を、立會として、屍體の検査を、爲る事になつた。

警察の方から、つれて來た、中神貞作と、小林玄弘の二人が、検屍をした。二人は、醫者の立場から、警部の質問に答へつゝ、一切の検診を終つた。

『顔の皮は、剥いてあるが、體格の上から見ても、被害者は、三十歳前後であり、特徴は、頭髮が、白い事で、命傷は背中から、心臟を撃抜いた銃創が、原因である。其他の傷は、死後に附けたものだ』

と、鑑定が済んだ。

それから、探索にかゝつたのだが、これは可成り困難な事件であつた。けれども、流石に、職掌柄で、數日の後には、照山俊三だ、といふ事が、判つた。

同時に、村上泰治に、嫌疑の雲は、深く覆はれて來た。従つて、岩井と、南の行方を、突止める事にもなつた。すると、事件の日から、東京へ行つて居る事が判つた。

斯うした事情でいよく、村上等を、取敢ず、引擧げる事になつた。

探偵の顛末を述べると、いろいろ面白い逸話もあるが、それは、省略して置く。

明治十七年五月二十一日の未明、雨宮正といふ警部が、巡査十六人を率ゐて、村上の家を、襲ふ事になつた。宮石巡査が、先づ、門を叩いて、家人を起す役になつた。あまりに激しく、門を叩くので、雇人の加藤團藏が、寢呆け眼を擦り乍ら、出て来て、門を開くと、其處に立つて居たのが、巡査であるから、

「ヤア、旦那ですか」

「村上さんは、居るかね」

「イヤ、旦那さんは、昨夜、上吉田へ行つて、まだ歸つて来ません」

「それア、可怪しいな。確かに、昨夜は、家に寝て居る事を、突止めて来たのだが……嘘をいつては不可んぜ」

「嘘は、いひません、全く、お留守です」

と、押問答の最中へ、お半が出て来た。

「團藏さん、何だね」

加藤は、振返つて、

「おかみさんですか。此旦那が、家の旦那に、逢ひたい、といつて来たのです」

「いくら、逢ひたいといつて来ても、旦那は居ないのだから、斷つたら、いゝぢやないか」

「それでも、どうしても居るだらう、といふのですから、困つて居る所です」

「そんな事を、いつたつて、居ない者は居ないのだから、はつきり斷つて、門を閉めてお了ひ」

といひ棄て、お半は、家へ入らう、とする、途端に、雨宮警部以下、十六人の巡査が、踏込んで来た。之を見る

と、お半は、金切聲を擧げて叫んだ。

「人の家へ、無暗に踏込むと、許しませんよ」

「餘計な事をいふな」

「居ないから、居ないといふのに、亂暴ぢやありませんか」
その拒む態度と、顔色から察して、村上は、確かに家に居る、と見たから、巡査は、勢ひ込んで、闖入しよう、とした。

所へ、奥座敷から、覆面した怪漢が三人、一人は、棍棒を掲げ、他の二人は、拔刀で、現れて来た。

茲に於て、激しい争闘が起つた。棍棒を持った男は、捕へられたが、流石に拔刀の、二人は、血路を開いて、逃げ

てしまつた。

お半は、臺所へ駆込むと、菜切庖丁を取出して、自分から、二三ヶ所の傷を付け、それを言掛りに、巡査に、喰つ

てかゝつた。

事、茲に至つては、如何にお半が、男勝りの女でも、どうする事も、出来なかつた。けれども、拔刀の二人が、逃

げたのを見て、それからは、あまり叫喚もせず、素直に、拘引されて行つた。

其前の晩に、宮部の所へ、電報が届いた。
「シイバロラハクニカホクヘル」

と書いてある。

どう讀んで見ても、判らない。發信局の印を見て、村上から打つたものとは判つたが、局へ問合せる事も出来ず、

宮部は、ちつと、考へ込んで居たが、やうやく判つた。

「シバラクカクル」

と判じ得たから、村上の逃げる知らせだ、といふ事が、判つた、従つて、自分の一身も、頗る危険を感じたので、

同様に、いづれへか、姿を匿す事に、覺悟をきめた。

長坂が、歸つて来たから、宮部は、今迄の事情を、詳しく語つて、長坂の諒解を求めた。これには、流石の長坂も驚いて、しばらくは、言葉がなかつた。

『宮部君、飛んだ事をしたねえ』

『どうも、致方がない』

『今更いふも、返らぬ事だが、それ迄の事をするなら、一應は、我輩には、相談してくれたら、よかつたらうに、洵に残念な事だ』

『君に話せば、無論、不同意だらう、と思つたから、話さなかつたのだ』

『まア、仕方がない。而し、これから、どうするつもりかね』

『關西の方へ、一時、遁れようと思ふ』

『よろしい。跡の事は、我輩が、引受けるから、さうしたら、よからう』

其晩のうちに、宮部は、姿を消してしまつた。

先づ、大和へ入つた。例の戸倉庄三郎に據つて、暫くは、山住ひをするつもりであつたが、生憎に、戸倉は、東京へ出て、宮部と、入違ひになつて居たのだ。その歸りを、待合すつもりにもなつたが、戸倉の歸りは、何時頃になるか、はつきり判らないので、また思ひ直して、大阪へ出て来た。

大阪には、知つて居る者も、多くあるが、今の身の上では、うっかり、人に逢ふ事も出来ぬ。幸ひ、曾根崎新地に井伊吉太郎の妾宅があつて、折よく、井伊が来て居る、といふ事であるから、すぐに訪ねる事にした。

井伊は、可成りの資産も、有つて居て、人物も、確乎して居たし、宮部としては、戸倉以上に、親しくして居たから、此場合に、井伊が、居てくれたのは、此上もなく、好都合であつた。

井伊は、宮部の顔を見ると、たゞならぬ眼をして、

『こんな所に、うろくして居ては、飛んでもない事になるから、早く、何處へでも、身を匿す事が、必要だ』

と、言はれて、宮部も、少し驚いた。

『君は、もう知つて居るのか』

『どういふ事情か、それ迄の事は知らぬが、君の事に就ては、幾たびか、警察の方から、尋ねて来た。其様子が、どうも、普通ではなかつた。全體、どうした事か、一應、話してくれ給へ』

そこで、宮部は、一通りの事情を話した。井伊は、それを聞いて、非常に驚いたらしい。

『君にしては、不似合な事を、やつたものだ。併し、今更、何といふた所で、致方はないのだから、暫く身を潜めて事件の成行を見てから、徐ろに、計を樹てるが、よからう。それにしても、此邊に、迂路ついて居ては、危険であるから、一時、海外へでも、行つたら、どうか』

『さうさ、それも可からう、と思ふが、さうするには、第一に、金の都合からして掛らねば、ならぬが、今の場合、どうする事も、出来ぬから、匿れさせるだけ、匿れてみるつもりだ』

『金の事は、出来るだけ、心配するから、兎に角、京阪の地方は、避ける事にしたら、可からう』

それから、井伊と相談した結果、大阪を離れるにしても、變装して、立去る外はない、となつて、此時に、髪を剃して、坊主になつたのである。

袈裟や衣は、井伊が、都合してくれたので、すつかり、本物の僧侶となり、井伊に別れて、梅田の停車場へやつて来た。

井伊の妾は、藝妓上りの女であつたが、却々のしつかりもので、宮部が、それ迄に、變装し得たのは、此妾の働きがあつたから、出来たのである。

東都行の汽車へ乗つたが、宮部の跡から、一人の怪しい奴が、尾いて来るので、宮部は、頗る不安を感じた。汽車が、山崎へ着くと、不意に降りて、停車場を出た。其時は、もう日暮に近く、今の山崎とちがつて、あたりは、極めて淋しく、人家は、昔ながらの百姓家ばかりであつた。停車場から離れた、松並木へかゝると、日は全く、暮れてしまつた。

宮部は、懐へ忍ばせて在るピストルに、手をかけて、しづかに暗い中を、京都へ向つて、歩きはじめた。その前途から、二人曳の俵が、勢ひよくやつて来る。ハツと思つて、畦道へ、身を避けると、背後からも、同じやうに、何者かど、迫つて来た。

そこで宮部は、すつかり諦めてしまつた。これ迄に、手が廻つた以上は、もう遁れる事は出来ぬ。慄ひ、悪びれた振舞をして、恥を曝すでもないと思つて、また元の道へ出ると、前途から来たのも、背後から迫つたのも、ひとしく警吏であつた。

かくて宮部は、京都の警察へ、拘引れた。それから、東海道筋を、嚴重な警戒の下に、送られて、遂に、浦和の獄に、繋がる事になつた。

豫審の調べを、受けるやうになつたのは、明治十七年の十二月であつた。收監状態には、謀殺教唆としてあつた。獨房に入れられて、二十日ほば経つてから、訊問をされたのであるが、宮部は、どこ迄も、教唆を、否認しつゞけた。

『お前は、何と言つても、共犯の村上は、すつかり、白状して居るのだから、逆も遁れる途はないのだ。男らしく、言つて了つたらどうだ』

『全然、知らぬ事であるから、是れ以上の陳述は出来ぬ』

『既に、岩井、南も、取調べは、済んで居る、如何に、強情を張つても、到底、駄目であるから、白然したら、可からう』

『知らぬ事は、言へぬ』

『卑怯ぢやないか』

『何が、卑怯か』

『自分が、教唆して置きながら、それを否認する、といふやうな奴は、卑怯といはれても、致方があるまい』

『拙者が、教唆したといふ事は、どうして判つたか』

『確實な證據が、上つて居るのだ』

『然らば、拙者の自白を俟たず、その證據に依つて、處分したら、可からう』

『生意氣な事を、いふな』

『生意氣とは、何だ』

其頃の豫審調べは、斯うした亂暴な言葉を使つて、被告人を、怒らせるやうに、仕掛けて、それから、調べの筋に入つたものだ。

斯うした調子で、二三度の訊問を受ける中に、到頭、判事と、衝突して、大争論をやつた結果、ひどく憎まれて、約一年間は、さらに訊問もなく、其儘にされて居たのである。

宮部が、捕へられる前に、長坂八郎、深井卓爾も、捕へられて居たのだ。岩井、南、村上の三人が、既に、捕へられて居た事は、改めて、いふ迄もない。

昔の豫審調べは、今と違つて、幾年でも、被告人を、拘禁した儘、訊問無しに、棄て置く事が、出来たのだから少し面倒な事件になると、二年も三年も、其儘に、投げやつて置かれた事は、決して珍らしくないのである。

明治二十年の正月になつて、豫審判事が替つた。それから、調べは進んで、宮部は、免訴の言渡を受けた。長坂も

同様であつたが、深井だけは、有罪の決定をうけた。

約三年の豫審を経て、宮部が、出獄して来た、といふ所から、加藤平四郎が、肝煎りとなつて、淺草の井生村樓にその慰勞會が、催された。出席した者は、星亨以下、二百餘名の多きに達して居る。

そのうちに、村上泰治が、肺を病んで、牢死した。それが、共犯の岩井に知れると、岩井の陳述が、變更されて、其結果、宮部は、再び、拘引されたのである。

其後の経緯には、辯護人の林和一が、一事再理は、不都合である、といつて、強硬に反對した爲に、公判を中止して、事件が再び、豫審に附せられる、といつたやうな、複雑な事もあり、又、群馬縣知事の佐藤要藏が、宮部の親友矢島八郎を介して、宮部に、變節を迫り、それを代償として、無罪出獄を匂はせたが、宮部は、峻乎として、それを撥付けた、といふやうな、面白い裏面の話もあるのだが、結局、公判の結果は、村上と南が死んで、岩井が、有期徒刑十五年、宮部は十三年、深井は、十二年の刑に處せられ、長坂は、再び公判に廻されたが、無罪になつた。

村上の妻は、其後、品行上に、批難があつて、同志から、見離されてしまつた。

此事件の辯護人としては、高橋安爾と、大島寛爾の二人が、最も、力をつくした。高橋は、既に故人となつたが、その令息は、法學士として、父の業を繼いで居る。大島は、もう八十歳に近い、高齢になつたが、浦和の長老として、今も猶、町の人の尊敬を受けて居る。

宮部は、北海道に、十二年の懲役をつとめ、特赦になつて、出獄した。其時は、既に、議會が開けて居たので、公権が恢復されると同時に、總選舉に打つて出て、大河内輝豪と競争して、當選した。その後、成金の鈴木久五郎と、競争して、此時には、金力のために打敗け、失敗してしまつた。

それから後の宮部は、不遇の裡に、世を送つて、大正十二年の震災直後、老衰のために、故人となつてしまつた。

政府顛覆篇

赤井景韶の破獄

「明治廿三年を期して、國會を開設する」といふ、詔勅が下つたので、自由民権派の運動も、これで、一段落にはなつたが、併し、二十三年までは、これから十年もある、といふので、相當の準備行爲は必要だ、といふ事になつて、茲に政黨が生れた。

自由黨は、板垣退助、後藤象二郎、中島信行の三人を戴いて、その下には、馬場辰猪、大石正巳、河野廣中、末廣重恭、大井憲太郎、片岡健吉、植木枝盛等の人が居た。地方へ行けば、それぞれに、代表的人は居たが、東京へ出て居た人としては、これ等の人物が、先づ有名なものであつた。

役員のうちには、加藤平四郎、宮部襄、柏田盛文、内藤魯一、林包明、山際七司等が居て、國會開設運動以來の人は、大概集まつて居た。

少し遅れて、立憲改進黨が生れた。總理は大隈重信であるが、創設の功は、沼間守一に在る。河野敏鎌、前島密、北島治房、春木義彰、牟田口元學等の人が居て、この下には、矢野文雄、小野梓、藤田茂吉、肥塚龍、島田三郎、尾崎行雄、波多野傳三郎、犬養毅等が居た。

自由黨は、板垣が、明治六年以來、地方遊説をやつて、自由民権、四民平等の旗印を掲げ、國會の開設を、唱へ來

つたために、地方へ、廣く味方を、有つて居たので、人数の上からいへば、比較にならぬほど、多くの黨員があつて改進黨の勢力は、遠く及ばなかつた。

けれども、改進黨の方には、世間の人から見ても、英才有識の人物と、されて居たものが、多く居たので、中流以上の評判は良く、黨員の少い割合に、都市における、信用は有つた。

星亨が、自由黨に關係したのは、ずつと後の事で、創立の當時には、何等の關係もなかつた。

自由黨が、これまでの行き掛り上、政府に反對であるのは、改めていふ迄もないが、改進黨にしても、矢張り、政府には、反對の立場に在つて、筆と舌の、つゞく限りは、攻撃をして居たのであるから、政府の方でも、此兩黨に對しては、飽までも壓迫を、加へて居たのが、單に壓迫を加へる、といふのみでは、何となく心細い感じもあつて、其處で、政府黨をつくる事になつた。

その御用を承はつたのが、福地源一郎、丸山作樂、水野寅次郎の三人であつた。福地は、一代の文豪として、世に知られて居たばかりでなく、東京府會議長として、令名ある人物で、一般には、吾曹先生と呼ばれ、花柳界では、池之端の御前といはれて、其機關紙なる、東京日日新聞の信用は、實に素晴らしいものであつた。

丸山は、明治六年に、國事犯者として、獄に入り、特赦に依つて、放免された人、それを、井上馨と山田顯義が、説き付けて、政府の味方を、させる事にし、資金を與へて、明治日報を發刊させ、しきりに自由改進黨兩黨に、攻撃を加へて居たのである。

また、水野は、古い民権家で、國會開設の運動には、率先して、大に盡力したものであるが、この頃には、囃新聞の社長として、すでに政府へ、款を通じて居たのだ。

この三人が、主として新政黨を、起す事になり、帝政黨と名づけて、新富座において、先づ立憲の趣意を、公けした。

けれども、帝政黨の壽命は、僅に半年にすぎず、いつ消えるともなく、立消えになつてしまつた。政府は、この失敗から、對政黨策の、方針を變へて、これから極端な、干渉壓迫を、加へる事にした。言論集會の自由を奪ひ、事毎に、警察力を以て、壓迫を加へてゆくから、氣を負うて立つ、自由黨の人々は、非常な決心を以てそれに對抗する事になつた。

新聞を取締るには、讒謗律があり、政治集會を取締るには、集會條例がある。別に、官吏侮辱罪といふのが、刑法のうちにあつて、大概は、これに引付けて、罰する事になつて居た。地方の役人が、政府の大官へ、御奉公振りを見せよう、として、一生懸命に、政黨員を、抑へ付けよう、とするから、どうしても、無理が行はれる。一二の例を、擧げて見よう。

明治十七年に、星亨を新瀉において、獄に投じた事件の如きは、實に馬鹿らしい事であつて、わたしの手元には、當時の演説筆記も、残つて居るが、果して何の點が、罪になるのか、知り得ないほどのものに對して、官吏侮辱罪に問ひ、重禁錮五ヶ月、罰金四十圓に處し、その上に、代言人の免許状まで取上げてしまつた。

それより、少し前には、栃木縣の荒川高俊が、静岡の東海曉鐘新報へ、主筆として、招聘されて居た時の事であるが、社長の前島豊太郎が、その演説のうちには、

「上は、天皇陛下の貴きより、下は橋の下の乞食の賤しきに到るまで」といつた、辭のあるを捉へて、これを不敬罪に問ひ、禁獄三年、罰金二百圓に處した。

つまり、天皇陛下を乞食に比較した、といふやうに、曲解を下して、この嚴罰を、加へたのである。荒川は、これに憤慨して、辯護の演説をした。それが、更に罰せられる事になつて、同じ不敬罪の名に依つて、禁獄三年、罰金九百圓に處せられた。

荒川は、我國に於ける、最初の政談公開者であつて、非常に雄辯な人であつた。平生から、政府攻撃をやつて、居たので、事があつたらやつつけてやらう、と、睨んで居た所だから、堪まらない「不敬罪を辯護したものは、矢張り不敬罪である」といふ解釋で、斯ういふ處分を、加へられたのである。

上告、再上告、再審の訴へまでやつたが、終に却下されてしまつて、三年の長き獄中生活をさせられた。

静岡を中心として、彼の方面、一帯の同志を集めて、岳南自由黨なるものが、組織されてあつた。その牛耳を、執つて居たものが、前島と鈴木晋高であつた。

自由黨の本部は、東京に在つて、地方へ、支部を設けたら、それでよい譯であるが、その時分には、絶対に、これを許さなかつたので、止むを得ず、地方にも、獨立した政黨をつくり、それとなく、聯絡を取つて、今のやうに支部の爲す事をやつて居たものである。

鈴木率ゆる一派は、同じ黨員のうちでも、頗る激しい方であつたから、豫て政府に對して、強い反感を、持つて居たのが、此一事から、ますます反感を高め、終に恐ろしい計畫を、如める事になつた。世に謂ふ、静岡國事犯が、これである。

二

國會開設の請願運動が、可成り、永く續いたので、それに關係した、人々は、相當に、疲れて居た。常に、心身の疲ればかりでなく、大概は、財産までも、使ひ無くして、生活的にも、非常な苦しい境遇に、墮ちて居たのである。

その後引續いて、國會の準備として、自由黨に關係したので、生活上の窮苦は、一層、ひどいものであつたがそれにしても、天下の志士を以て、自ら許して居るばかりでなく、世間からも、左様いふ風に、見られて居たので、幾分か心には、慰むる所もあつて、よく黨勢の擴張には努め、併せて、國民を指導する事には、盡して居た。

然るに、政府の壓迫は、日一日と、はげしくなり、終には生活の上まで、ひどい干渉の手が延びて来る處から、何となく、不安の念を抱くやうに、なつて來た。

「此調子で、十年もやられたら、同志のものは、皆な倒れてしまはう。いよく初期の國會は開けても、政府の味方が、多く當選して、議席を占めるやうな事になれば、吾々が今迄に唱へて來た説は、一つも行はれぬ事にならう」殊に恐るべきは、二十三年になつてから、國會延期の御沙汰でもあつたら、それこそ取返しつかぬ大事で、その時になつて、騒いだ所で、何の甲斐も、ないのであるから、今のうちに、何とかせねばならぬ。

と、いふ説が、さかんに唱へられて、その結論は「手短かに、やつつけてしまへ」と、いふ事になつたのである。

「手短かに、やつつけてしまへ」とは、果して、どういふ事か。それには、二つの説があつて、一つは、大掛りの陰謀でゆかり、といふのであつたが、他の一つは、目星をつけた大官を、二人でも、三人でも、端からポツ／＼片付けてゆけ、といふのであつた。

岳南自由黨の連中が、最初は、大掛りの陰謀を企て、それが、むづかしくなつてから、暗殺の方へ、變つてゆく。その経路を、話す前に福島事件と、高田事件から、先づ説く必要がある。

此二つの事件が自由黨員の企てた、最初の國事犯であつて、それから、秩父暴動が起り、加波山事件となり、その間に、芽ぐんで行つたものが、静岡事件であるから、物語りの順序としては、福島事件から始めるのが、當然である。

福島事件といへば、すぐ河野廣中を聯想するが、その福島事件なるものは、存外に簡單なものであつて、實は、彈正ヶ原の一揆から、河野等の身に、嫌疑が及び、家宅搜索を、やつて見たら、政府顛覆の盟約書なるものが、出て來て、それには、河野を始め、田母野秀顯、愛澤寧堅、澤田清之助、平島松尾、花香恭次郎の署名があり、いづれも血判をしてあつた、といふので、一揆の方の關係は、ない事になつたが、政府顛覆の方で、高等法院へ送られたから、その評判が高くなつた丈の事で、大した事件ではなかつた。

それに比べると、彈正ヶ原の一揆は、とに角、警察署へ押寄せて、一萬以上の群集が、相當に騒いだのであるから兇徒聚集罪としても、大きい事件であつた。

赤城平六、宇田誠一の兩人が、これには、主として關係してゐたので、其他の黨員と共に、福島の裁判所へ廻された。

併し乍ら、事件の聯絡は無い、としても、人物の聯絡はあつて、縣令の三島通庸に對する、反感が高まつて、茲に到つたといふ、事情は、共通して居ると、視てよからう。

此時には、縣會の解散と共に、斯ういふ事件が、芽ぐんで來たので、東京からは、同志の應援もあり、それ等の連中も、終に監獄へ、繋かれたのであるから、各地方への響きは、實に大きいものであつた。

越後高田の赤井景韻も、此時に福島へ來て居て、それから、大臣暗殺の決心をしたのである。

福島事件が起つてから、政府筋の人は、まぢく、神經を尖らせて、自由黨員の舉動に、深い注意を、拂ふ所から下廻りの役人は、上官の意を、迎へるつもりで、しきりに自由黨へ、壓迫を加へる。それが烈しくなるにつれて、黨員と役人の軋轢となり、事毎に、紛擾を醸して、その争ひは、犬と猿の喧嘩にもひとしく、些末の事にも、顔を赤

め、眼を赤めて、それがために、日を送るの、有様であつた。

越後方面の自由黨は、頸城郡が、一番に盛んで、黨内に、重きをなす人も、多くは頸城郡から、出て居た位である。高田は、郡中第一の都會であり、昔は、榊原侯の城地として、相當に知られて居る、土地である。従つて、この方面の自由黨は、高田を中心として、其勢力を、四方に張つて居るのだ。

鈴木昌司、山際七司、加藤貞盟、小柳卯三郎、八木原繁社、西瀧爲藏等の人々が、其牛耳を取つて、活動して居る。壯年血氣の輩としては、赤井景韻、井上平三郎、風間安太郎等が居て、政府反對の氣を、煽り立てるので、頸城自由黨の名は、奥羽から北越へかけて、最も強く響いて居た。

かうした、土地の警察署長は、よほどの手腕あるものでなければ、容易に、切り抜けて行けるものでない。當時の署長は、岡山縣出身の、赤木義彦と、いふ人であつた。

赤木に就て、面白い物語がある。この人は、岡山藩の劍客で、斯道の達人であつた。明治十年の西南戰爭に際して、警視廳から迎へられ、徵募巡查の隊長になり、戦地へ赴いて、戦功を擧げた。此徵募巡查といふのは、多く奥羽の舊藩士族から、劍術や柔術に、達したものを募り、それに、他藩の士族も加へて、兵隊の別働隊として、戦地へ送つたのである。

維新の際に、薩長二藩から、酷い目に逢つたものが、深く怨みを抱いて居る。殊に、薩藩に對して、その怨みは深く、西郷征伐といふ、名に引付けられて、警視廳の募集に應じたのであるから、その隊長となるものは、相當に武術の、心得あるものでなければ、隊のものが服従しない。赤木は、武術に於て、超群の力量を持つて居るから、よく百人の巡查に長として、之れを指揮し得た。

戦争が終つてから、赤木は、綿貫警視に頼んで、鹿兒島へ、残るやうにして貰つた。それは、斯ういふ次第からである。

『植木口の一戦に於て、小倉聯隊の失ふた、軍旗は、必ず薩軍の手に、在るに違ひない。戦争の大局に、勝利は得ても、大切な軍旗を失ふては、官軍としての面目が立たぬから、いかなる苦心をしても、軍旗は取戻さねばならぬ。斯うした事の搜索は、警察隊の責任であるから、自分は、跡へ残つて、此難役に當つて見たい』

と、いふのが、赤木の意見であつた。

綿貫は、赤木の決心が、頗る牢いのを見て、終に之れを許し、下方切の警察署長として、跡へ残す事にしたのである。

赤木は、それから、一生懸命になつて、軍旗の所在を、探しはじめた。日向の銅田で、討死した村田三介、此人は

薩軍の第四大隊に、屬して居たが、元は、陸軍少佐であつた。其未亡人の手に、軍旗の在る、といふことを探知して家宅搜索を行ひ、天井裏から、軍旗を引出し、これを鹿兒島駐在軍の指揮官、川村景明へ、送り届けて、赤木は鹿兒島を引上げて来た。

其功に依つて、兵庫縣下に郡長となり、二三の土地を経て、高田の警察署長に、轉任して来たのである。赤井が、福島から歸つて来て、その後の舉動に、疑ひを持つたのは、さすがに、赤木の頭腦は良かつた。

二二

赤井は、福島から、歸つて来ると、覺悟の齎の緒を、定めてしまつた。

『いかにも壓制だ。政府が、かういふ風に、亂暴を働く以上は、吾々と雖も、これに對抗するだけの覺悟を、爲なければならぬ。暴に酬るに、暴を以てするのは、小人の所爲で、あるかも知れないが、今は、他の批判などを、考へて居る必要はない。一日も早く、斯んな政府は、ぶち倒して、しまふに限る。同志も少く、金もない身分としては、先づ暗殺の手段に、出づる外はない』

と、確い決心が、ついたので、それから道伴れを、捜しはじめたのである。平常は、強い議論をしても、いざ生命がけとなれば、大概なものは、尻込みをする。肩を張り、眉をあげて、慷慨悲憤するものはあつても、ニツコリ笑つて、死に赴くものは少い。黨員の数は、多くあつても、斯うした大事を、相談してもよい、と思はれるものは、極めて稀である。

やうやく探し出した、道伴れにす可き友人は、たつた兩人であつた。それが、井上平三郎と風間安太郎である。井上は、八木原の弟で、一見する處、風流の才人肌ではあるが、熱烈な、志士の風格を有つた、壯士であり、赤井とは、深い交際があつて、互にその心事は、知り合つて居た所から、赤井は、先づ井上へ、この大事を、打明けたのである。

である。

別に風間の事を、いひ出すと、井上も、これに賛成して、風間を、誘ふ事になつた。いづれにしても、生命がけの大事を、殆ど立話同様に、忽ち決めて了つたのは、平常から、互に心を知り合つて居たのと、政府に對する不平や、大官に對する反感が、茲に到らしめたのである、と、見るのが、相當であらう。

それから後は、幾度か密會して、相談は進んでゆくが、その間に、多少は、意見の相違もあつて、風間は、しきりに『もつと同志を糾合して、大がかりに、やつゝけやう』といふのに對して、赤井は、どこまでも、單獨實行論で、その打合せが、可成りむづかしくなつたので、井上が、仲裁の勞を取つて『兎に角、風間のいふ通り、同志の糾合も一つの手段として、取る事に定め、先づ盟約書の如きものをつくり、それを、同志の間に、秘密の方法を以て、配布する事にしやう』と、いひ出して、赤井にも納得させて、その實は、井上が、その盟約書を、握り潰してしまつた。

天誅黨趣意書

世運衰頹し人情輕薄に流れ、國勢日に危殆に赴き、義理地を掃ふ、實に痛哭流涕の至り矣。奸人佞物、要路に塞りて、其慾を逞うし、私刑を之れ營み、吾人の國は、將さに賣らんとし、吾人は、將さに臣妾たらんとする、應さに近きにある可し。

故に吾人は、天誅組を組織し、天に代りて奸人佞物を拂ひ、世運を廻し、人情を敦厚にし、國勢を挽回し、義理を重んじ吾が國家を永遠に維持せんことを謀る。

幸に同志の士は、來り與せよ焉。

吾人は、前陳の旨意に依り、茲に牛耳を取り、盤石を取り、左の條項を誓ふ

盟約第一章

苟も吾國家に不爲のものある時は、吾人は踵を廻さず、天に代つて、之れを誅罰する事

同第 二 章

吾人は、義理を重んず、故に義理の爲には、身を致す事を誓ふ、吾黨の人は、吾黨全體の議決に依りては、何等の事故ありとも、之れが實行を辭せざる事

規則 第一 條

吾人は何人たり共、前書盟約を守る事を得るものは、黨員三名以上の紹介を以て、黨長に申込む可し、黨員の是とするを待ち入黨を許す事ある可し

同第 二 條

吾黨は、定期會を置かず、事ある時は臨時會同を爲す故、月機度なるをも顧みざるものとす

同第 三 條

吾黨は、前條の如き場合を保つ爲に、多額の入費を要す、依て月に五十錢を、黨に納むるものとす。

同第 四 條

吾黨に、黨長三名を置き、黨事一切之れを處理せしむるものなり

天誅黨の趣意書や規則を、今になつて、讀んで見ると、餘り感心するほどの事でもなく、文章の如きも、まことに拙いものだ、とは思ふが、要するに、その精神を取つてやれば、それで良いのだ。

秘密の相談を、幾たびか重ねて、いよいよ實行に入るべく、その手筈も出來た。暗殺を、本來の目的にして居る以上、誰をやつつけるか、といふことを、先づ第一に定めなければならぬ。それについては、三人の間に、相當、説も分れて、議論も、厭はして見たが、結局は、伊藤博文、井上馨、松方正義の三人を、血祭りに擧げる、と定めた。そ

他の大官は、續いて行るものも、出て來やう。餘り多く目がけると、却て失敗の因であるから、自分等は、此三人を斃して、潔く死に就く事にしやう、と、覺悟を決めたのである。

立派に、趣意書まで書いて、天誅組をつくつた上は、他に同志を求めさうなものだが、それをしなかつたのは、どういふ理由か。

赤井は、初めに單獨實行を、思ひ立つたが、それでは、充分の事が出來ぬ、と視て、井上、風間を加へる事にした。然るに、風間の意見では、もつと大きいものにして、正々堂々と、ヤツつけやう、との事で、あつたから、赤井は、これに反對して「暗殺に正々堂々はない。多數の同志を集めて、革命をやるには、未だ時期でないから、吾人は、革命の先鋒を、つとめる氣で、暗殺の手段に出で、先づ自分の一身を、犠牲にして、天下の同志に、その範を示さう、といふのであるから、これ以上に、人を加へることは絶対に不可」といふて、兩人の間に、やかましい議論が起つた。

そこで、井上が、仲裁役になつて、風間の顔を立てるまでに、この趣意書や盟約をつくらせたのであるから、同志を糾合する、といふやうな事は、少しも考へて居なかつたのだ。

風間も、行きがりの議論は、井上の、上手な取做しで、すつかり捨てしまつて、その後は、三人で、大事を決行することに定めてゐたから、赤井との折合も、頗る良かった。

暗殺の目當として、伊藤、井上、松方の三人を、殺る事にしたのは、何といふても、伊藤は、薩長藩閥中の新知識で、殊に、薩派の大久保が、亡き後は、伊藤の力で、長派の方へ、政權が傾いてゆくに、きまつて居るし、現に、左様なりつゝあるのであるから、政黨に對する、政府の壓迫は、専ら伊藤の指金からである、と、見て居たので、第一に伊藤を、目指したのである。井上は、伊藤の背後に居て、剛情我慢の強い人丈けに、比較的、溫柔な性質の伊藤を、多くの場合、煽り立て、對政黨策についても、井上の肝煎りが、その多きにあるものと、見て居たのであつた。

當時の松方は、頗る力弱き政治家であつて、薩派の代表的の人物、とも思はれぬが、大久保の去つた後、薩派には政治家らしい人物もなく、僅に松方が、大藏省に、辛抱して居て、多少は、數字の解る、といふ所から、黒田、西郷、大山等から、松方を、表面に押立て、長派に當らせて居たので、薩派唯一の政治家の如く、見られて居た。それがために、薩派の政治家としては、松方を黜せ、といふ解釋から、三人のうちへ、加へたのである。

其頃の山縣は、未だ政治の方へ、手を出さず、陸軍の奥深く、隠れて居たので、あまり目指されては居なかつた。赤井等は、いよく東京へ乗出して、實行に着手する、となつた所が、費用の點に於て、頗る行詰まつた。いくら物價の、安い時分でも、此大事を、なす可く、東京へ乗出すものが、二百圓や、三百圓の金を、持たずには行けぬ。

之れについて、三人は、いろ／＼奔走したが、どうしても、出来る見込みがない。そこで、止むを得ず、新潟まで行つて、縣會が開けて居るのを幸ひ、同志のものから、少しづつ集めたら、どうにかならうとの見込みで、新潟へ、出かけて來た。

四

新潟縣の自由黨員には、金廻りのよいものが、多く居て、物凄ほど、金を散じた。殊に、鈴木昌司と、山際七司の兩人は、家産も豊かで、あつたに違ひないが、東京へ出て來ると、鞆に詰めた金を、バラ撒いて、同志の若い連中を、賑はしたものだ。

それであるから、縣下の黨勢も、自然に、振ふ譯で、人間のする事は、何につけても、金が先に立つ、といはれるのも、決して無理のない言ひ草だ。

昔の政黨員と、今の政黨員の相違は、かうした所にある。昔は、黨員が財産を、減らしてかゝるけれど、今は、金を儲けるために、黨員になるものが多い。

一地方に據つて、勢力を占めるまでには、可成りの財産を、使ひはたすまで、やつてゆかねばならぬ。大概な財産は二年か三年で、使ひはたしてしまつて、さて得る所は何か、といへば、集會の時、床の前へ坐つて、多くの人から『先生』とか『老爺』とか、いはれる位が、關の山で、物質上の取得は、何も無かつた。

年に數回は、東京へ、出て來て、中央の政情にも、通ずる必要があり、今と違つて、交通の不便な時代に、長い旅行を忍んで、東京への往復は、ナカ／＼容易な事でない。

鈴木や山際が、長い間の政治運動に、使ひ捨てた金は、頗る多いものであるが、どうして二十年も、それがつどいたか、今から考へると、不思議にも思はれる。

兩人が、世を逝る頃は、家も土地も無くなつてしまつたが、その代り、鈴木の伴義隆も、山際の伴敬雄も、一文なしで代議士にはなれた。亡父が、以前に盡した餘徳で、先輩や同志も、伴のために、力を添へてやつた。

却説、赤井等は、やうやく新潟へ着いて、鈴木や山際にも逢ふて、金の無心を、いひ出すと、平生は、二言といはさず、すぐ金を投げ出してくれるのに、今日は何うしたことか、濫い顔をして居て、ナカ／＼出しさうもない。

『久振で、東京へ、行つて來たい、と思ふのですが、少しばかり出してくれませんか』

『どういふ、用事で行くのか』

『別に、之れといふ用事はないのですが、稀には、中央の政情も、見て來たい、と思つて……』

『左様ぢやなからう』

『えッ』

『君等の東京行きは、外に目的があるのだらう。本當の事を打明けてくれたら、或ひは出すかも知れないが、そんな嘘をいふて居るのでは、一文も出せない』

鈴木は、かういふて、山際の方へ向つた。
「山際君、さうぢやないか」
山際は、軽く首肯いて、
「さうだとも……」

鈴木に合榎をうつて、容易に出しさうもない。此二人に、首を振られてしまへば、その他のものへ、話した所で、一切駄目であるから、これには、赤井等も、頗る弱つた。

それにしても、どういふ譯で、鈴木や、山際は、斯んな事をいふのか、その心が解らない。まさか、自分等の陰謀を、知つて居るのでもなからうが、何にしても少し變だ、とは思つた。

赤井等が、黙まつて考へて居るのを見ると、山際は、ニヤ／＼笑ひ乍ら、

「もう駄目だよ。すつかり判つて居るのだから、白状してしまふがよい」

「えッ、判つて居るとは……」

山際は、一だんと、聲をひそめて、

「大臣暗殺……そりやア、悪い覺悟だ」

圖星を指されて、赤井等は、思はず顔色をかへた。

「ど、どうして、それを知つたのですか」

この時、鈴木が、三人の前へ、投げ出した手紙、それを取つて見ると、八木原の書いたものであつた。

八木原繁社は、頸城自由黨中、最も異彩ある、人物であつた。

學問は、大して無かつたが、理義に明かな人で、却々の議論家であつた。鈴木や山際のやうに、金廻りが、よくなかつたので、際立つて、評判の高い方ではなく、大概は、蔭に居て、よく働いた人である。

中央へ出ては、いつも昇平の手に、附いて居た。後には、後藤象二郎の配下になつたが、一時は、星の幕下として八木原の活動は、ずるぶん目覚ましいものがあつた。

井上は、八木原の實弟で井上の一舉一動は、八木原の、最も注意する所であつた。血氣壯んな井上が、赤井や風間と、しきりに密會をつゞけて、何となく落付きのない、舉動があるので、八木原の頭脳には、直覺的に、深く感じた

ものがあり、その前に、赤井が、福島から歸つた時、しきりに政府の攻撃をして、不穩の辭を、漏らして居たので、八木原は、それ以來といふものは、赤井の態度に、少しも眼を放さず、深い注意を、拂つて居たのだ。

赤井といふ男は、非常に頭腦のよい、將來のある、壯士ではあつたが、少し狂的の氣風もあつて、物事に、強い刺戟をうける、と嚇となる癖があり、一たん思ひ立つたら邪が非でも、遣り抜ける、といふ、質の男であるから、先輩

は、赤井の前途に對し、心配をして居たのである。

殊に、八木原は、實弟の井上が、赤井と、親しくして居るので、人一倍に、赤井の身については、注意を怠らなかつた。

赤井等三人が揃つて、新潟へ向つた時、八木原には、何の相談もなかつたから、すぐに赤井の家を訪ふて、出立の時の様子を、搜つて見ると、どうも疑はしい點がある。

其處で、自分の推察する所では赤井等が、不穩の計畫を立て、東京行きの旅費を、貰ひに行つたのである、と思つたから、金は一文も渡さず、其決心を懸へすやう、懇篤に諭してやつてくれと、いふ意味の事が、書いてあつた。

白髪童顔の鈴木は、ニコ／＼笑ひ乍ら、

「もう少し忍んだら、どうぢや」

「えッ」

「君等の、上京する目的は、大概、解つても居るが、それはいほぬ。只だ君等に、もう少しの間、忍んで居て貰ひ度

い、といふ丈の事を、我輩は、いふて置く。それを君等が、聞いてくれなければ、止むを得ない」と、いつて、三人の態度を、ヂツと、見つめて居る。

鈴木に比べると、山際は、鋭い氣性の持主で、後には、大阪國事犯に加はつて、入獄したほどの熱血漢であるから、すべての調子が、はげしい。

「君等の計畫は、大概、それと推察が出来る。東京へ出て、血を流して来やう、といふのだらうが、そりや不可ないよ。二十三年に、國會は開けるのぢやないか、もう少しの辛抱だ。政府が、どんな馬鹿な事をやつても、その間に、日本が、潰れる譯もなからう。一人や二人の大臣を、亡き者にした所で、すべての政治が革まる、といふ次第でもない。やつてよければ、我輩が、眞つ先に立つてやるから、その時は、君等も一しよだ。鈴木や八木原も、ひどく心配して居る。君等の生命は、當分のうち、我輩に預けてくれぬか」

赤井等は、黙まつて、聞いて居たが、斯ういふ風に、いはれては、否ともいへぬ。

「よく解りました」

「左様か、解つてくれたら、此上もない。さア是れから、大に飲まう」

五

高田には、八木原が、待ち構へて居て、町田屋といふ、料理店の一室に、赤井を迎へ、懇々と、諭す所があつたので、とに角、この企ては止めてしまつた。

乍併、この獄中の、一舉一動に對しては、常に警察側の、注意も深く、殊に、赤井は、最も危険なる人物として

視られて居たので、特別に、受持の偵吏が、形に従ふ、影の如く、いつも附き纏つて居たから、新瀧行きの時も、その背後から、妻い眼が、光つて居た。

二三年前に、スパイの事が問題となつて、新聞紙を賑はしたが、那アした事は、決して珍しくないほど、新たな問題ではない。昔の警視廳を始め、地方の警察署では、さかんにスパイを、使つたものである。

實際の効果からいへば、スパイの力は、存外に強く、殊に、政治界の事は、スパイの働きに、待つ事が多い。刑事が巡査とか、高等探偵とかいつて、それ／＼に、辭令を、貰つて居る、本格の役人である、偵吏よりか、却て蔭の仕事をするには、スパイの方が、遙にまさつて居るのは、事實で、政府が、反對派の秘密を知るには、スパイが、便利である。

政黨の中に、首を突つ込んで、同志なるが如く見せかけ、その秘密を搜り、ひそかに報告するといふ、遣り口は、決して正しい仕事といへぬが、これを使用する、警察側には、それ相當に、辯解の辭はあらう。

自由黨にも、改進黨にも、スパイは、少からず入れてあつた。但し、それにも、二派の別はあつた。一つは、初めから、その覺悟で、這り込む奴と、もう一つは、初め本當の黨員であつて、後に種々の事情から、ズル／＼と引込まれて、御用を勤めるやうに、なる奴である。

高田警察署に、一人のスパイが居た。その名を、相馬信孝と謂つて、初めは熱心な、黨員であつたが、元來、土地の生れでなく、他郷から、流れ込んで来たものだ、といふ所から、あまり信用もされず、殊に、平生は頗る、過激な議論をするので、却て一部の人からは、疑ひの眼を以て、視られて居た。

誰が、いひ出したか、相馬は、警察署へ出入する、といふ評判が、自然に、廣がつて来て、大概なものは、疑ひの眼を以て、相馬を、見るやうになつたから、本人にも、その判らぬはずはなく、時には、これがために、争ひの起ることもあつた。

明治十六年の春、黨員が集まつて、新年宴會を、町田屋で、開く事になつた。降る雪を冒して、追々に、集まつて来るものは、みな熱心な、黨員ばかりであつた。宴會の半ばに、相馬が立つて、何か演説らしいことを、はじめると、四方から混ぜ交へしの、野次が飛ぶ。相馬は少し昂奮して、

「諸君は、何故に、我輩の演説を妨げるのであるか、平生に、言論の自由を唱へながら、獨り我輩の演説を妨げるとは、甚だ怪しからぬ事である」

「ノウ／＼」

「何がノウ／＼か」

「止める／＼」

「イヤ、止めぬ」

「貴様の演説など、聞き度くないのだ」

「我輩も、黨員の一人であつて……」

「ノウ／＼」

「我輩を、黨員でないといふのですか」

「然り」

「こりや、怪しからぬ」

「馬鹿ッ」

「馬鹿とは、何だ」

「馬鹿とは、馬鹿の事だ」

そのうちに、誰か知らぬが「ヤツつけてしまへ」と、いふものがある、と、二三の壯士は、相馬に向つて、飛びかかつた。

誰一人として、相馬の味方をするものはなく、會員の總てが、疑ふて居たのであるから、斯ういふ時は、本人が、慎んで居るべきである。

けれども、本人に見ると、これほどに、疑はれて居るとも思はなかつたのだらう。郡内の重立ちたるものは、大概、集まつて居るのだから、この機會において、一身の辯疏を、それとなく、演つて置くつもりで、少しは舌も廻る所から、席上演説を、はじめたのが、却て會員の反感を買つて、この騒ぎに、なつたのである。

一人の壯士は、前から飛びかゝつて、彼の胸倉を取つた。他の一人は、背後から襟頭を、引つ掴んだ。

「君等は、何で亂暴する」

「亂暴も、糞も、あるか」

「吾輩は、黨員である。黨員である以上は、君等の同志である。君等は、同志に對して、暴行を加へるのか」

「生意氣な事を、吐かすな」

「生意氣とは、何だ」

「吾々は、犬を同志にした事は無いぞ」

「何ッ、犬だつて……」

「大きな、黒犬めッ」

「誰が、犬だ」

「貴様が……」

「何を證據に、さういふ事をいふのか」

「今に至つて、證據呼ばはりは、卑怯だぞ」

「道路一片の風説とは思ふが、同志から、然ういはれては、我輩の立場がないから、飽迄も争ふ」
此時、背後の方から、

「ヤツてしまへ」

と、聲をかけたものがある。

それと同時に、相馬の横ッ面を、ぐわんといふほど、鐵拳を食らしたものがあつた。

それから後は、滅茶苦茶に、殴る、蹴る、引倒す、ふみ蹂る、といふ騒ぎで、彼の體は、へト／＼になつてしまつた。

今迄、手を拱んで、此状態を見て居た、赤井は、何と思つてか、ずつと進んで、勇を揮つて居る、壯士を押退け、相馬を、救ひ出さう、とした。

「赤井君、何を爲る」

「まア、僕に、任かせてくれ」

「イヤ、そりやア不可、こんな奴は、打ち殺しても、差支ないのだ」

「併し、これ丈け殴つたら、もういゝぢやないか」

「未だ呼吸をして居る」

「君等は、犬を殺して、何うするつもりだ」

「えッ……」

「天下の事に任ずる、壯士が、犬一匹を殺すに、この騒ぎは、何事だ」
「だッて、君、怪しからん奴は、うちのめす外は、ないぢやないか」

「これ丈け殴つたら、もういゝぢやないか。とに角、僕が、蹴始末は引うけるから、任かせてくれ、といふのだ」
「左様か」

いづれも、向不見の連中だが、赤井には、不生から、一步も二歩も、ゆづつて居るので、斯うなつて、強て争ふものもなかつた。

宴會は、これで興味も失せた。多くの人は、いつ歸るともなく、コソ／＼と、歸つてしまつた。

跡に残つたものは、何時も残るに極まつて居るものと、勇を揮つた、壯士の一團、それに幹部のもの、ばかりであつた。

哀れ、相馬は、ぐつたりした儘、殆ど何事も辨へず、氣が付いて、眼を開いたら、別室に、寝かされて居た。

近所の醫者が来て、手當をしてくれたので、やうやく生氣づき、我に返つて、深く考へると、口惜くて眠れない。身體も、ミシ／＼いふほど痛んで、その惱みは、ひと通りでなかつた。

町田屋から、歸つて来て、しばらくは、體が利かないので、すつかり、寢込んでしまつたが、その間に、相馬は、深い考へに沈んだ。

「ア、ひどい目に逢つた。何にしても口惜しいから、この仕返しはせずには置かぬ。それにしても、可怪しいのは赤井の態度である。適切に、彼奴が、指圖したことのみ思つて居たら、彼奴が、仲裁に入つたし、介抱までしてくれた、といふのは、どう考へても、不可解い。自分が、行らせて置いて、仲裁や介抱するやうな、小細工をする男ではない、と見るが、それとも、左様でなかつたか、いづれにしても可怪しな譯だ。併し、かうは思ふやうなもの、己れの方にも、悪い所はある。あの時に、己れは犬と、いはれたが、左様いはれても仕方がない。犬のつもりではないが、赤木署長から、いくらでも、貰つて居るのだから、たとへ黨内の秘密は、洩らさない迄も、その金を得るためには、時に、出鱈目の事も、いうて居る。こんな事をして、米代の稼ぎをして居るのは、己れが悪いのだ。け

れども、今になつては、仕やうがない、かうして、寝て居る間も、赤木署長から、助けをうけて居るのだから、己れは、既う自由黨員ぢやなかつた。それにしても、この儘にして置くのは残念だから、何とかして、仕返しをしてやり度いものだな」

所へ、赤木から、手紙が来た。

「至急御相談申度事有之、今晚にも御來車を待つ」と、書いてあつた。

封中には、いくらかの金が、はいつて居たので、それは、寢床の下へ押込み、すぐ返事を、書いて送つた。その晩、遅くなつてから、人目を忍んで、相馬は、赤木の家を訪ねた。

「どうぢや、少しは良いかな」

「未だ痛みまして、歩くにも急げません」

「さうぢやらう。ひどくやられたやうぢやつたから、ナカ／＼元の通りになるのは、日數もかゝらう」

「度々御見舞に預かりまして、有難う存じます」

「イヤ、甚だ不行届きで済まぬ」

「お陰で、助かりました」

「まア、氣永に保養するがよい」

「有難う、而て、御用は、何事でありますか」

赤木は、少し膝を進めて、

「外の事でもないが、例の赤井等の、新潟行きについて、少し見込みが、あつた所から、突ッ込んで、探らせて見ると、どうも可怪しい、と思ふ點が、あるのぢや。けれども、これというて、確證もなく、只だ可怪しい、といふだけ

けの事で、いかんとも、仕やうがない。其處で、君は、大分親しいやうぢやから、少し骨を折つて、貰ひ度いもの

やがどうぢやらう」

「さ、以前ならば、可成り懇意でも、ありました。昨今では、僕を疑つて居るやうですし、新年會の一條からは、殊に、變な、工合になつてしまつて、僕の信用は、更にありませんからな」

「併し、那の晩、君を助けたのは、彼れぢやないか」

「それが、少し變なのです」

「其處が、附け込み所ぢや」

「へッ」

「その禮を、いふつもりで、免に角、行つて見るがよい。さうしたら、彼の心も、少しは解らう」

「……………」

「若し、本當に、好意を持つて居るのなら、君に對して、まだ油斷があるのぢやから、充分に骨を折つたら、何か得る事が、出來やうぢやないか」

「左様ですな」

赤木は、一だんと、聲をひそめて、膝を進めた。

六

痛い身體を、町田屋の一室に横たへて、夜を明かした、相馬は、宿屋の人に送られて、やうやく、自分の家へ歸つた。

どこからともなく、流れ込んで来て、高田の人と、なつてから、未だ半年餘り、何を商賣にするでもなく、毎日ブ

ラ／＼、やつて居るが、どうか、かうか、生活は、立つてゆくらしい。それが、疑はれる原因の、一つでもあつた。

内縁の妻はあるが、子供はない。元來が、世話好きな質で、何事にも飛出して、よく人の世話をする。筆も走れば、口も利く。一度でも逢つたものは、これを調法にして、いろ／＼の事を、たのむ。僅少なから、禮金も持つて来るから、それが、小使ひ錢にもなつて、政黨運動も、やれるのであつた。

或事件を引受けて、警察署へ、二三次行つた事があり、その關係から、赤木署長にも知られ、警察署で、すむ用事は、相馬に頼むと、大概は、片付くのであつた。

「君は、古くから自由黨に居るのか」

かういつて、赤木は、相馬に尋ねた。

何ういふ用事か、相馬は、今、赤木の家に、来て居るのであつた。

「こゝへ来て、入黨したのですから、極く新しいのです」

「君は、自由黨を、何う思ふか」

「……………」

「人民の爲めに、味方をする、いふことは、決して悪い事でない。けれども、それが爲めに、政府を敵視することは、良くない事だ、と思ふ。昨今の自由黨は、丸で虚無黨のやうなもので、やゝもすれば、政府に反抗して、過激な行動に出やうとする、政治を論じて、國家の爲めに活動すること、政治を妨げて、國家の大官に反抗するのは、自から相違がある。先輩は、自由黨に、恩怨の關係はないが、どうも、自由黨の取る、方針は面白くない、と思つて居るのぢや」

「併し、そりやア、署長さんの言とも思へない。政府の方から、自由黨へ、ひどい壓迫を加へるから、自由黨の諸君

も、これに反抗するのであつて、ロシアの虚無黨などは、全然、違つて居るのです」

「壓迫を加へる、といふことは、よく耳にする所であるが、どういふことをいふのか、我輩には、よく解らない。國家には、法律といふものがあつて、その法律を、犯して来るものは、取締るのが當然ではないか。自分等が、法律に背くやうな事をして、それを、取締られたから、といつて、直に政府は、吾黨に壓迫を加へる、と論ずるのは、些と我田引水であらう。いづれにしても、自由黨の人々は、少し自らを省みる可きである。君も、心してかゝらぬと、後悔する事が、あらうぜ」

「御注意は、有難う御座います」

その日は、それだけの事で別れたが、赤木の家に、相馬の出入するやうになつたのは、それからの事であつた。

多くは、夜遅くなつてから、人目を忍んで、こつそりゆく、何の用事か知らないが、兎に角、警察署の氣受けのよいことは、可なり人にも、知られて来た。

其頃から、黨内の秘密が、チヨイ／＼洩れる、といつて、黨員が、注意するやうに、なつて来た。

誰れいふとなく「相馬が怪しい」との噂は、それからそれへ、と傳へられた。疑はれるのは、相馬が、自分から招いた、災ひである。

赤木に近付いて、少しづゝの融通を、うけるやうに、なつたから、黨内の事も、聞かれるにまかせて打明けもすれば、此方から進んで、漏してゆく事もあり、何時か知らず、彼はスパイに、なつて居たのである。

町田屋の新年會に、あゝした、ひどい目に逢つたのは、壯士の疑惑とのみは、いへない。多少は、根據もあつたのだ。

七

「どう考へても、赤井等が、何事か、計畫して居るやうに、思はれてならぬのぢや。相當に、手を盡しても見たが、よく判らない。實は、弱つて居た所へ、急に新潟へ行く、といふので、人を尾けてやつたが、それでも、確とした所が、判らなかつた。けれども、鈴木や山際と、こっそり逢つて、何事か秘密に、相談して歸つて来た様子が、ますます怪しいのぢや。萬一にも、變な事を、やられると、我輩の職務上、政府へ對して、申譯もない事ぢやから、どういふ手段を取つても、彼等の秘密を、握らねばならぬのぢや。突ッ込んで、調べて見て、何事もなければ、この上もないが、若し有られる、と困る。そこで、赤井が、君に對して、好意を持つて居るのを、逆に利用して、君が、彼の手元へ飛び込み、充分に、探つて貰ひたいのぢやが、ぜひ引受けてくれ」

相馬は、赤木が、懇々として説くのを、しづかに、聞いて居る。その胸のうちをいへば、二つの思ひに、惱まされて居るのであつた。

「あの晩に、赤井が、助けてくれたのは、自分に對して、幾分の好意を、持つて居るやうにも、思はれる。また、彼が、淡泊な性質から考へても、本當の好意からである、と思ふのが、當然であらう。赤木は、その好意のあるのに、附け込んで、彼の秘密をさぐれ、といふのだが、それは人間として、正しい行爲ではない。けれども、赤木には、今までに、厚い世話を、うけて居るから、それに背く事は、出来ない。これから先きも、赤木に、反感を持たれる、と困る。自分は、この場合に、何ういふ態度を、取つたら良いか」

考へれば、考へるほど、迷つて、分別が、つかなくなつた。赤木は、さらに辭を申うして、しきりに説く。初めから、スパイにならう、として、それに、なつたのでなく、何だか判らずに、ズル／＼と、引込まれて、スパイと、同じやうに、御用を達すやうになり、生活苦を、救はれて見れば、幾分の義理も出て、軽く調子を合せて、來

たゞけの事であるが、今改めて、この事を引受けると、いよ／＼本當の、スパイになるのだから、多少は、良心の閃めきもあつて、すぐ「諾」とも、いひかねて、あたのである。

けれども、結局は、赤木に、説き付けられて、しまつた。一たん泥田へ、足を突き込んだら、どうもがいた所で、力を入れるほど、ふみ込むばかりだ。假りに、足は引抜き得る、としても、泥だらけの足は、世間の人の前へ、出す事は出来ぬ。

相馬の覺悟は決いた。行く所まで、この儘で、行く事にしやう。さうして、一區切りついたら、この地を立去らうと、覺悟の緒の緒を定めた。

翌日は、少しばかりの、土産物を持つて、赤井の家を訪ねた。

「やア、相馬君か」

「はやく御伺ひするはずでしたが、どうも、面目が悪いものですから、ツイ遅くなりまして、相済みません。あの節は、いろ／＼御配慮をうけまして、まことに有難う存じます。やうやく歩けるやうに、なつたものですから、さつそく、御伺ひいたしたやうな譯で、この上とも、宜しく願ひいたします」

「いかにも、氣の毒とは思つたが、どうしても、一度はアアした事になる、と思つて居たので、初めは、傍觀して居たが、あんまりひどい、と思つて、トウ／＼仲裁に飛込んだのだ」

「左様ですか、それぢやア、早く判つて居たのですか」

「うむ。我輩には、能く判つて居た」

これを聞くと、相馬の頭が、熱くなつて來て、

「矢ッ張り赤井は、親切や好意で、留めてくれたのぢやない。して見れば、別に有難い譯でもない』

と、思つたのである。

「君の行動には、頗る怪しい點がある、といふて、同志の間には、可なり非難もあつたのだから、あアいふことの起るのは、固より當然の事で、それを豫想し得なかつたのは、要するに、君の油断と、いふことになるのだ」

「どうして、僕は、左様いふ風に、憎まれるのでせう」

「つまり、君は、警察側の犬をして居る、といふ所からで、それは、君の不謹慎から、起つて來た風説が、原因をなして居るのだ」

「不謹慎……どういふ點が、不謹慎なのでせう」

「何故、君は、赤木の家に入出入するの」

「……」

「苟くも、君が自由黨員である限り、赤木の家に入出入することは不謹慎と、いふても可からう」

「赤木署長の家には、一度や二度、行つたことはありますが、それだけの事で、疑ひをうけるは、心外です」

「それが、間違つて居る」

「何故ですか」

「何故か……自由黨員が、警察署長の家に入出入するのは、可怪しいぢやないか」

「左様すると、自由黨員は、絶対に署長の家に行くことは、悪いのでせうか」

「そりやア、悪いさ」

「はア……」

相馬は、甚だ解しかねる、といつたやうな顔付で、考へ込む。

「自由黨員だから、といふて、絶対に署長へ、逢ひに行つて悪い、といふ理窟は、なからう。けれども、それは公明に、やらなけりや、いかんよ。こつそり行つて、こつそり歸る、といふ遣方が、悪いのだ」

「別に、こつそり行つたのでは、ないのです」

「けれども、赤木の家へ、君の出入することは、皆な知つて居るが、何の用事で、行つたか、といふことを、知るものはない。其處で、疑惑が起つて來るのだ」

「成程……」

「殊に、昨今は、黨内の祕密が筒抜けに、警察署の方へ知れるから、一層、疑ひを抱くことにもなる」

「よく解りました。これからは、大いに注意いたします」

「君に、これが解れば、この上も、ない事だ」

「赤木署長に、逢つた用事は、何でもない事ですが、今日に及んでは、その辯解をする、必要もないでせうから、何も申しません」

「左様だ、それに限る。百の辯解よりは、今後の行動で、信用の回復をするのが、君のためになる」

「あなたは、僕を、信じてくれますか」

「その答へは、ちよいと困る」

「それぢや、あなたも、疑つて居るのですか」

「まア、左様だね」

「どうも困つた。さうすると、これからは、あなたの家にも、來ては悪いことに、なりますな」

「それは構はぬから、遠慮なく、やつて來たまへ」

「來ても、宜しいのですか」

「宜しい」

「難有い。それぢや、あなたの家へだけ、出入することを、許して下さい」

「承知した」
それから、酒が出て、赤井は、平生の通り話をしながら、いろ／＼相馬を、戒めてやつた。相馬も、赤井の、磊落な態度に、満足を表して歸つたが、二三日すると、ぶらりと、やつて来て、その後は、足しげく出入するやうになつた。
相馬は、心から、赤井に、服して来るのではなく、何か見付け出して、復讐的に、赤井を陥入れてやらう、と考へて居たのである。

八

何事にも如才ない、相馬は、赤井の家へ、出入する間にも、何かと小用の手傳ひもすれば、時には、赤井のために、使ひ走りも、するやうになつた。
赤井の性質は、極めて淡泊であつたから、スパイの疑ひある、相馬のやうなものでも、自分から、進んで出入するものに對しては、強てこれを拒む如きことはせず、その自由に、任せて置いた。殊に、贍玉の太い男であつたから、一向に恐れる風もなく、今迄の通り、一般の黨員と同じやうに、取扱つて居つたのである。
母と、弟妹と、家内は、赤井を加へて、四人生活で、どちらかといへば、貧しく日を送つて居たのであるから、別に書生を、置くほどの餘裕もなく、相馬が、やつて来ては、家事の手傳ひもするし、面白い話をして、皆を喜ばせる事もあるので、赤井の感情は、しばらく措いて、家人の間には、極めて氣受けてよく、氣をゆるして、出入させて居たのである。

かくてある間に、不圖した事から、相馬の手に入つたのが、例の天誅黨の趣意書であつた。
この時の相馬は、何に例へようもなき、喜びであつた。その書類を、こつそり持ち出して、赤木の家へ、飛び込ん

で来た。

「やア、相馬君」

と、いひながら、赤木は、サアベルを、傍へ置いて、究屈さうに、坐についた。

その頃の巡査は、三尺位の檜の棒を、持つて居たもので、未だサアベルは、持つて居なかつたが、署長は、既にサアベルであつた。

巡査の服装や、持物の變遷も、可なり面白いものであつた。初めは、摺古木に似た、短い棒を、腰にぶら下げて、ノソリ／＼と、歩いて居たが、冠り物は、左右がまつて、前後に長い、饅頭笠であつた。

その前は、邏卒と、いはれた時代で、この時代には、大小を帯して、ダブ／＼した、洋服に、葦山笠を冠り、草鞋を穿きであつた。

明治十七年の春頃から、サアベルに、なつたやうに思ふが、長崎において、外國人と、巡査の衝突があつて、外國人の中に、斬られたものがあり、それが問題になつて、一時は、元の棒になつたが、間もなくサアベルに、逆戻りした。

相馬は、赤木の前へ、例の書類を出して、

「かういふものが、手に入りましたので、取敢ず持つて參りました」

「それは、どういふ書類かね」

「大臣暗殺に關する、秘密の書類であります」

「えッ、大臣暗殺ぢや」

赤木は、顔色を變へて、膝を進めた。

「これが、天誅黨の趣意書です。それから、これはその盟約書であります」

「どれ……」
書類を読んで居るうちに、赤木の顔は、いよ／＼けはいしく、なつて来た。

「それは、大い事ぢや」

「彼等の陰謀は、實に驚き入るでは、ありませんか」

「赤井の書いたものか」

「さうです」

「確にさうか」

「筆蹟を比べたら、すぐ判ります。現に、彼れの机の引出しに、在つたのでありますから、確に違ひありません」

「うむ。よい物が、手に入つた」

「彼等を、一と網に引つかけるのは、この機會か、と存じます」

「その通りぢや」

「この上は、彼等の一味が、どういふ連中か、それを知る必要もありませんが、兎に角、平生から危険と、認めて居るものは、一時引上げてしまふのが、よいやうに思ひます」

「君は、なほ進んで、彼等の秘密を、探つてくれ」

「承知いたしました」

赤木は、次ぎの室へ入ると、間もなく出て来た。

「これは、少しばかりぢやが、ほんの車代のしるしぢや」

相馬の前へ、金の包みが置かれた。

「毎時も、恐れ入ります」

「まア、取つて置く、がよい」

「それぢや、有難く頂戴いたします」

「我輩は、新潟へ、行つて来るが、今夜のうちに、跡の報告を聞かせて、貰ひ度い」

「承知いたしました」

相馬が歸ると、赤木は、すぐ署へ、やつて来た。それから、偵吏は四方へ飛んだ。

夜に入ると、相馬が、またやつて来て、何事かを報告した。赤木は、ます／＼息をはづませて、少し昂奮の態であつた。

「そこで、少し御願ひの次第があります」

「どういふ事か」

「僕の行爲は、要するに、同志を裏切つたことになるから、どうせ、この仕返しをうけるに、極まつて居ります。僕

一身ならば覺悟の上でありますから、少しも恐れませぬが、妻子のある身で、それ等の心配もありますし、猶ほ充

分の働きをするには、一身になつてしまはぬと、萬事に都合が悪いのですが、何とか御配慮を、願ひ度いのです」

「宜しい。それは、心配無用ぢや。此方から、君の家には、見張をつけてやる」

「イヤ、それは、いけません。僕の考へでは、妻子を、新潟へ送り、家は明けてしまつて、僕一身に、なり度いので

す」

これを聞くと、赤木は、少し考へて居たが、

「よし、解つた」

「何とか、なりませんうか」

相馬の要求が、金の事であつた。赤木は、すぐに、それが解つたから、

「いくらほどあれば、その始末がつくか」

「百圓位あれば……」

「少し待つて居れ」

その頃の百圓は、相當の金で、貧乏世帯を持つにも、また終ふにも、それ位あれば、どうにも、なつたのである。赤木は、どこへ行つたのか、しばらくすると、歸つて來た。

「さア、これだけ、持つて行け」

紙にも包まず、相馬の前へ、列べた紙幣は、百五十圓あつた。

百圓の要求が、容れられるかどうか、と考へて居た、相馬は、要求した額よりも、五十圓多くあつたので、思はず

「ハッ」といつて、頭を下げた。

「君、後も、しつかりやつてくれ」

「大に、やります」

「君も、可なり慮められたからな」

「全く左様です」

所へ、赤木の妻が、出て來た。

相馬へは、ちよいと會釋して、

「あなた、電報で御座います」

「うむ、どれ……」

無造作に、うけ取つて、電報を見て居たが、

「出入りの車屋を、呼んでくれ」

「ハイ」

「大急ぎぢや」

「ハイ」

細君は、出て行く。赤木は、相馬に向つて、

「これから、すぐ新潟へ行く」

「夜中に……」

「明朝を待つて居られんから、大急ぎで行くつもりぢや」

「それは、忙しいですな」

「跡は、次席を呼ぶから、よく打合せてくれ」

「承知いたしました」

縣令からの電報をうけて、赤木は、夜を冒して出かけた。不便な時代で、三人曳ぎの俵を飛ばした。

翌日の晝頃には、相馬の家族は、どこへ行つたか、姿を消してしまつた。

九

當時の縣令は、永山盛輝といふ人であつた。鹿兒島縣人の生一本、鹽辛と油蟲と、自由黨は大嫌ひである、と、平生から、さういつて居た位で、自由黨員の、一言一行には、悉く干渉を加へるやうにしろ、といふのが、この人の、自由黨に對する、方針であつた。

同時に、改進黨に對しても、餘り好感は、有つて居なかつたので、相當に、壓迫を加へた。それについて、かういふ面白い、挿話があつた。

明治十二年頃の事、尾崎行雄が、未だ青書生の身として、福澤諭吉の推薦によつて、新潟の新聞社へ、主筆として迎へられた。

社の人達は、福澤先生の推薦でもあるし、多少は、その名も耳にして居るので、どんな人物か、といふことは、それ／＼に想像もして、兎に角、萬代橋の畔まで、一同は、出迎へる事になつた。

その頃には、長岡から、信濃川を昇つてゆくのが、最も便利としてあつた。豫め到着の日取りは書面でも、判つて居たし、長岡からは、電報も来て居るので、豫定の時刻には、新聞社の人々は、萬代橋畔の船場へ来て、主筆先生の到着を、今や遅しと、待ちうけた。

日の暮合に、小蒸汽船は、いよ／＼着いて、船客は、ゾロ／＼上陸したが、尾崎らしい人は、影も見えなかつた。

「モン／＼、この船に、尾崎といふ先生は、乗つて居られなかつたかな」

「どういふ人ですかね」

「偉い先生だ」

「さうですね。新聞社の御方が、出迎ひに来るやうな、偉い人は、乗つて居ませんでしたよ」

誰に聞いて見ても、同じ答へであるから、出迎ひの人達は、頗る失望の態であつた。不圖、向ふを見ると、柳の樹の蔭に、小さい、行李を置いて、小便をして居る、若い書生が居るから、

「君ッ」

今、地上に置いた、行李を取上げて、此方へ向直つた、書生は、軽く首肯した。

「君は、この船から上つたのですか」

「左様」

「東京から来た、尾崎行雄先生といふのが、長岡から、参らなかつたかね」

「はア、それは、我輩です」

「えッ」

「出迎ひですか、それは、御苦勞でした」

「へへ——」

社の人達が、呆氣に取られて、互に顔を見合せたのも、無理はない。年は漸く廿歳位の、青書生で、而かも、小僧小僧して居るのだから、ちよつと、面喰つたのである。

翌日は、出資者が、訪ねて来て、いづれも、不満足であつたが、今更に仕方はない。数日の後、例の鍋茶屋において、社員が重立つたものと、出資者は勿論、土地の有力者を招いて、尾崎の歓迎會を、開く事になつた。

來賓の第一は、永山縣令と極めて、これは、床の間の上席へ、尾崎と並べて、席を設けてある。

やがて、時刻も過ぎて、來賓は揃つたが、尾崎は來ない。

「どうしたのでせう」

「さうですね、困つた先生だな」

「兎に角、迎ひを出さうか」

「さうですな」

彼是れ、相談して居る所へ、尾崎は、やつて來たが、歳の若いのに、存外のすまし方で、一同へは軽く會釋をして、すうつと、上席へ行くと、永山の隣席へ座つた。

初めから、設けてある席へ、案内されたから、座つただけの事で、別に不思議は、ないのであるが、それにしても、日本人の癖としては、一應は辭退して、

「まア、私は……」

と、いつて、上席は遠慮するのが、通例の如く、なつて居る。ところが、尾崎は、案内される儘に、すまして上席を占め、永山には、軽く會釋しただけで、別に口をきくのもなかつた。その態度の傲然たるには、一同も呆れて、顔を見合せた。

今では、髯も白くなつて、すつかり、老けて来たから、少しは有難味もあるが、昔の尾崎は、色の白い眼玉のクルリとした、いかにも書生氣の、離れない人で、あつたから、見た眼には、頗る軽く思はれた。殊に廿歳の尾崎は、どう見ても、坊ちゃんらしい所があつて、餘り重くは見られなかつた。

その頃の縣令は、今の知事であるが、比較にならぬほど、昔の縣令は、今の知事と違つて、威張つて居たものだ。永山は、非常に、氣が勝つて居て、武人肌の所があり、縣會などに臨んでも、傲慢な調子で、

「何の貴様等が」と、いつた、風を示して、頗る厭がれたが、一般の人からは「恐い縣令さん」として、知られて居たほどであつた。いよ／＼宴會が始まつて、先づ開會の辭が終り、尾崎は、しづかに立つて、これに對する、答辭を述べる事になつた。

辯舌は、尾崎の最も長する所であつたから、始め輕んじて居たものも、終りは膝を正して、聞くやうになり、一座は閑として、せき一つするものがなかつた。

主筆として、新聞社に招かれて来た、それについての、抱負を述べたのであるが、藩閥や官僚の徒を、遠慮なく糞こなしにして、薩長藩閥の攻撃を始めると、永山の頭へ指さして、

「此處にも、その一人は居るが」と、やらかしたから、さア、大變だ。主催者の驚きは、いふまでもなく、來會者の顔色まで變つて、たゞ永山の容子を見つめて、事勿れかしと、祈るのであつた。

尾崎の演説がすむと、永山は、すつと立上つて、一同へは、何の挨拶もなく、そのまま、歸つてしまつた。

永山の居る間、ひとへに、その怒りに觸れざらんことを祈つたものも、永山が去ると、俄に尾崎の前へ、代る／＼やつて来て、しきりに盃の献酬を、はじめた。

「どうも、驚きました。先生の雄辯は、恐らく日本一でせう」

「令公の前で、あれだけに演れる人は、とても日本人には、二人とありますまい」

「恐れ入りました」

馬鹿らしい、世辭を並べて、子供のやうな、顔をして居る、尾崎の前に、頭を下げる、見苦しさ。

この事から、急に値打が上つて、尾崎の名は、到る處に、喧傳された。この時分に「尙武論」と題する、長い論文を掲げて、その筆の雄渾なるに、また人を驚かした。

「尙武論」は、一冊の書物として、世に公けにされて、頗る好評を博したが、その人の口から、今は「軍備撤廢論」を、聞かされて居るのである。

縣會の書記長になつて、議員の討論を、筆記して居たのも、その頃の事であつた。今のやうに速記者が、なかつたので、どここの縣會でも、大概は、新聞記者に囑託して、縣會の書記を、勤めて貰つた。

所が、尾崎の、筆記したのを見ると、一々評が、はいつて居るから、實に面白かつた。或は「愚論聞くに堪へず」とか、或は「論旨不徹底」とか、いふやうなことが、みな書入れてあるので、議員の間に、やかましい問題となつて、終に囑託を廢められた。

物語りは、横道に外れたが、これから、赤井の事に返る。

一〇

尾崎には、頭をコッソと、やられたが、自由黨に對して、その以前に加へた、永山の壓迫は、とても話にならぬほ

どであつた。
赤木署長から、天誅黨の事について、詳細の報告を得た時、永山は、非常に驚いた。斯ういふ事件が、この縣下に起つたことは、自分の重大なる責任として、非常に驚く、と同時に、頗る憤慨して、すぐ赤木を、呼びつける事になつた。

その急電を、手にするや、赤木は、三人曳の俣で、少しの休息もなく、新潟へかけつけた。
永山の邸には、もう警部長も、保安課長も来て、赤木の到着を、待ちうけて居る。

「ハッ、赤木署長が、見えました」

「よし、これへ、すぐ通せ」

案内されて、赤木は、その室へ通る。

「オー、赤木か」

「ハイ」

「もつと、此方へ、寄つてくれ」

「失禮いたします」

「電報と書面で、大要は知つたが、えらい事が、起つたのう」

「小官も、ちよつと、驚きました」

「併し、未前に探知したのは、君の力ぢや」

「恐れ入ります」

「猶ほ詳細に、述べて貰ひ度い」

赤木は、これから詳しく、その報告をした。天誅黨の趣意書と、盟約書を出して、

「これを一應、御覽下さい」

永山が、一と通り見て、課長の手へ廻すと、課長も、讀んで驚いた。

「自由黨員の無謀には、驚くの外ない」

「左様です。彼等は、只だ政府に反かんがために反くので、とても、度し難い奴等ですから、根を掘り、葉を枯らす迄、今度は、やつつけませう」

「それが可い。しつかりやつてくれ」

「承知いたしました」

永山との問答が終ると、深谷は赤木に向つて、

「君、連累の見込みは、どの程度に、ついて居るかな」

と、聞かれて、赤木は、少し困つた。

「その點については、何分にも證據が不充分で、少し困りましたが、併し、鈴木、山際、八木原、加藤、小柳等の關係は、無論のことゝ存じます」

「むう、それで宜しい。少しでも引つかゝりがあれば、尻尾を抑へることは出来る」

先頃の縣會開會中、彼等三人が、鈴木や山際を、訪ねて来た時の事は、すでに御承知の儀と存じますが、それは旅費、その他の金について、相談のためといふ事に、ほど見當が付きました」

「うむ、成る程、それに違ひない」

課長と、赤木が、相談して居るうち、永山は、長い電報を、内務卿の伊藤博文に打ち、續いて、事件の、詳細を、書き送つた。

この相談は、二日間に涉つて、それから、逮捕に關する手續きも、すつかり定まつた。要するに、縣下の自由黨員

を、この事件で、一掃してしまはう、といふのであつた。
 嫌疑で、人を縛ることは、全く随意に、やれるのであるから、有罪と、無罪と、そんな事には、頓着なく、何でも構はぬから、大掃除をやる気で、思ひ切つてやれ、といふのが、永山の命であつた。
 殊に、裁判所の方は、内閣から命令すれば、どうにでもなるのであるから、永山の決心次第で、どれほど擴げやうと、事件を大きくすることは、思ひ通りになる譯だ。
 司法權獨立なんて、そんなことは、薬にしたくもない、時分の頃、司法省大書記官の安藤則命、大審院檢事の林三介と岡本豊章の二人はすでに東京を發して、晝夜兼行で、新潟へ向つた。

政府が、自由黨を、憎悪した事は、實に酷いものであつた。同時に、これを叩き伏せやうと、して、努力した事も、一通りの骨折では、なかつた。

同じく、政府に反對してゐても、改進黨の方は、單に口舌の上だけで、左までに恐ろしい事はない、と見て居たから、その壓迫も、自由黨に對するほどでなく、單に大隈に對する、金融の道を塞ぐ位が、關の山であつた。
 その頃の藩閥政治家は、政黨を視ること、初めから叛逆者の、集團の如く思つて、黨員に對しては、異端者としての取扱ひであつた。

政府の方では、福島事件以來、凄い目を光らして、自由黨員の一舉一動には、深い注意を、拂つて居た所へ、大臣暗殺の陰謀發覺といふ、報告を得たので、その狼狽は一と通りでなく、爲に、安藤や、林、岡本まで、新潟へ特派するといふことに、なつたのである。

安藤は、元來が武人で、保守專制の權化にも均しく、可なり辛辣な、腕を揮つたものだが、その代りに、使ひ道に依つては、物の役に立つ人であつた。

世に有名な、藤田組の贖札事件に際して、警視廳の中警視を、勤めて居たが、川路大警視の命をうけて、大阪へ乗込んだ時の如き、普通の役人には、ちよつと出来ぬ事をやつて、傳三郎始め中野梧一等を召捕る、指揮をした事もあり、これがために、職を免ぜられて、しばらく閑散の身に、なつて居たが、間もなく司法省の方へ、再び出るやうになつて、今度は、赤井の事件に、彼一流の腕を、揮ふことになつた。

縣令の永山が、薩摩出身であつて、安藤と林が、矢張薩摩人であつたから、思ひ切つたことをやつて、越後の自由黨を、一掃し去らう、といふ、恐ろしい事まで、考へたのである。殊に、内閣の方針が、既に自由黨を、叩き付けることに、決して居たから、猶ほ更ら、仕事は爲し易い傾きがあり、その檢擧に就ても、頗る大がかりであつた。

司法權の獨立——そんな事は、薬にしたくも無い頃の事で、行政大臣が、司法權へ、立ち入つて、裁判官にさへ遠慮なく、命令を下すほどであつた。

若し、裁判官に剛情なものがあつて、大臣の命令を背かなければ、即日免の字になる、といった有様で、今の裁判官に比べたら、實に氣の毒なものであつた。

併しながら、檢擧の手續きは、すつかり済んだけれど、ちよつと弱つたのは、恰も縣會の開會中で、議員の體に、手を付ける事が、出来なかつた。

これに就ては、相應に苦心もしたが、政府との打合せも、充分にやつて、いよ／＼縣會議員でも、何でも構はず、ふん縛つてしまふ、と云ふ事に決した。
 當時の議長は、島田茂といふ人であつたが、先づ島田を、縣會から拘引して、引續き鈴木昌司を捕へ、それから、堀川信一郎、江村正英、山際七司、加藤貞照等も、引ッ立てられた。議員もあれば、只の黨員もあり、要するに、相當の勢力を持つて居るものは、片ツ端から、拘引したのである。
 帝國議會は、いふまでもなく、たとへ地方の議會にもせよ、議事の開かれて居る場合に、議員を拘引する、といふ

のは、ずるぶん思ひ切つた遣方で、亂暴狼藉を、極めたものだ。
この事件に、關係はなかつたのだが、富山縣の稻垣示が、議場の言論に、罪を得て、矢張り縣會開會中に、拘引された事がある。

これは大問題になつて、鳩山和夫や田口卯吉が、發起人となり、全國の縣會議長を、東京へ集めて、大運動を、起した事があつた。

それから後は、政府の方でも、多少は遠慮して、餘り亂暴な拘引は、せぬやうになつたけれど、それは、議員の身に限られて、一般の人々は、大猫同様に、見られて居たのである。

一一一

議員を、拘引する事について、もう一つ、話して置きたい。

初期の議會の時、森時之助といふ人が、開會に先立つて、收檻された事がある。森は、東京府下の選出で、當時は米穀取引所の社長を、やつて居た。

この事が、端なくも、議會の問題になつて、光明寺三郎が、末松姓を稱して、議員になつて居た時で、議會の演壇に、大雄辯を揮ひ、終に森は、一時、解放された事がある。

それから後は、議會の開かれて居る間は、勝手に議員を、拘引する事が出来なくなつて、今でも、その通りであるが、これは、左様あるべき事だ、と思ふ。

赤井の事件の時は、問題となるのが當然で、あつたにも拘らず、一般の人は、何とも思つて居なかつたほど、議員の位置は、軽いものであつた、といふ事もいへる。
新潟に於て、鈴木等が捕へられる、と同じ日に、高田の方では、赤井等を、引ッ捕へる、一切の手續きが、付いて

居た。

長岡、三條、糸魚川、柏崎、與板の方面は、それづくに準備して、萬一にも、高田から、通れてゆくものがあれば一人も洩さず、拘引し得るやうに、各警察署の、手配りも出来て、恰も戒嚴令を布いたやうに、頗る嚴重であつた。

上職入町の、西本願寺説教所が、巡査の假屯集所に充てられ、上田端町の大漁座を、一時の拘留所と、いふ事にし

て、四方には板圍ひをしてしまつた。
明治十六年の三月廿日、やうやく、東の空に、日の光りを見る頃、警察署から出かけた、正服の巡査、約十名あま

りを、赤木署長が引率して、木築町の、赤井方へ向つた。
舊曆からすれば、二月中旬、降り積つた雪は、軒を冒して、吹く風は、骨を刺すばかり、夜半は降り止んだが、日の光りを、チラと見たばかり、また俄に、曇つて来て、降り頻る雪に、全身を白くさせながら、巡査の一隊は、木築

町へ、やつて来た。
元來、赤井の家は、舊藩の頃、榊原の家臣で、祿は薄く、生活は、極めて貧しかつた。昔ながらの屋敷町に、小さい家を得て、相變らずの清貧に、安んじて居る。父は、戊辰の役を経てから、病ひ勝であつたが、數年前に死んで、

弟と妹を對手に、母を介抱して居たのである。
玄關と、いふほどの構へはなく、格子を開ければ、すぐ三疊の座敷で、そこには、弟の金十郎が、寝て居た。

前夜から、家の四方には、刑事が張り込んで居て、嚴重に警戒して居たのだが、赤井の家人は、誰も知らなかつた。

「オイ」

格子を開けて、突然、聲をかけた巡査。金十郎は、飛び起きて、

「何だ」

「景留は、居るか」

「兄は、居る」

「可し」

「何だ、君は……」

「警察署から、来たのぢや」

「服装から見れば、巡査らしいが、顔に見覚えがない。君は、どこの巡査か」

「そんな事は、どうでも宜しい」

「宜しくない。人の家へ、その用件もいはずに、踏み込むとは、亂暴千萬だ」

「職権を以て、景韶に逢ふのぢや」

「たとへ、何であらうと、用件の説明を聞かぬうちには、一步も履み込ませる事は出来ぬ」

「流石に、赤井の弟だけあつて、歳は子供でも、いふ丈けの事は、いひ張る。この押合を、聞いて居たものか、奥から、赤井が出て来る、突端に、赤木署長も、はいつて来た。」

「ヤア、署長さんですか」

「オー、赤井君」

「何ですか」

「少し話があつて、来たのぢや」

「左様ですか、宜しいから、上つて下さい」

「それぢや、失敬する」

「歌と妹は、手早に、寢床を片付けて、座敷の儘に、炭を入れた。」

署長の後から、巡査が一人、附いてはいる。金十郎が、戸外の状況を見て、驚きの眼を睜つた。

五歩に一人、十歩に二人、巡査の陳列會に似た、この状況は、只事でない、と思つた。

「どうです。この寒さは……」

「酷いね」

「殊に、今朝は酷いやうです」

「止みかけた雪が、また降り出したから、どうせ、また積る事じやらう」

「爐にはいつたら、如何です」

「まア、これで宜しい」

「全體、何の用事ですか」

「大概は、それと察しても、落付いた態度で、赤井は、少しも騒がない。署長は、氣の毒さうにして、署へ、来て貰ひ度いのぢや」

「はア、警察署へ……」

「左様ぢや」

「どういふ事件ですか」

「さ、事件は、何が判らないが、検事の令状を執行する」

「宜しい。拜見ませう」

「巡査に、眼配せをすると、大切さうにして渡したのが拘引状である。」

「赤井君、かういふ次第ぢや」

「どれ……」

赤井が、受取つて見ると、

新瀉縣中頸城郡高田木築町

士族

赤井

景詔

二十三年

右、内亂陰謀、大臣暗殺ノ罪ニ仍リ新瀉裁判所高田支廳へ拘留スルモノ也

新瀉裁判所高田支廳

検事補

堀

忠光

明治十六年三月廿日

と、書いてある。

赤井の胸には、すぐ感じた。天誅黨の一條に違ひない、と思つたが、それならば、何でもない事件で、一應の訊問をうけたら、事情は判明して、直に放免されるものと、考へた。

「これは、意外に思ひますが、兎に角、參る事にしませう」

「まことに、氣の毒ぢやが、同行して下さい」

「承知しました」

母も妹も心配して、ウロ／＼する。金十郎は、赤井の傍へ寄つて、

「兄さん」

「お前も、聞いて居たらうが、かういふ次第だから、ちよつと、行つて来る」

「兄さん、ちよつとぢやア、濟みませんぜ。戶外は、巡査の垣を、つくつてあります」

「左様か。併し、我輩は、すぐ歸つて来るから、別に心配してくれるな」

「兄さんに、その確信があれば宜しいけれど、僕は心配です」

「なアに、心配するほどの事はない。井上や風間に頼んで、跡の事は、うまくやつて貰へ」

「ハイ」

赤井は、母の方へ向いて、

「お母さん。金十郎に、いふた通りですから、決して御心配なさらず、我輩の歸りを、待つて居て下さい」

「左様かい。はやく歸つて下さいよ」

役目とはいひながら、かうした状を見ながら、人を連れて行くのは、誰れにしても厭であらうが、その職に居る以上は、すべての人情を忘れて、かゝる外はない。

「さア、行かうぢやないか」

一一一

署長に促されて、赤井は、潔よく立上つた。

「金十郎ッ」

「ハイ」

「井上や風間へ、この事を知らせてくれ」

「承知しました」

かくて、赤井は、巡査に取まかれながら、警察署の門を入つた。チラリと、見かけた人影、それは慥かに、相馬のやうであつたから、赤井の頭には、ピンと響いた。

井上、風間、八木原、みな同時に、捕はれて居たから、赤井の心に、幾分の頼みにして居たことは、空しくなつて

しまつた。

多くのものは、大漁座の方へ送られ、最も嫌疑の深いものと、重立ちたるものだけが、裁判所と警察署へ、別れ別れに收容された。

検事は、警察署へ、出張して居て、先づ赤井の下調べに、取かゝつた。

「その方は、これを知つて居るか」

と、眼の前に、突きつけられたのは、例の天誅黨趣意書であつた。

「知つて居ります」

「これは、誰が、書いたものか」

「我輩が、書いたものです」

「どういふ理由でかういふものを、書いたか」

「それを、読んで下されば、すぐ解るはずです」

「イヤ、その方から、説明を聞きたいのだ」

「別に説明のしやうは、ないのです。書いた通りの理由ですから、左様御承知下さい」

「つまり、大臣を暗殺して、政府を顛覆しやうと、考へたのか」

「左様いふ理由でも、ないのです」

「然らば、どういふ理由か」

「読んで見たら、解るでせう」

「それが、能く解らぬから、聞いて居るのだ」

「……………」

「かうして、連れて来る以上は、充分に、その邊の事は、お解りになつて居るからでせう」

「それは、兎に角、其方は、尋ねられる事に答へれば、よいのだ」

「我輩は、答ふ可き事を、答へて居るのですが、この上の事は、我輩にも解らない」

「天誅とは、どういふ意味か」

「天誅とは、天誅の事で、別に深い意味は、ありません」

「卑怯な事をいはずに、はつきり答へたらどうぢや」

「卑怯な事は申しませぬ」

「天誅の説明が、出来ぬではないか」

「君は、どう考へますか」

「此方の事は、聞くに及ばぬ」

堀検事も、どうせ、一と筋纏で、恐れ入る、男とは思はなかつたが、存外に、強い所があつて、想像以上に、しつかりして居るので、寧ろ感心した。

第一回の訊問は、不得要領に終つた。それから、他の嫌疑者について、嚴重に取調べを、つゞけたけれど、いづれ

も、證據は薄く、只、井上と風間だけが、やゝ關係があるらしく、思はれたに過ぎぬ。

新潟から、送られて来たものも、それぐに、訊問はうけたが、其筋で、見込みをつけたほどの事はなく、思ひの外につまらない事件であつた。

一同は、豫審にかけられて、取調べをつゞけたが、三十日餘りかゝつて、結局、赤井、風間、井上の三人だけを、

有罪として、公判へ移す事になり、その他は、皆放免された。

新潟の重罪裁判所へ廻すべきか、それとも、東京へ送つて、高等法院を開くべきか、といふことが、内閣の問題になつて、福島事件の前列があるから、どうしても、東京へ廻すのが至當である、といふ事に決した。

丁度、この時分に、福島事件の、高等法院が開かれて、東京でも、大評判であつた。今のやうに、新聞の勢力は無かつたが、それでも、相當に記事の上では、賑つて居た。

其處へ、赤井の高田事件が起つた、といふので、新聞紙上の賑やかな事は、一と通りでなかつた。

殊に、謀殺事件の國事犯、大臣暗殺といふ、呼び聲の響きは、可なり大きいものであつた。福島事件が終ると、すぐ、その跡で、公判を開くといふのであるから、辯護人も、武藤直中外數名の届出があつて、前評判は、非常に盛んであつた。

裁判所へ、傍聴に行くことを、娛樂にして居る人が、ずるぶんある。刑事と民事の別なく、毎日のやうに出かけて法廷入口の掲示板を見て、片ツ端から、飛込んで居るものが、却々に多い。

講釋場の畫席が、ほんの影ばかりになつて、その反面には、かうした事が、流行出したのだから、面白い。

民事の方へ、行く人と、刑事の方へ、行く人とは、その種類も、異つて居る。民事を好むものには、多少の法律趣味を解する人が多く、刑事を、専門に行くものには、傍聴趣味に、耽つて居るものが多い。

傍聴趣味といふと、ちと變に聞えるが、傍聴することについての趣味、それは、頗る面白いものである。左様しづ人に限つて、陣取る椅子の位置まで、深く研究して、どこか法廷へ入つても、同じ地位を選ぶ。

昔の講釋通が、自分の座席を、必ず一定して居ると、其心理に於て、少しも異なる所はない。

検事の、論告の調子から考へて、求刑の輕重を豫測し、判事の態度や、顔付を見て、宣告の程度を知る。そこまでに、判つて來たら、裁判の傍聴も、面白くなるに、極つて居る。

民事の方には、どこことなく、沈んだ調子があり、刑事の方には、何となく精彩があり、飄氣も、漂つて居る。

殊に、政治に關する、刑事問題ほど、人の心を、引付けるものはなく、聞いて居ても、非常に氣分が緊張する。假し、法律の上で、その事件が、如何に裁かれやうと、そんな事に頓着なく、單に趣味の上からいへば、講釋の畫席へ通ふよりは、遙に樂みは深い。

福島事件が、高等法院に、開かれた時は、裁判長が、玉乃世履といふ人で、検事は、堀田正忠なる、雄辯家が當り被告の辯護人としては、星亨、大井憲太郎、山田泰造、植木綱二郎、北田正董の五名であつたから、前評判の高いだけ、それだけ傍聴人も、大騒ぎで押かけた。

前の晩から、夜明かしの支度で大審院の門前に、澤山の人が集まつて、その騒ぎは、實にえらいものであつた。

それが済むと、間もなく、赤井の事件といふのであるから、傍聴人も、ナカ／＼の骨折であつた。

係官は、前と同じ事で、辯護人が、代つただけである。大臣暗殺の未遂といふので、河野等の事件とは、全く違つて、何となく事件に、鋭い光りを、持つて居た。

赤井の態度が、歳の割合よりか、よく落着いて居て、その陳述もテキハキして居たのは、傍聴人の氣受けが良く、係官の方でも、好感を持つて、居たやうであつた。

本來ならば、無罪となるべき事件であるが、その頃の裁判であるから、政治的の意味が含まれて、初めから有罪と極めて、取りかゝつて居るので、辯護の甲斐はなかつた。

けれども、井上と風間は、本人が確かりして居たのと、赤井の陳述が、この二人に觸れまい、として非常に努めて居たので、遂に無罪を、申渡された。

赤井は、謀殺未遂犯として、重禁獄九年の刑に處せられた。不服を申立てる餘地は、充分に在るといふので、辯護人の武藤から、いろ／＼説いたけれど、赤井は潔く服罪する、といふて、不服の申立は、しなかつた。